す此に於て民其居を安んじ大に政績あり天保元年致仕す同五年五月朔日歿す年七十九

杏所〔書画〕立原氏、名は任、字は遠卿、杏所は其號又東軒玉琤舍、香案小吏の號あり通稱長太郎水戶の人性畫を好み初め月僊に學ぶ後ち谷文晁及び應擧の畫法を追慕し又明淸の遺蹟等を研究して一家の畫風を出す當時其名傳播す又書法を趙子昂及文徵明の風を學びて後一格を出す畫く所の山水人物花卉鳥獸等皆緻密にして秀潤其妙眞に迫る世人大に之を重んず杏所一日西城下に於て町奉行筒井政憲に逢ふ二人鑣を控へともに馬上に在りて語る筒井の從士立原の馬上にあるを見て其不敬を責めんとす筒井曰く彼は文人なり宜しく方外を以て交はるべきなりと水府は幕府の連枝なりと雖ども當時宗家枝流と尊卑甚だ其禮を異にするなり杏所顯者の爲めに重んぜらるゝ此の如し天保十一年五月二十日歿す年五十六

杏雨〔畫〕帆足氏、名は遠、字は致大、幼字は熊太郎、後ち庸平と稱す豐後戶次の人、田能村竹田、浦上春琴に學び史詩を帆足萬里廣瀨淡窓賴山陽に學び弘化中禁廷の命あり大畫を作りて獻ず明治五年畫を澳國博覽會に出品し十年以後繪畫共進會に褒賞を得ること數次十七年五月十六日歿す年七十五

杏雨山房 安田米齋の別號

含雪〔書〕山縣有朋は幼名辰之助、又た小助といふ長じて狂介と改む含雪は其號、山口藩士、天保九年四月生る明治中興の元勳にして大將、大臣となり公爵を授けらる

含章齋 和田瑾の別號

沙鷗〔書画〕渡邊氏、名は周、字は士顯、通稱沙鷗又た通じて號と爲す別に飛淸閣主、東海道人の號あり文久元年十二月尾張名古屋に生る少うして恒川岩谷に書を學ぶ後ち東京に移り技益進み諸體を能くす

甫信〔書画〕狩野氏、通稱郡治、初め名は邦信、後ち甫信と改む隨川又た青柳齋と號す常信の三男なり兄峰信の養子となり就いて畫法を學びて能くす延享二年七月七日歿す年五十四

杉園 小杉榲村の號

忘筌堂 秦竹探の別號

迂農 藤森莘田の別號

日本書畫人名辭書 上卷終

信海と號す松花堂に筆傳を受く又た好みて狂歌を能くし牛菴と號す元祿元年九月十三日歿す年五十四

孝以〔書〕法幢坊孝以は八幡法幢坊の住職にして松花堂の高弟なり

孝信〔畫〕狩野氏、名は孝信、永德の次男、右近將監に任ぜらる書法を父に受けて名手の稱あり守信、尙信、安信、各別れて一家を立つ狩野三家鍛冶橋、木挽町、中橋と稱するもの是なり皆其居る處の名、元和四年八月三十日歿す年四十八

孝敬 吉村蘭陵の名

孝文 吉村了齋の名

孝肇 尾藤二州の名

孝孺 山縣周南の名

妙菴〔書〕名は幸賀、字は妙菴、細川藤孝の三男にして僧となり愛宕山福壽院に住す三條流の書を善くす

妙觀〔書〕命婦なり養老七年從五位上を授けられ天平九年正五位下に叙せらる和歌を好みて善くし頗る蘊奥を極めまた書に巧みなり

妙澤〔書〕妙澤和尙、名は周澤、龍湫と號す夢想國師の弟子にして天龍寺壽章院に住す書を善くす嘗て願心を起し日に不動尊一圖を書きて一百日此の如くすること二十餘年世に妙澤不動と稱し甚だ之を珍重す又た能く鐘馗達磨の圖を畫けり書法牧溪顏輝に似たり慶安年間

妙葩〔書〕名は妙葩、春屋と號す相國寺の開基智覺普明國師を賜ふ

妙道〔書〕釋氏なり

利信〔畫〕奥村氏政信の門人鶴月堂文全と云ふ浮世繪を書く享保年間の人

利元坊〔書〕浪花の人、僧契仲の門に入りて學び詠歌を能くす隱逸の人なるを以て其墨痕世に傳はるもの多からず

利通〔書〕大久保氏、通稱一藏、甲東と號す鹿兒島藩士王政維新に大功あるを以て參與に任じ諸官を歷任して參議兼內務卿となる明治十一年五月參朝の途兇徒の爲めに暗殺せらる朝廷追悼正二位右大臣を贈る利通文武に通じ詩文書共に能くす世に西鄕隆盛木戶孝允と併せて三傑と稱す

利和〔書〕巨勢氏、椿園と號す從五位下日向守たり千蔭に學びて國學和文を究む書も亦た千蔭に似たり天保年中

杏堂〔書〕濱田正憲、字は子徵、通稱希庵、杏堂、又癡仙と號す大阪の醫家なり幼にして畫を好み福原五岳に學び山水花鳥に巧なり

杏村〔書〕高橋九鴻、字は景羽、慶遠草堂の別號あり通稱總右衛門。美濃の人畫を中林竹洞に學び山水を能くす明治元年五月四日歿す年六十四

杏坪〔書〕賴氏、名は惟柔、字は千祺、杏坪は其號萬四郎と稱す春水の弟にして山陽の叔父なり經術に長じ書及び詩を善くす春水に後くるゝこと五年擢んじられて藩の儒員となり春水と同く學政を治む又た釋奠の禮を草し文名兄に亞ぐ晩に郡令となり數萬石の地を治む其治むる所の地方率ね荒僻に在り田磽确にして棄地多く居民鮮少に生理甚だ微尤も治め難しと爲す而して杏坪區處謀畫其力を愛まず遂に能く之を扶植

孚齋〔書〕大岡氏、養拙の門人にして能書家たり

作仙〔畫〕畫風雪舟より出づ墨畫の花鳥を能くす又山水佛像を畫く

作烟〔書〕名は戒琬、作烟と號す黃檗山の僧たり

作信 狩野之信の初名

辰齋〔畫〕名は政之助、俗稱半次郎、辰齋は其號又た柳々居と號す北齋が辰政といひし頃就きて書法を學び專ら狂歌摺物及び月次の詠草等を書きて世に稱せらる

辰宣〔畫〕北尾氏雲坑齋と號す浮世畫を書く明和年中の人

辰政 葛飾北齋の別號

辰貴 男龍の一名

辰亮 釋月峰の名

赤城〔書畫〕程赤城は明末の人なり我邦に往來すること二十餘年に及ぶ書畫を善くし我國語に通ず作る所の歌多し其一に曰ふ『習はずに書くや此の假名文字まじり今は唐でも書くや此の假名』

赤峰〔書〕脇田順、字は和卿、通稱卿右衞門、江戶の書家なり文化五年十二月十九日歿す

赤水〔畫〕渡邊昂、字は玄顆、玄對の男なり畫法を父に學び殊に山水に妙なり

赤水〔畫〕長久保氏、名は玄珠、字は子玉、赤水は其號、源五兵衞と稱す水戶赤濱村の人、學問該博最も地理學に長ず文公の侍讀となりて江戶邸にあり傍ら畫を能くし文人才子と交るを好む晩に舊里に歿す

赤城〔畫〕淸水氏、畫を能くす文久年中

赤城翁 物徂徠の別號

赤子〔畫〕越前の人北尾政美に學ぶ文政年中

赤脚子 釋明兆の別號、其弟子寒殿司に授く

邦信〔畫〕狩野氏、名は邦信、初め探秀と號し後ち祐淸と改む實は探牧の子、泰信に養はれて宗家を嗣ぐ狩野氏第十四世

邦隆〔畫〕土佐經隆の長男、畫所預りとなり從五位下に叙し豐前守に任ぜらる父の業を嗣いで畫名あり文永中の人

邦氏〔書〕藤原氏司直傳受の入甲斐守書博士たり是亦た能筆となる

佐理〔書〕藤原氏、左近衞少將敦敏の子、關白實賴の孫書を能くし兼明親王、藤原行成と名を齊しうす世人併せ稱して本朝の三蹟と云ふ天德天元中累官して參議に至る正歷中出でて太宰大貳となり正三位に進む任にあること數年宇佐の神人と爭鬪す祠官之を朝に訴ふ因て大貳を罷め京師に歸らんとして伊豫の海岸に泊す風濤嶮惡數日纜を解くを得ず一夜夢に三島神來りて社榜に書せんことを請ふ佐理謹みて諾す覺むるに及びて風恬に波穩なり岸に登りて齊戒し榜に書して去る是より書名益々世に著はる尋ぎて兵部卿と爲る卒する年五十五女あり藤原懷平に嫁す亦た書を善くし頗る父の風あり

孝仍〔書〕豐藏坊孝仍は書法を松花堂に受け書も亦風致あり

孝雄〔書〕豐藏坊の住職

和三年六月九日歿す年八十九

伯淸【畫】狩野因信、伯齊と號す素仙の男なり

伯圓【畫】狩野景信、又た友信ともいふ友益の男

伯高【畫】松岡氏、字は彦幹月甫と號す南都の人、人物に長ず文化の頃

伯雄【書】和氣氏、典藥頭たり平安の人書を能くす正德年間の人なり

伯珣【書】名は照活、字は伯珣、萬福寺二十代の住職たり後ち閑臥菴に住す

伯圭【畫】小栗氏、通稱半七、尾張半田の人、岡本豐彥の門人なり天保年中

伯繼熊澤蕃山の名

岐陽【畫】仲子氏、名は由基、字は士路、通稱は文右衞門、岐陽と號す山縣周南の門人なり明和二年六月二十五日歿す年四十五

似牧【畫】好んで彩色の花鳥を畫けり

希膺【畫】名は雲居、慈光は其號又た不昧禪師と號す妙心寺の住職なり玉潤の風を學び墨畫の山水を善くす

希材【畫】雲谷と號す性畫を好み雪舟の風を學びて其趣を得たり

希應【畫】玉澗の畫風を學び水墨山水を畫く

廷冲【畫】中山氏、字は仲光、廷仲は其名土佐の人江戶に出で儒を以て一家をなす博學多識殊に詩を能くし傍ら山水人物を畫き頗る風致あり晩年土佐に歸らんとし船中病を獲て歿す安永年中の人

男龍【畫】名は辰貴、魏の文帝の裔にして歸化の魏人なり雄略天皇の朝我國に來り遂に歸化す武烈天皇其丹精の妙を賞し姓を首と賜ふ五世の孫勤大壹尊また畫に巧みなり天智天皇之れに倭畫師の姓を賜ふ稱德天皇また之に大岡忌寸と賜ふ武烈天皇より稱德天皇に至るまで二十四朝子孫宗族みな畫名あり

采女【書】長野氏、石臥又たは左右軒と號す眞田信幸の臣也劍道に通じ又書を善くし和歌に工みなり後ち山澤に隱遁し七十餘歲にして歿す

采女正【畫】姓氏不詳、康安年中の人

采堂【畫】磯貝氏、尾張の人、天保年中

冷泉天皇【畫】萬機を扱はせ玉ふ餘暇畫を愛して揮毫せられしといふ

冷泉【畫】九條民部卿の女にして畫を好み常に念佛修業のため阿彌陀佛の像を畫けり

見山【畫】歸化の明人なり天正年中豐後の大友氏に客居す樹岩見山と稱す書法を能くす狩野永德兄弟々偶臼杵城の戶壁に畫く見山固より畫事に精し其書を見て大に之を賞し且つ畫圖の眞意を述ぶ永德等己を虛うして其教を受くといふ

孚九【畫】伊孚九、名は海有、也堂と號し又た雁川華野等の別號あり淸の吳興の人本邦に歸化す與謝蕪村池野大雅等に從つて學ぶ其の畫風趣淸秀愛すべし

孚拙【書】名は孚拙字は百䟽釋氏なり

秀文〔畫〕傳へ云ふ明の歸化人と畵を能くす越前の朝倉家に寓し曾我氏の贅婿となる依て其氏を冐して飛驒の國に住す畵法宗人の法を極め別に一格を成す人物花鳥山水を善くし最も風趣に富む世に周文と判別せんが爲め唐秀文と號せり永和中の人或は曰ふ秀文はもと其人なし故に其名ありといへども未だ其遺跡の存するを見ざるなりと又曰く秀文は禪僧なり累世畵を以て業となすと

秀竹〔畫〕岡氏、名は承篤、通稱は權平、林竹の子、元文三年四月廿七日歿す年八十三

秀衡〔畫〕藤原氏、鎭守府將軍基衡の長子なり祖宗の菩提所なる平泉の中禪寺を修理し自ら壁に佛像を描く畵風宅間派に似て風致溢るといふ文治三年卒す

秀和〔畫〕小野寺氏、名は秀和、十內と稱す赤穗侯淺野長矩に事へて百五十石を食む四十七義士の一人なり文學を好み伊藤仁齋に從つて學ぶ和歌に長じ流離迫爵の際と雖も吟詠已まず風流温籍作者の風あり元祿十六年二月四日自及して死す年六十一

秀信 狩野祖西の名

秀信 狩野宗秀の名

秀信 狩野壽石の名

秀信 狩野柳雪の名

秀信 狩野玉燕の名

秀信 狩野憲信の初名

秀信〔畫〕巨勢氏、京都の人、金岡の後裔と稱す畵を以て法橋に叙せらる文化年中

秀峰〔畫〕松尾氏、文化年中の人

秀政 狩野了乘の名

秀政〔畫〕加々美氏、通稱は清藏、狩野柳雪秀信の門に學ぶ寛永年中

秀葩 石川豊信の名

秀熙 青木南溟の名

秀麿〔畫〕喜多川歌麿の門人、文化年中

秀山〔畫〕福島氏、通稱清七郎、加賀の人、狩野派の畵家なり天保年中

秀碩〔畫〕渡邊氏長崎の人、明清の畵法を學びて一家を成す享保年中

秀石〔畫〕渡邊氏、秀碩の子、僧佚然に畵を學び人物花鳥に巧み也世或は其款なきものを誤り認めて明人の筆となす佚然秀石と稱せらる寛政年中

秀隆〔畫〕北邑氏、嘉永年中の人

秀昌〔畫〕狩野氏、柳雪秀信の子なり父に從つて畵を學ぶ寛永年中

秀宗〔畫〕狩野氏、秀昌の子、通稱は助之丞、畵法を狩野元俊に學ぶ慶安頃

秀兼〔畫〕狩野氏、秀宗の子、畵法を父に學ぶ元祿年中

村菴〔畫〕名は靈彥、字は村菴、詩文に巧なり

村泉〔畫〕池島氏、正造と稱す長崎の人、木下逸雲の門に學ぶ

佚山〔畫〕字は默隱、常足道人、又た調古菴と號す初め森修來と稱す書を蒙所に學んで能くす

別傳〔畫〕名は道經、字は別傳、黃檗派の僧なり

別江詩屋 大窪詩佛の別號

伯壽〔畫〕狩野氏、名は武信、通稱岡之丞、伯壽と號す種信の次男、永德に就いて畵法を學ぶ明

を掌て書に家脚あり因つて屢々其傳を學ばんことを乞ふ久うして許されず一日容を改め幣を修め至り請て曰く君竟に許さゞるか吾れ復た君の門に踵らずと敦直其憤懣の意面色に見はるゝを見喜びて曰く吾れ今日授受人を得たりと是に於て志頭磨書法大に進み遂に名を一時に揚げ江都に客遊す幕府命じて平の字を書せしむ適美旨に稱ふ又加賀侯の聘に應ず命じて旗號に用ふる左右の二字を書せしむ命を受けて稿を作ること累月剡藤二千張を盡くして始めて成る一日命じて即席に字を作らしむ頓首辭して曰く臣匆々に字を作る能はずと左右數々之を促す志頭磨憮然として曰く豈官の事を以て吾が節を改めんやと遂に致仕して京師に還る妙法親王亦命じて下馬の字を書せしむ歲月果さず吏督促嚴急志頭磨乃ち二箋を出して之に示す悉く下馬の字なり而して吏に謂て曰く未だ二字の完善なるものあらず臣敢て之を進むる能はずと平生好みて字を作る老に至りて衰へず燕居すれば左手を以て右手を保持す或人之を問ふ曰く運筆の際其顫動するを恐ると其書する所墨重く肉厚し特に大字に妙なり其甚だしきものに至りては方丈餘に及ぶものあり筆情縱姿成法に泥まず襟懷浩落風雷を驅逐す後世此の風神に及ぶもの少なし晩年自ら髮を髡して專念居士と號す元祿八年正月十九日歿す年七十七子晦山女照元あり浪花名家墓所集に曰く寬保元年八月十四日歿す年五十六大阪濱村葬地に葬ると或は二代あるか

志津磨【書】澤井居敬、字は史頭、穿石と號す大阪の書家なり通稱の志津磨を以て世に聞こゆ

志道軒 奥村政信の號なり其子利信も亦此號を用ふ

吳江【書】藤田憲、字は憲章、吳江は其號、世々富山侯の家臣なり幼より學を好み江戸に出でゝ藤森天山の門に入りて學ぶ天山の幕府に放たれ江戸を去るや吳江藩より召還せられ藩學の教授となる時事の惡弊を論じ之を藩侯に上書す侯之を嘉す慶應戊辰の役藩軍の參謀となり王師に從ひて兵を越の與板に進め長岡の兵と戰ひ松原山に擊つ流丸其左頰に中たる目眩み氣失して地上に倒る衆之を扶けて退く後ち數日にして瘡痍全く癒ゆ東北の諸賊みな平定に歸し明治中興の大業定まる侯乃ち吳江を召して公用人となす廢藩置縣の際請うて其職を辭し閑地に就き風月を友とし詩歌を詠じまた書を作る書はもと狩野氏の風を模す然れども是に至つて法を南宋派に取り一意專心此事に從ふ韻致益々高く風神いよ〳〵遠し明治十七年繪畫共進會審查官に擧げらる後ち天皇勅して青綠山水の一幅を作らしむ是時に方りて名聲海内に鳴る明治十八年五月二十二日歿す年五十九

吳江【書】荒木克之、字は子盈、通稱長藏、東水と號す江戸の書家なり寬政五年五月二十日歿す年六十五

吳橋【書】荒木翹之、字は公楚、吳江の子、江戸の書家なりまた青莪と號す文化八年十二月二日歿す年五十五

吳岳【書】中野氏、名は堯焉、肥前の人、文政年中

吳春 松村月溪の別號

鯨【書】大原氏、書法を柴田義董の門に學び山水花鳥を善くす文政年中の人

佛菴【書】中村蓮、字は景連、通稱彌太夫、佛菴は其號一に至觀と號す書を能くす幕府疊師の棟梁なり天保五年正月七日歿す年八十四

佛光 無學禪師の諡

佛頂【書畫】佛頂は江戸深川盥川庵の僧なり書畫を以て世に名あり寛文年中の人也

佛國 後嵯峨天皇の皇子、薙髪して僧となり無學の法嗣となる靈岸寺を開創す書に巧み也正和五年歿す

佛山【書】村上氏名は剛、字は大有、彦左衞門と稱す佛山は其號、豊前稗田の人なり幼にして詩を能くす龜井昭陽に從つて業を修め既にして京師に遊び諸名流と周旋す後ち足疾を疾み惟を稗田に下す身村里を出でずして名聲海內に振ふ明治十二年九月二十七日歿す年七十

佛心覺照國師 慧源の諡

角上【書】芭蕉の門人にして俳諧を善くし傍ら書を能くす一家の氣韻あり

完山【書】宋の毛益に學び最も妙を得たり彩色の拘子殊に妙なりといふ

忍海【書】芝增上寺の住僧なり江戸の人、字は海雲容姿は太だ美而して性葷酒を惡み曾て顧みず常に書を好み嬉戲するごとに雜書を書きて以て樂みとなす故ありて出家の志を發し屢々これを父母に乞ふ許されず遂に遁れて三緣山に上り鐵船和尚に就いて剃髮す爾後書を讀み講を聽きて宗義を修む後年敬首和尚に從つて益々智解を増し京師に遊び諸山の高僧に歷事し其蘊奥をきはむしかれども其修道の間未だ嘗て書事を棄てず最も佛書に巧みなりまた頗る篆書を能くし筆力清奇なり當時の碩儒服部南郭等と交り善し寶曆元年六月十七日歿す年六十六

忍勝【書】靈龜元年五月從六位下書師押勝姓を改めて倭書師となる

李忻【書】周文の書法を學びて鐘馗の圖を畫く大書に長ぜり

李放【書】宋元の頃の人にして歸化せしものならんか其詳なるを知らず伊呂波類聚抄に見ゆ

李蹊【書】山科氏、名は元富字は子潤、李蹊と號す醫を業とし傍ら墨竹に巧なり宮崎筠圃、御園中渠、淺井圖南と共に平安の四竹と稱せらる寶曆年中の人

李仙【書】安田氏、日向の人、狩野の書法を學ぶ天保年中

李言【書】能勢氏、狩野派の畫人、寶永年中

李林春亭 勝川春亭の別號

克明【書】關氏、其寧の男、字は子德、濆南と號す通稱は忠藏、業を父に受けて能くす行書類纂を著し其名高し天保六年四月二十八日歿す年六十八

克菴【書】八尾維德、字は季馨、通稱喜復元と喜三郎と稱す江戸の書家なり

志頭磨【書】佐々木氏、名は春、字は專林、靜菴又た松竹堂と號す七兵衞と稱す京師の人幼にして字を知らず數々人に辱めらる弱冠にして志を立て改めて藤木敦直に就て學ぶ藤木は世々朝廷の書局

亘信 狩野休山の名 **亘顯** 長谷川雪旦の名 **亘恭** 高崇岳の名 **亘敬**【畫】矢野氏、通稱は左膳肥後の人、天保年中 **亘信** 鶴澤探山の初名 **亘則**【畫】竹下氏、大坂の人、小柴守直の門人、安永年中 **亘尚法親王**【畫】知仁親王の子曼珠院宮と稱す書を狩野尚信に學ぶ元祿六年七月薨ず年七十二 **亘驥** 藤堂凌雲の名 **亘敬**【畫】森氏、通稱は鼎、別に不知齋と號す讃岐の人、天保年中 **亘恕法親王**【畫】後陽成帝の皇子、初名は覺圓、曼珠院宮、又た龍華院宮と號す書を能くし兼ねて書法に精し寛永二十年七月薨ず年七十二 **亘亭**【畫】小野氏、陸中の人、書を能くす天保年中

杜徹【畫】松巢道人と號す山水を能くして清人に似たり

汝村【畫】松川安信、半山、翠榮堂の號あり大阪の人、書家松川某の男、幼より書を好み松峯の門人となり專ら桃溪玉山等の風を慕ひ後諸家の法を得て一家をなす **汝嶺**【畫】柴田氏名は央、字は子華、通稱清八郎、汝嶺と號す江戸の人、書法を東江に學びて能くす又た經央に精通す寛政十三年歿す年四十六

君山【畫】小野氏、名は明、字は子彝、五郎と稱す君山は其號後ち薙髮して善菴と稱す業を片山兼山に受け兼ねて書を能くし又た篆刻に巧みなり **君溪**【畫】吉川氏、通稱は春助、別に益翁と號す尾張の人、義信の子なり明治十五年歿す年八十五 **君彝** 田能村竹田の字 **君美** 新井白石の名 **君茂** 貫名海屋の字 **君珪** 市川眠龍の名 **君瞻**【畫】荒木氏、通稱は愼助、眞村斐瞻の子、書を父に學びて能くす文化年中 **君錦**【畫】清田氏、名は絢、字は君錦、幼名元琰、儋叟、又た孔雀樓主人と號す小字文與、平安の人なり越前侯に仕ふ君錦は龍洲の季子なり天明五年三月二十三日歿す年六十七 **君嶺** 伊藤士善の號

快仙【畫】岩山宿鷹の圖を書く頗る巧なり **快處**【畫】攝津淨國寺の住職にして書を善くす安政年中

助之進【畫】富田氏、書を建部傳內に學びて能くす **助信** 狩野友川の名

呑響【畫】大原氏、名は翼墨齋と號し左金吾と稱す京師の人畫法一家を滅し山水人物花鳥に巧みなり奧州松前に客となり門戶を立つ門人甚だ多し其中藩士柿崎波響善く其法を得たり **呑舟**【畫】大原氏、呑響の子、名は鯤、崑崙と號す柴田義董に學び筆力勁健自ら一格を成す天保年中の人 **呑**

七畫

良風【畫】畫風は秋月を宗とす生動少からずといへども頗る奇筆なり年代不詳 **良梅**【畫】雪村の畫風あり彩墨最も麗なり曾て人丸の像を畫く世に傳はるもの少し **良全**【畫】書を能くし世に顯はる法印にして大和の人なり曾て羅漢像三十二幅を畫く傳へて大和本國寺にありといふ **良園**【畫】好んで佛畫を畫く法橋に叙せらる攝津の國多田光遍寺の開山釋空圓の像は即ち其畫けるところなりといふ **良宮**【畫】雪舟の畫風を能くす蘆鴈及び出山釋迦の圖を畫けり **良明**【畫】竹村氏、平安の人、白井廣士に就いて畫を學ぶ傳詳ならず **良善坊**【書】八幡良善坊の住職たり松花堂門人の高弟 **良賀**【畫】宅磨氏、佛畫を以て名あり法眼に叙せらる大和當麻寺に藏する處の曼陀羅は源慶とゝもに詔を受けて畫きし所なりと云ふ嘉祿年中の人 **良辨**【書畫】良辨僧正は東大寺別當の祖なり着色畫は稀なりと雖も墨畫の佛像往々世に存せり頗る能書にして唐人の風あり寶龜四年十一月十六日歿す **良親**【畫】姓名詳ならず一條天皇の朝畫を以て稱せらる曾て御屏風に畫く其上の色紙形の書は則ち四條大納言公任の筆也といふ **良齋**【畫】田中榮治、通稱多兵衞、名古屋の人、書及茶道を善くす狩野常信に從って學び黃狐と號す寶曆十三年十二月六日歿す年八十二 **良次**【畫】藤原氏、山城山科勸修寺に緣起一卷を藏す良次の畫く所にして詞の筆者は甘露寺大納言親長なり書甚だ巧妙にして大永五年三月の筆 **良經**【畫】後京極氏、九條兼實の第二子、太政大臣たり和歌に巧に書畫を能くし殊に馬畫に妙なり時人稱して普賢寺の牛、後京極の馬といひ一對の妙手となす建永元年三月七日薨ず年三十八 **良衍**【書】釋氏なり **良齋**【畫】高田氏名は榮治、通稱多兵衞又た太郎庵、良齋と號す又た源良、具三、信曉、存生齋等の別號あり名古屋の人、狩野常信の門に學び出藍の譽あり師常信之を賞し畫名を朴董孤と呼ぶ良齋常に之を畫名に用ゐしといふ又た茶道に精しく千宗左原叟に就きて其蘊奧を極む寶曆十三年十二月六日歿す年八十一 **良信**【畫】狩野榮信良信と號す光信の門人或は曰ふ永德の門人なりと **良雄**【畫】大石氏、播磨赤穗の人藤原秀卿の裔也年十五祖祿を襲ぎて內藏助と號す赤穗侯淺野采女正長友、內匠頭長矩に事へて國老となる元祿十四年三月長矩吉良義央を傷け死を賜はり國除かる良雄同志四十六人と共に十五年十二月十四日義央の邸を襲うて之を斬り以て主君の仇を報ず翌年二月四日自裁して死す年四十五性頗る書を好み時に或は揮灑自ら娛しむ **良金**【畫】大石氏、內藏助良雄の子、書を父に學び其の書く所頗る觀るべきものあり元祿十六年二月自刄す年十六

の句を認む法名は紫櫻軒智寛米僊居士

米齋【書】米僊の長男、父の業を受け又た田崎草雲橋本雅邦等に就て學ぶ

米舫【書】田口氏、字は子壽、通稱茂一郎別に蘇山外史、姑蘇佛龕主人の號あり經史金石の學及び佛典に通ず清國に漫遊すること三年研學の餘專ら書道を修め最も楷行を能くす

米華【書】山岡尚樹、字は子敬、別に小蘋艸堂の號あり土佐舊藩士、明治元年十一月生る幼時書を名草逸峰に學び後東京に出でて川村雨谷に從ひ南宗派を學び書を長三州に學ぶ

米山【書】筒井氏、清二と稱す文政年中

米元山主 僧雪舟の別號

好山【書】池田氏、通稱は又吉宮川藩の人、文政年中

好古 藤井貞幹の一名

名垂【書】澤田氏、初名は成裕、友治と稱す又た蕃後ち新右衛門と改む園中五加を植う因りて五架園と號す又た木隱翁の號あり本居太平の門に入りて國學を修む傍ら書を能くす弘化二年四月歿す年七十一

多勢女【書】村田氏、春海の女歌を善くし徒に授く

多代女【書】市原氏、奥州須賀川驛の人、市原元輔の母なり夫に後くれて能く家を修む乙二の門に入りて俳諧を能くす又た書も見るべし文久三年九月歿す年九十三

朽匏子 小野蘭山の別號

耳梨山人 加藤千蔭の號

先憂齋 藤田信の號

考槃翁 井上金峨の別號

艮齋【書】安積氏、名は信、通稱は祐助、艮齋は其號なり奥州安積郡郡山の人、幼より讀書を好み二本松藩儒今泉八木諸氏に從學して頭角を露はす十六歲の時出でゝ近村の里正今泉氏の婿となり其妻に嫌はる祐助大に發憤し翌年單身出奔し江戸に向ふ旅費乏しく艱楚を嘗め法華僧日明の拯ふ所となり遂に其紹介に依て佐藤一齋の僕と爲ることを得たり祐助刻苦勉勵且つ薪水の勞に服し且つ讀書す夜間睡眠を催すに逢へば烟草の脂を眼に塗りて自警す二十一歲より林祭酒の門に遊び業益〻進む二十四歲の時初めて帷を神田駿河臺土屋邸邊に下し徒に授く見山樓と號す日夕富士山に對するを以てなり其文を行る艶麗富贍にして自ら一家の機軸を出す四十一歲の時文略三卷を刻して公行するに及び名聲頓に海内に震ひ文章をいふもの先づ指を艮齋に屈す四十六にして初めて丹羽侯の文學となり五十三にして奥州二本松に下り藩學教授なる居る幾くならずして江戸に祇役し永田町榮螺尻に居る嘉永三年六十歲にして昌平黌教授に任じ師一齋と共に育英の任に當る萬延元年庚申十一月二十一日歿す年七十六

二日寂す年七十 **成光**【書畫】曾て閑院の障子に鷄を書く其狀貌眞に迫りて將に飛ばんとす鷄來りて之を蹴ると云ふ亦た以て其の巧妙なるを知るべし **成定**【書】駿河守從五位下たり書傳を妙佐より受け入木道正統三十四世の傳統たり遺墨世に傳はるもの稀なり **成三**【書】賴氏佛書を善くし法橋に叙せらる **成助**【書畫】木津氏、畫を能くす越前の豪農なり **成忍**【書】明惠上人の弟子となり惠日坊と號す宅磨派の畫を能くし佛像を畫けり承元年中の人 **成然**【書】僧親鸞の徒弟なり畫を能くす **成齋**【書】重野安繹、字は士德、成齋は其號舊鹿兒島藩士にして文政十年十月生る江戶昌平黌に學びて舍長となり後ち藩に仕へて功あり修史局副長編輯局編修長等に任じ文詩を能くし史學に精通せり文學博士の學位を受け文科大學教授に任じ貴族院議員たり **成能** 櫻井松聲の名 **米山人**【書畫】岡田氏、名は國、字は子彥、通稱彥兵衞、米山人と號す大阪の人、畫を好みて山水花鳥を作る筆力磊落强健なり文政元年八月九日歿す年七十五 **米齋**【書畫】黑川元愷、字は芽莖、通稱維章、別に寥俗と號す書畫に巧みなり又た俳諧を能くせり **米山**【書】倉石氏、通稱甚助、越後高田の人、法を雲泉に受けて山水を善くす **米菴**【書】市河氏、名は三亥、亦通稱に用ふ字は孔陽、米菴は其號、小左衞門と稱す安永八年亥月亥日を以て生る因て三亥と曰ふ又た小山林堂、金羽山人、百筆齋、樂齋、亦顛道人の號あり寬齋の男書體米元章を學びで別に一家の風を爲す尤も楷隷に巧みなり嘗て加州侯に客事す安政四年七月十八日江戶に歿す年八十著はす所米家書譯米菴墨談皇國州名歌西遊小草毛信遊草等あり **米齋**【書】安田氏、又た書を能くす香雨山房と號す鈴木鷲湖及び福島柳圃に就いて畫を學ぶ職を神奈川縣に奉ず明治二十二年九月歿す年四十二 **米作**【書】田口氏野州下都賀郡野田村の人、東京芝西久保櫻川町に居る仍て櫻川と號す又た米作と欸す明治六年上京し父治三郎に從ひ米穀業を助け傍ら中村晩山に就き後ち小林清親に學んで殊に狂畫に長ず又た古書古器を愛し鑑識に長ず三十六年一月十八日歿す年四十 **米僊**【書畫】久保田氏、名は寬、米僊は其號又た歌俳には錦鱗子と稱す京都の人、はじめ畫を鈴木百年に學び後ち自ら一派をなし東京に移りて門戶を開く平生遊歷を好み足跡海內に遍く又た米佛支那朝鮮滿州に遊び明治二十七八年征清の役、從軍して戰況を畫く三十三年の頃兩眼を盲す明治三十九年五月十九日歿す年五十五臨終の前日其起ち難きを知るや門人を枕頭に麾ぎて『人なみの世間相場の五十年、どうやら五年利子もつもりぬ』といふ狂歌を記せしめ又た『時鳥そのあかつきの沙羅双樹』『天地寂寞、是空是眞、有耶無耶、明月一輪』の偈を作り又自ら筆を取りて『稻妻の雫土器の別れかな』の辭世

色書あり樗屋また一翁宗藝等の號あり

如拙【書】歸化明人なり明兆に就いて書を學び終に妙手に至る山水人物花鳥に長ず本邦に宗元の風を傳へたるものは如拙の賚といふべし

如信【書】名は實惠、僧慈侶の子、親鸞の法嗣たり書を能くす正安二年正月四日入寂す年六十二

如圭【書】周文の書法を學びて山水を書くに長ぜり

如雲【書】廣島氏、維明の子なり父の風格を受けて畫を善くせり

如亭【書】柏木氏（自修して柏とす）名は昶、字は永日、柏山人と號し又如亭と號す江戸の人家世木匠を以て俸米を征夷府に受け餘贏ありて自ら衣食に乏しからざるも棄てゝ顧みず邦俗山野の人文墨を尙ばず如亭日々書畫に吟詠して唯價の高からざるを恐る得る所の潤筆は盡く之を狹斜に消費し風月の遊は老て少莊に滅せず衣服斬新努めて時世を逐ふ性酒を嗜まずと雖も好みて嫖客歌娼と混坐して時に戲談を作す蓋し食色性を成し天眞爛熳なり故に人呼びて之を狂と云ふ詩は市川寬齋に學びて大窪詩佛菊池無絃と名を齊うす始め南宗諸家を喜び後ち唐詩を宗とす如亭集二卷あり又だ四家絕句あり皆な已に世に布く四家は河、柏、大窪、池、河は上野の河子靜、柏は即ち昶なり一時詩宗從ひて唱和し其名海內に轟く昶常に四方に客遊し足跡天下に偏ねし文政二年七月八日病を以て平安に死す年五十七

如幻【書】名は道空字は如幻、蓮華寺の住職知識の名高く書をよくせり

如意【書】谷如意、名は鐵臣、字は百錬、小字は騮太郎太湖の別號あり舊彦根藩士年甫めて十四家を辭して東西に遊學す慶應三年藩の侍讀となる明治三年彦根藩大參事となり明年大藏大丞に任じ後に左院議官となり正五位に叙す七年官を辭して京都に退隱し優遊自適如意山人と號す十九年從四位に陞叙す明治三十八年十二月二十六日歿す年八十四

如楓【書】大鳥圭介如楓は其號、天保五年播摩細念村に生る年少うして江川太郎左衞門に就て洋式の兵法を究む幕府瓦解の際幕兵を率ゐて總野の地に轉戰し榎本金次郎等と函館五陵廓に據りて官軍に抗す降服の後ち諸官を累進し樞密顧問官となる詩文書を能くす

如仙【書】田能村氏、竹田の子、天保年中の人

如鬼 曾我蕭白の別號

如樵 高久靄崖の別號

如空 河鍋曉齋の別號

如寒齋 森祖仙の別號

如興【書】姓氏不詳、大阪の人、吉村周山の門人にして法橋に叙す天明年中

如來山人 細井平洲の別號

成美【書】大江氏、名は成美、本姓上田氏、伊豫守從四位に叙す蘭宛又た君山と號す大炊御門家の大夫たり專ら皇朝の上代風を慕ひ之を修して終に能手となる後ち漢風の古體を兼ね益妙なり天保二年九月二十四日卒す年八十六

成賢【書】少納言信西の孫、櫻町中納言成範の子にして眞言宗の高僧なり文筆を善くし著書頗る多し餘暇に繪畫を弄び筆力起凡白描のもの多し法德を以て僧正に陞る寬喜三年九月十

芳の門人なり明治二十三年歿す年五十一

百谷【畫】小田瀛、字は巨海、百谷と號す別號は海仙、通稱良平、長州の人、京師に出でて松村月溪に從ひ書法を學び後ち元明の古蹟を研究して書風を一變し山水人物花鳥等の設色に巧みに水墨のもの亦た風韻奇骨愛すべし世稱して一大家となす文久二年閏八月二十四日歿す年七十八

百川【畫】彭城百川、名は眞淵、字は百川、蓬洲又た八仙堂と號す伊豫の人或は曰く尾張の人なりと平安に住す元明の古跡を模寫して其妙を極め終に法橋に任ぜらる世の元人の書法を唱ふる此人を以て始とす寶曆三年八月二十五日歿す年五十六

百洲【畫】上田氏、名は公圭、字は肖孚、公長の男、大阪の人、家風を守りて能くせり

百川【畫】飯田規儁、字は季甫、通稱源四郎、初め廣澤に學び後ち董其昌を慕ひて一家をなす近世叢帖を摹すること此人より始まる明和四年十二月十日歿す年七十四

百痴【畫】名は元拙、字は百痴釋氏なり

百福堂【畫】篆刻を善くし萬年と號す美濃の書家なり曾て山水巾書塔八萬を作る依て自から八萬行者と號す

百拙【畫】名は元養、字は百拙、洛西法藤寺の開祖なり詩歌茶事及び書を能くす蘭の圖殊に多し寛延二年二月三日寂す年八十三

百年【畫】鈴木氏圖書と稱す京都の人、最も人物を能くす明治二十四年東京に歿す年六十八

百龜【畫】小松屋三右衞と稱す江戸に住し藥舗を業とす西川祐信の門人にして多く秘戲圖を書けり明和年中の人

百峰　梁川星巖の別號

如翠【畫】猪股如翠は初め鳥羽侯に書を學び大に得る所あり侯は大筆の達人なるを以て如翠も亦頗る大筆に巧みなり文化年間の人

如山【畫】渡邊定固、字は叔保、華山の弟なり書を能くす早世す

如瓶【畫】永井喜、字は政純、如瓶子、又は走帆堂と號す江戸の書家なり初め和氣由貞に就て書を學ぶ又た狂歌を能くす享保年中歿す

如雲【畫】武田氏、名は正生一に耕雲齋と號し伊賀守と稱す初名は彥九郎、水戶藩士也詩文を能くし書を嗜む夙に尊攘を唱へ元治元年藤田信等と相援けて奸黨を滅さんとす幕府兵を發して之を圍む耕雲齋情を一橋慶喜に陳せんと欲し圍を破りて京師に向ふ途中降雪の爲めに苦しめられ竟に加賀藩兵に降る因て越前敦賀に囚はれ慶應元年二月三日其徒三百二十八人と俱に殺さる年六十二明治二十四年正四位を追賜せらる

如流【畫】山崎氏名は直好通稱雛屋源助、鶴澤探山の門人にして書を能くす寶曆七年五月二十七日歿す

如春齋【畫】山本典壽狩野榮春齋の門に入りて書を學ぶ攝津の人、天明年間

如蓉【畫】福井氏、字は遐香、紫郊と號す南都の人、花鳥に巧なり文化年間

如寄【畫】歸化明人なり書法を雪舟に學び人物に巧にして神農鐘馗等の彩

竹溪 柳澤淇園の別號 **竹溪**【畫】菊川氏、大坂の人、中井藍江の門人、天保年中 **竹亭** 東久世通禧の號 **竹隱** 龍草廬の別號 **竹香居** 釋魯山の別號

老谷【畫】木原氏、名は元禮、字は節夫、初め雄吉と稱す老谷は其號、常陸土浦の人、世々土屋侯に仕ふ曾祖名は元周、祖名は元吉、父名は維章、荷亭と號す本と柴山氏、出でて木原氏を嗣ぐ其女に配して子五人を生む老谷は三男也幼にして學を好む偶々藤森弘庵禍を土浦に釋く老谷藩子弟の俊秀を以て業を其門に受く後ち昌平黌に遊び學成りて還り藩の文學となる王政復古藩の少參事に任ず藩廢せられて左院に官し史館編修に轉ず病を以て辭す疾癒ゆ埼玉縣令聘して中學師範校敎諭となし校長を兼ねしむ老谷學問淵博和漢に通じ文詩は師弘庵に矩とり書字最も之に肖たり性易直謙虛才能を以て人に誇らず其物に接する寬厚巽を立てざるもの丶如し然れども其中廉介守るところあり敢て人に阿從せず明治十六年五月二十七日歿す年六十

老山【畫】安田氏、天保元年正月元日を以て江戸に生る資性畫を好み清人胡公壽に學ぶ後遂に一派を爲し其名一時都下に鳴る明治十六年八月二十四日歿す年四十八 **老鶴** 雪村の別號 **老蓮** 鈴木芙蓉の別號 **老餐生** 久野鳳洲の別號 **老吾軒** 佐藤一齋の別號 **老龍庵** 梁川星巖の別號 **老圃** 安積澹泊の別號 **老牛居士** 安積澹泊の別號

羽峰【畫】南摩氏、名は綱紀、字は士張、八之丞と稱す舊會津藩士なり經史に邃く詩文を能くし書に巧み也明治五年京都府に出仕し文久二年藩命によりて樺太島の衞戍となり次ぎて北海道の根室舍利紋別等に代官たること前後六年慶應戊辰屢々薩長の軍と戰ふ明治七年太政官より權大主記文部省編纂係大學敎授男女高等師範學校敎授に歷任し從四位勳四等に敍せらる明治四十二年四月十三日歿す年八十七 **羽氏**【畫】荒井氏、通稱は右衞門、江戸の人、南宗畫を善くす嘉永年中

年足【書畫】石川氏、權參議となり從三位に敍せらる夙に佛門に歸依し多く經卷を書寫す其風唐人の氣を帶び太だ妙なり又畫を能くす遺墨洛西栂尾高台寺に藏す其風緻密にして吳道子に類する所あり氣韻生動皆希世の珍なり **年丸**【畫】喜多川氏、歌麿の門人なり浮世畫を畫く寬政年中

年方【畫】水野氏、通稱粂次郎慶應二年正月二十日神田山本町に生る幼より畫を好み十四歲にして芳年の門に入り傍山田柳塘に就て陶器畫を學ぶ後ち又た柴田芳洲に南畫を學ぶ芳洲歿後は三島蕉窓、渡邊省亭等に從ふ人物以外草木景色の描法を苦心研究し二十年頃より新聞の挿畫を擔任し畫名大に揚り尾形月耕と並びて新聞畫の雙璧と稱せらる四十一年四月七日歿す年四十三 **年次**【畫】中山氏、横濱の人、歌川國

來詞餘を作る者希なり竹田以て藝苑の缺典とす夙に刻苦之を學ぶ竟に塡詩圖譜を著はして世に刊布す其詩文書畫に於て悉く一時名輩の許す所と雖ども得意のものは畫を以て第一とす初め谷文晁の風を畫くと雖も後明清人の遺跡を研究して遂に一家の畫風を作す山水人物花鳥共に堪能にして其形狀明清人の筆意に伯仲す頼山陽、雲華上人皆畫を嗜む性高簡にして物に傲る然れども竹田の畫に於ては賞嘆舍かざる也竹田常に曰ふ畫は筆を用ふるの工みならざるを患へず精神の到らざるを患ふ筆を用ゆるの工みなるものは特に古人を模するに宜し精神至るものは自家一脚を立つと又當時畫風の陋俗に流るゝを嘆じ務めて世人の規矩に從ふべきを務む初め大阪に遊ぶ時に米山人と云ふものあり亦た書畫を能くす特に竹田の畫を喜びて曰く後來我が畫の眞意を傳ふべきものは唯吾子のみと其夙に名士に知らるゝこと斯くの如し天保六年八月二十六日大阪に病死す年五十九

竹採【書】秦氏、名は茂包、竹採、又忘筌堂と號す大阪の人書法一家を爲し妻も亦た書を能くす享保十五年正月八日歿す年五十八

竹山【書】中井氏、名は積善、字は子慶、竹山は其號善太と號す甃菴の長子、弟履軒と倶に宋學を五井蘭洲に受く時に出藍の稱あり執政松平定信大阪を巡視せし時禮を厚うして積善を召し經義を講ぜしめ又事務を諮詢す竹山退きて草茅危言を作りて之を上る又經史を作りて之を獻ず幕府其苦心を嘉みし賜ふに章服白金を以てす初め父甃菴懷德書院を創するや三宅石菴をして院長とならしむ石菴死す甃菴蘭洲及び石菴の子春樓相ひ繼て教授す竹山春樓に代りて院長となる寛政四年大阪大火あり書院亦た災に罹る竹山乃ち江都に往き上書して之を再建せんと請ふ幕府黄金三百兩を賜ひて土木の費用を助く庠成る學者益々進む竹山仕官を好まず徒に授けて以て樂しむ薩侯肥侯等重祿を以て聘すれども皆應ぜず老に及びて自ら澡翁と號す人となり腰腹肥大暑を憎み寒を愛す故に又た雪翁とも號す文化元年二月二日歿す年七十五履軒私諡して文惠と曰ふ

竹居士池大雅の別號

竹沙【書】女史は立原杏所の二女、畫を父に學びて能くし加賀侯に仕ふ天保年中

竹水【書】狩野文信の門人、永祿年中

竹邨【書】山田氏、名は馨肥後の人、安政年中

竹彥【書】橫田氏、通稱は靜平安政年中

竹隱齋高田敬甫の別號

竹原【書】古屋氏、土佐の人、安政年中

竹塢【書】品田氏、羽後の人、安政年中

竹痴【書】岡野氏、下野の人、文久年中

竹洞【書】中林氏、名は成昌、字は伯明、竹洞は其號、又たは太原菴、東山隱士、中澹等の號あり尾州の人、京都に住す初め書を宮崎筠圃に學び後ち元人の畫法を究めて遂に一家を成す墨竹に妙に殊に山水に長ず西陣の織工に命じて特に畫絹を織らしめて揮灑の用となす世之を竹洞織といふ嘉永三年三月歿す年七十八

竹溪【書】中林竹洞の子、其畫別に一機軸を出せり中年にして歿す世甚だ之を惜む

す介石愛石と三石の一人なり

竹舌【畫】矢野氏、書を善くして名聲高し讃岐の人

竹堂【畫】岸竹堂、名は寧、字は清夫、通稱八郎、京師の人にして書を能くす岸連山の養子なり

竹堂【畫】東氏、名は隆光、壽醉翁、又た流鶯軒と號す浪花の人、志津磨の門に入りて學び書風脱俗名聲時に聞ゆ

竹塢【書】岡島氏、名は順、字は忠甫竹塢は其號、安齋又た慧日山人等と號す冠山の男

竹窓【書畫】森川世黃、字は離吉、良齋と號す古法帖を慕ひ書を能くす又皇朝上代風を好みて模刻す書は南宋派を好み竹を畫くに長ず浪花の人天保元年十一月二日歿す年六十八

竹逸【畫】井上氏、通稱玄藏、幕府の麾下梶川與曾兵衛の臣なり人となり岐嶷夙に文武の技を修め長崎に遊びて高島秋帆に就いて西洋の火技を學ぶ秋帆の罪を獲るや竹逸天下兵制の政變復た爲すべからざるを知り飄然として思を花月に寄す鳥海山人の門に入りて絃琴を習ひ谷文晁渡邊華山の門に出入して山水の畫法を受くはじめ江戸番町に住し明治中興の際谷中に移り一草廬を結び獮猴を養ひ孤坐琴を彈ず家貧しく竹籠を提げ枯魚を賣りて以て市中を徘徊す識者之を憫む後ち東台東漸寺に僦居し骨董店を開く毫も利なし依て琵琶法師を傭ひ客をして之を聽かしめ其價を收め以て僅に口を餬す適々舊主梶川氏駿河に在りて生計に窮するを聞き心甚だ之を憂ひ乃ち其愛するところの琴を以て山内容堂侯に販ぎ若干金を得て之を懷にし駿河に至り舊主に謁して其窮を救ふ世人皆竹逸の忠愛に感じ書を乞ふもの日に多し後ち復た東都に歸り根岸鶯溪に住す明治十九年四月三日歿す年七十三

竹岡【書】細井氏、名は庸、字は君中、竹岡は其號、治郎兵衛と稱す江戸の人、家世騎士たり竹岡幼より臨池の技を好み烏石に學ぶ遂に官を辭し書を以て業とす寬政七年二月十三日歿す年八十一

竹田【畫】田能村氏、名は孝憲、字は君彝、行藏と稱す竹田は其號又た雪月書堂、補拙廬等の號あり豐後岡の人家世藩醫たり父を碩菴と曰ふ竹田幼にして學を好み詩を嗜む才思秀拔稍々長じて醫を學ぶ其志に非ざるを以て藩主特に命じて儒員とす時に年二十三是に於て東都に至り古屋昔陽岳東海に從ひて專ら經藝を改め傍ら書法を谷文晁に學ぶ是より先唐橋世濟豐後地理誌を撰し稿を脱せずして死す藩主竹田及び伊藤寬叔をして其業を卒へしむ竹田因て東都に居ること一年餘にして國に歸り寬叔と同じく其書を修む書成るに及びて藩主之を德川大府に奉呈し又竹田等に時服を賜ひて其功を賞す竹田後ち幾ならずして熊本に遊び李紫溟、大城壺梁、村井琴山等の諸名士と交り又京師に出で村瀨栲亭に就て修學し居ること二年國に歸る竹田多病世務に堪へず屢々致仕を乞ふ藩主遂に之を許し更に養老俸を賜ひて優遇す時に年三十八竹田之より復た經史を講せず優遊性を養ひ風流自から娯む數々京阪に往來し特に賴山陽、篠崎小竹、小石檉園、雲華上人等と交最も厚し竹田素より才藝多し詩文を能くし書畫に長じ傍ら喫茶香道の技に至るまで究得せざるなし本邦古

く文政三安寂す年七十四 **江雪**【書畫】紫野大德寺百八十一世たり名は宗丘、字は江雪、破鞋子、不如子、枯髏子の號あり墨畫を能くす最も雅趣あり寛文六年六月十九日寂す年七十二 **江月**【書畫】名は宗玩、糟粕子、欠伸子、破笠子、嗜禿子と號す大德百五十六世寛永二十年十一月寂す大染奥宗禪師 **竹沙**【書畫】名は主膳、竹沙と號す又た靜所と號す五十嵐元誠の二男、畫を父に學び又た當時の諸大家に就きて研究勉勵す其の技父に勝る特に水墨の山水に巧みなり其の畫けるもの專ら南宗派に屬せり **竹坡**【書畫】西白受、字は彩鄉、通稱勘右衛門、大阪に住す山水花鳥に巧み也文政頃の人 **竹翁**【書畫】勝田重則、字は陽溪一に養溪、通稱仲之丞、竹翁と號す德川家光に仕へ幕府の御用達也畫を好み狩野長信に學びて花鳥人物を善くす後ち變じて墨畫を好み雪舟雪村の風致なり或は云ふ狩野松榮の門人なりと **竹外**【書】藤井啓、字は士開、竹外は其號、別に雨香仙史と號す賴山陽に學び森田節齋と親しみ善し家世々高槻藩の名族なり竹外詩に長じ最も絕句に巧み也老儒碩學も亦た之に維服し稱して絕句竹外といふ吉野懷古の一絕汎く人口に膾炙す又た書を善くす慶應二年七月二十一日歿す年六十 **竹溪**【書】三浦氏、名は義質、字は子彬、初めの名は良能、小五郎と稱す後平太夫と改む竹溪は其號、江戶の人幼にして學を好み物徂徠に從つて學び寶永二年十二月將軍吉綱の命によりて孟子を追講す旨に稱ひて時袍を賜はる享保十八年出でゝ老中濱松侯に仕へ世子の師傅となり甚だ補佐の道を竭くす時に侃諤國政を議し執政の憚る所となる天資穎敏博識該通最も經術に長ず又書を善くし特に楷書に巧みなり寶曆六年五月九日歿す年六十八 **竹里**【書】伊藤氏、名は長準、字は平藏又以て通稱とす竹里は其號平安の人仁齋の第四子東涯の異母弟なり年十四にして父を喪ひ東涯に撫育せられ長ずるに及んで群書を博覽し最も史學に長ず享保八年久留米侯に仕ふ猶平安に居る時に年三十五竹里東到の後從ひ學ぶもの頗る衆し其人となり温和厚直能く家學を繼述す服部南郭は蘐社の高足を以て一世を雄視す然れ共竹里の人となりを稱して温厚の長者とす竹里常に謂ふ心平に氣和すれば温柔と雖も強毅奪ふ可らざるの力あり公を秉り正を持すれば迂遠と雖も透徹拘す可らざるの權あり斯の如くにして與に人物を語るべし與に世務を言ふべしと赤穗の遺臣寺坂信行と親しみ善し常に信行に聞く所を記し題して枕干小錄と曰ふ信行歿して竹里又其墓碣の文を作れり寶曆六年九月十一日歿す年六十五 **竹谷**【書畫】依田氏名は瑾、字は子長、盈科齋また凌寒齋、又三谷庵と號す江戶の人畫を谷文晁に學び山水人物花鳥を能くす天保十四年四月歿す年五十四 **竹石**【書畫】長町徽、字は琴翁、竹石は其號又た琴軒と號す讃岐の人初め凌岱に學び後ち沈南蘋の畫風を慕ひて研究し遂に一派の畫風を成し殊に山水に巧み也享保三年江戶に出づ時に増山侯雪齋其名を聞き竹石を畫きて賜る乃ち此を以て號と

ぶ後ち伏見宮貞致に仕へ明暦二年從六位上に叙し右京進に任ぜらる明年夏親王の姉將軍德川家綱の妃となる定爲之を送りて東す明年從五位下右京亮に進む定爲人となり端厚にして氣力あり甚だ補佐の道を竭くす儒學書筆讀より以下琴琵琶の技に至る迄悉く名師を延致し親王をして之を學ばしむ己れ亦力を專らにして之を學び以て委曲訓導す故を以て大に眷遇を受け累遷して内匠頭從五位上となる年五十二上書して骸骨を乞ひ髮を剃りて朴翁と號す丹羽千年山麓小口村に歸り曾祖維翁設くる所の抱琴園を修め隱居俗を絶つ恒に陶淵明を慕ひ朝夕其集を繙き手躬から歸去來の圖を寫し野田雲竹をして其辭を書せしめ之を壁間に揭げて或は琴を皷し或は笛を吹き或は茶を煮和歌を賦し或は禪を談し書畫を覽優游自適以て終ふ時に元祿十五年八月年七十六

朴堂【畫】名は祖淳、京都建仁寺内興雲菴の僧なり不動尊の圖に巧みにして遺墨博く世に傳はる

朴甫【畫】石崎氏、畫法を狩野常信に學びて能く其態を得

朴由【畫】津田氏、畫法を狩野常信に學びて能くす

朴水【畫】村田氏、狩野常信に學びて善くす

朴雲【畫】宇津氏、狩野常信の門人にして畫を能くせり

朴圓【畫】大田氏、狩野派の畫家なり常信に學ぶといふ

朴甫【畫】石崎氏、狩野養朴の門人、元錄年中

旭宇【畫】新岡氏、名は久賴、大海道人の別號あり天保九年津輕に生る年十八江戸に出て大に書學を研究す古文篆隷八分其他諸體を善くす最も草格に長ず

旭如【畫】字は旭如、蓮華と號す

旭莊【畫】廣瀬氏、名は謙、字は吉甫、旭莊、又梅暾と號す豐後の人大阪に住す淡窓の弟にして龜井昱に學ぶ文久三年八月十七日歿す年五十七

旭山【畫】上田氏、通稱は慶右衞門、天保頃

旭朗軒【畫】勝川春章の別號

旭域【畫】川上氏、名は思孝、越後の人、畫を釧雲泉に學ぶ文化年中

旭岳【畫】八木氏、通稱文七出羽の人、安政年中

江漢【畫】司馬江漢、名は峻、字は君岳、春波樓と號す又桃言、無言、西洋道人等の別號あり初め鈴木春信に學び二世春信と號す後ち又た文晁に學ぶ時に洋畫未だ開けず獨り江漢長崎に到りて洋畫を學び油繪及び銅板の畫を製す其花押洋字を用ふ實に本邦洋畫を作るものゝ率先者なり文化の始め錦帶橋の圖を油畫に寫して淺草觀音の堂に揭ぐ衆之を奇とし觀る者堵の如し人あり曰く清淨の伽藍に南蕃の畫を揭ぐるは不可なりと因て終に之を撤す文政元年十月二十一日歿す年七十二

江城【畫】松橋純直、字は埜逸、江城と號す彦根の人、能書の聞えありはじめ詩を池無絃梁川星巖に學ぶ城南に隱栖すること八年既にして京師に入り山崎觀音寺に寓す詩名大に都下に鳴る安政三年三月胸痛を患ひ咯血して歿す年四十四

江西【畫】僧江西、名は龍派、文溪と號す其居を靈泉と稱し又豩翁と稱す小栗宗丹に學び多く觀音像を描

て之を敎導輔育し光起をして中興の名手と稱するに至らしむ寛永年中

光輔【書画】土佐光則の門人、寛永年中の畵家なり或は曰ふ岩佐又兵衞土佐の門に在りし時の稱なりと

光竹【書画】菱川氏、通稱吉右衞門、安房の人、縫箔を業とし又た畵に巧みなり彼の師宣の父は此人なり寛文二年四月病みて歿す

光影【書画】富田氏、松村景文に學ぶ文政年中

光明【書】花野氏、土佐光吉の門人なり寛永年中

光親【書画】土佐光起の二男なり畵法を父に學びて能くし薙髪後了山と說す寛永年中

光宣【書】烏山光宣は尊朝法親王流の書を能くす准大臣從一位に至る慶長十一年十一月薨ず年六十三

光廣【書画】烏山光廣は藤原氏、父は光宣、天正九年叙爵せられ侍從、左右少辨、藏人に歷任す慶長四年左中辨に任じ藏人頭に補し正四位上に叙せらる右大辨、參議に遷り從三位に叙せらる後ち遊蕩姦淫の罪を以て大炊御門賴國、猪隈敎利、花山院忠長飛鳥井雅賢、難波宗勝、松本宗信、德大寺實久等と各々海島に流竄せらる而して光廣、實久の二人殊に其罪を宥められ十六年參議、左大辨に復任せられ明年權中納言を歷て元和二年權大納言に至り六年正二位に進み寛永十五年七月薨ず年十十年論して法雲院と號す光廣和歌を細川幽齋に學びて悉く其秘訣を受け又た書を能くするを以て一世に名あり畵も亦た人物草花に長じ多くは自詠の和歌を其上に題せり

光國【書】土佐永春の子、備後守に任ず書を以て世に名あり應永年中の人

光圀【書画】德川氏、初名は德亮、又た觀之、後ち子龍と改め日新齋と號す又た常山人率然子、梅里等の號あり寛永五年六月十日水戶に生る天和三年二月宸奎を賜ひ備武兼文絶代名士と曰ふ元錄三年權中納言に任ぜらる十月致仕し翌年居を久慈郡西山に卜して隱栖し西山と號す同十三年十二月薨ず年七十三、天保三年從二位權大言を贈られ明治二年十二月從一位を追贈せられ同三十三年十一月十六日更に正一位に追陞せらる光圀時として自賛書を作る氣格高逸觀るべきものあり常陸磐舟山願入寺に藏する釋迦、文珠普賢の三幅は其書く所也

光元女【書画】土佐光之の女、幼にして父を喪ひ書法を叔父光吉に學びて能くす天正年中

光格天皇【書画】諱は兼仁、典仁親王の第六子、安永八年禪を受け大統を繼がせらる時に九歳なり學和漢に通じ書畵を巧みにせらる文化十四年位を皇太子統仁親王に禪り在位三十七年天保十一年十一月崩す御年七十

光明皇后【書】藤原不比等の第二女也諱は光明子、聖武帝儲貳の時納れて妃と爲す天平元平冊して皇后となす體貌姝麗にして光明あるに似たり故に名くと書を好みて善くせらる寶字四年六月崩ず年六十

朴翁【書画】安藤氏、名は定爲、新五郎と稱す了翁の子、丹波千年鄕小口村の人、幼にして父を喪ひ嫡母河合氏勸督書を讀ましむ弱冠にして京に行き冷泉爲景に事へて經義を問ひ木下長嘯に就て和歌を學

と）中ごろ道風佐理の遺跡を尋ね遂に一家の風を興し古來未發の體を顯はす其能書なること三蹟に亞ぐ故に當年平安三筆（近衛信尹、松花堂昭乘及び光悦）の一人と稱せらる又瓷器の陶造に秀づ茶碗を製する毎に世人爭ひて求む又漆器蒔繪に巧み也其製作諸職工の意外に出で見るもの驚嘆せざるなし兼ねて畫を好み海北友松を師とし又土佐の風を交へて乍ち逸格を顯はす人稱して光悦風の畫と曰ふ其遺跡草木多くして人物鳥獸は少なし墨畫稀れにして設色の濃畫多し傍ら織部流の茶道を好みて雅趣を得たり洛北鷹峰は丹波と通ず山嶺層重盜賊群居常に行客を惱ます寛永中光悦之を賜はりて家居す群賊悉く遁れ去る光悦自ら了寂院と號し晩に一寺を鷹峰に建てゝ光悦寺と號す光悦資性寡欲鷹峰に閒居するに及びて悉く佳品を親戚朋友に割與し自から粗品を擇取し之を以て茶を喫して自から娯しむ其言に曰く寶器若し損壞を致さば人をして樂まざらしむ豈尋常瓷碗の償ひ易きが若くならんやと又鷹峰の邊に鑛坑五所を鑿つ人民其餘澤を受くるもの少なからずと云ふ寛永十四年二月三日歿す年八十一（一說に八十と云ふ）鷹峰光悦寺に葬むる

光甫【畫】本阿彌光甫、空中齋と號す光悦の孫光瑳の子にして祖翁の跡を學び丹精の道に精し常に茶香を好み能く陶器を製す天和二年七月二十四日歿す年八十二

光友【畫】德川氏、尾張侯、大納言書法を探幽に受け多く墨畫を作る氣韻高し元錄十三年薨ず年七十六

光貞【畫】德川氏、紀伊侯、大納言書法を探幽に受け妙手に至る墨畫多し寶永二年薨ず年八十一

光琳【畫】尾形氏（一に緒方に作る）名は方祝、又道崇光琳は其號、又寂明、澗聲、伊亮、青々堂、長江軒等の號あり染物を業とし俗稱を雁金屋藤重郎と曰ふ又曰く勝六と稱すと緒方惟義の裔宗謙の子京師の人後ち江戸に寓す初め狩野常信に從つて畫法を學び野村宗達の風を慕ひて其の趣を得たり又古土佐の畫を慕ひ畫法を研究して和畫の名手となる後ち深く本阿彌光悦の風を慕ひて書畫漆作蒔繪に至る迄悉く光悦の風に傚ふ亦宗達の風に髣髴せり後ち遂に新意を出して一時名を振ふ又茶道を宗佐に學びて特に漆器の描金に妙を得たり硯箱茶器等の製作最も妙なり其印籠を作るや其形を光悦の意匠に採り描金の法を已れの工夫に採り螺鈿を以て地を作り金粉之を塗る裏面又總て金地となす嘗て梨地を用ゐず銘は其蓋の裡に蠅頭の細筆を以て署すといふ又畫く所の花鳥人物山水草木鳥獸悉く金銀泥を雜えて設色するに美麗ならざるはなし特に草花の彩色に巧みなり或は水墨にて畫く時は畫中に金泥を流して意表の趣きをなす偏に光悦の畫風より出でたる圖多し粗密共に一種の風韻ありて大に賞譽せらる後世遺跡に名畫あり悉く光琳百圖と云に出づ實に一大名家なり享保元年六月二日歿す年五十六一に曰く六月二日歿す年六十二光琳歿するに臨み其の印章を擧げて門人何帛に授く何帛の畫に光琳の印を用ふるは則ち此が爲めなりといふ

光純【畫】戶田氏、泉州堺の人、土佐光吉の門に畫法を學ぶ土佐光起幼にして父を喪ふ光純因り

極め名海内に振ふ是れより先き土佐家の畫漸く衰ふ光起出でゝ一時に之を挽回す元祿四年九月二十五日歿す年七十五

光成【畫】土佐光起の男畫所預となり從五位下に叙し左近衛將監に任せらる後ち薙髪して常山と號す寶永七年三月二十一日歿す年六十五

光祐【畫】土佐家光成の男なり名は光高畫所預となり正六位下に叙し左近衛將監に任せらる寶永七年七月七日歿す年三十六

光芳【畫】土佐家光祐の男、畫所預となる十七歲正六位下に叙せられ三十八歲正五位下に進み左近衛將監に任せらる大藏大輔を經て左近衛少將に陞る官命を受けて數々畫を進む薙髪して常覺と號す安永元年八月二十七日歿す年七十三

光淳【畫】土佐光芳の男正六位下左近衛將監に叙せらる明和元年父に先だつて歿す年三十一

光貞【畫】土佐光淳の弟、畫所預となり從五位下に叙し土佐守に任せらる文化三年二月四日歿す年六十九

光時【畫】土佐光淳の男從五位下に叙し左近衛將監に任せらる父祖の業を嗣ぎて名手たり文政二年八月十七日歿す年五十六

光祿（トミ）【畫】土佐光時の男從五位に叙し左近衛將監に任せらる

光孚【畫】土佐光貞の男畫所預となり從四位下に叙し土佐守に任ぜらる父の業を嗣ぎで名手と稱せらる嘉永五年四月五日歿す年七十一

光清【畫】土佐光孚の男從五位下土佐守たり父の教を受けて畫を學ぶと雖も古代の風格を研究し以て其畫風を一變せり弟光文と共に當時に賞せらる文久二年十一月三十二日歿す

光文【畫】土佐光孚の男、宗家光祿に嗣なし因りて之を嗣ぎ從五位下左近衛將監となり古風を慕ひて畫才あり明治十二年十一月九日歿す年六十八

光章【畫】土佐光文の子、畫法を父に學ぶ明治八年歿す年二十八

光教【畫】狩野氏、修理亮と稱す山樂の男なり其畫風よく家法を守る

光定【畫】藤原氏、康平年間大和教修寺の縁起を書く其奥書に大納言とあり按ずるに公卿補任に康平の時代に光定といへるものなし嘉永年間光定ありて參議に任せらる或は此人か

光行【畫】藤原氏、畫所預となる光源院義輝の元服するや光行其の櫛及び手巾に書くと云ふ

光範【畫】藤原氏、繪所預兼文章博士に任せらる嘗て大嘗會の屏風を書く應保年中

光永【畫】中原氏、内匠少允兼繪所預となる淡畫に妙を得たり應保年中の人

光康【畫】巨勢氏第十三代の人なり永有の子、畫を以て其の家を繼ぐ嘗て地藏尊靈驗の繪卷物を描き兼好法師人に贊辭を加ふ正應年中の人

光繼【畫】土佐家の族なり年代事歷詳かならす

光悅【書畫】本阿彌氏、太虛菴、自德齋、空中菴、又た德友齋と號す佐々木氏の族、本氏は多賀、父を宗春と曰ふ本阿彌光心養うて己が女（後妙秀尼と稱す）の婿とす光心家世刀劍の鑑定磨礪淨拭等を業とす光悅皆之を善くす而して殊に淨拭に長じ傍ら書を能くす初め近衛關白龍山公に就きて御家流の手跡を能くし（或は云ふ粟田宮尊純法親王の弟子なり

數種あり土佐家第四世の人

光秀【畫】土佐吉光の長子、從五位下飛彈守たり畫に巧みなり事歷歿年詳ならず蓋し元應元亨中の人

光正【畫】土佐光吉の二男、從五位上に叙し越前守に任ぜらる畫を父に學び名手と稱せらる殊に蘆手畫に巧みなり元亨年中の人

光正【畫】狩野氏元信に畫を學ぶ墨畫布袋の像を描けり永祿年中

光顯【畫】土佐隆兼の男、畫所預となり土佐權守を經て越前守に進む父に學びて其技絕妙なり別家より出でゝ宗家吉光の後を繼ぐ其畫名族巨公の賛あるもの多し貞和年中の人

光重【畫】土佐行光の長子、正五位越前守に任ぜらる繪所預となる明德年中の人

光弘【畫】土佐光重の男（或は云ふ行廣の次子と）畫所預となり從五位下に叙し土佐權守中務丞に歷任す畫風家法を守りて巧み也文安年中

光季【畫】土佐光弘の男、飛彈守に任ぜらる歿年月詳ならず

光周【畫】土佐光重の男、家を繼ぎて畫所預となる從五位下に叙し刑部少輔に任ぜらる弱年にして歿す

光信【畫】土佐廣周の子なり光長、光起とゝもに土佐の三筆と稱せられたる人にして早く畫所預りとなり右近衛將監を經て刑部大輔に進み從四位下に叙せらる博く古畫を修し硏精練磨遂に自ら一家をなす當時狩野元信とゝもに其名天下に鳴る人物花鳥を善くし殊に雲上の有職に長じ能く衣冠束帶の古風を模す故に後人之を模範とす又宗祇に就いて和歌を學び妙手の譽れあり大永五年五月二十日歿す年九十二遺跡著明のものにして現今尚存するものあり

光信【畫】狩野氏、初め四郎二郎、稱し後ち右京進に改む永德の長男なり畫樣父の意に適はざるを以て家法を得ず刻苦精勵父歿してより諸門生に就きて家法を受け又た宋人玉澗の筆意を學ぶ其筆力父に及ばずといへども氣韻の超越を以て名あり世に古右京と稱するは此人なり初め豐臣太閤に仕へ後ち德川家康に召されて東行し慶長十三年六月四日勢州桑名驛に歿す年四十八、狩野氏第六世にして京都相國寺法堂の天井に在る蟠龍の圖の今尚ほ存せるものは則ち光信の畫く所也

光茂【畫】土佐家光信の男畫所預となり正五位上に叙せらる左近將監を以て刑部大輔に任ぜられ土佐守を兼ね畫は父に學びて技は父に讓らず享保中の人

光元【畫】土佐家光茂の男畫所預となり天文十年二月從五位下に叙し左近衛將監に任ぜらる永祿十二年正月十三日歿す時に年三十遺蹟少し

光吉【畫】土佐光茂の二男初名は久吉又刑部と稱す畫所預となり從五位下に叙せられ左近將監に任ぜらる父に學びて名手の聞えあり屢々宮中に召されて畫を作る後剃髮して久翌といふ慶長十八年九月五日歿す年七十五

光則【畫】土佐光吉の男なり源左衛門と稱し又右近と云ふ畫所預となり故ありて官位なし寛永十五年正月十六日歿す年五十六

光起【畫】土佐光則の男土佐筆の一人なり畫所預となり從五位下に叙し左近衛將監に任ぜらる後薙髮して常昭と號す法眼に任ぜらる人物花鳥を善くし妙を

圭吮【畫】名は友利、書を周文に學びて能くす

圭齋【畫】大西允、字は叔明、畫を谷文晁に學びて花鳥を能くす江戸の人

守禮【畫】山本氏、名は守禮、字は子敬、探春齋又た獨亭と號す通稱數馬、本と龜岡氏、山本氏を繼ぐ圓山應擧に學びて能く其風を得たり寛政二年二月二十六日歿す年四十

守一【畫】泉氏、通稱吉兵衞、春香亭と號す世俗呼んで日吉といふ江戸の人初め等琳に學び後ち狩野探信の門人となり守の字を許さる武者繪を能くす歿年月詳ならず

守國【畫】橘守國、楢原氏、名は有税通稱徳兵衞後ち素軒と號す畫を鶴澤探山に學び頗る狩野家の骨法を得て一機軸を出だせり嘗て土佐狩野の古圖を模寫し彫刻して畫學本とす狩野家之を聞き我家の秘法を漏らせりとなし鶴澤氏を責む因て師家を破門せらる最も密畫に妙を得たり寛文元年十月十七日歿す年七十

守景【畫】久隅氏、無礙齋、又た無下齋と號す通稱半兵衞、守景は其名、一名は一陳、加賀の人京師に住せり初め探幽の門に入りて畫を學び後ち雪舟の風を慕ひ墨畫に巧みなり晩年茶法を藤村庸軒に學び清寂を樂む是より畫亦益雅朴にして奇韻あり世人大に之を賞す元祿年中歿す

守景【畫】山本氏、名は一章、字は子文、欽亭と號す京師の人畫を圓山應擧に學びて後ち一格をなす天保五年歿す

守常【畫】安井氏、字は卜山、春調齋と號す浪花の人、山水を能くす文化年中

守拙【畫】周文に學びて水墨の觀音を能くせり

守敏【畫】京師西寺の住僧にして畫を能くす畫く所十六應眞の圖あり

守潔【畫】雪舟の法を學びて福祿壽の圖を畫けり

守安【書畫】木股氏、通稱土佐、巖間と號す彦根公の長臣なり武功を以て顯はる書畫及び和歌を能くす寛文十三年三月十日歿す

守直【畫】小柴氏、通稱隼人、探春齋又た林幽齋と號す大阪の人畫を鶴澤探山に學びて善くす享和元年七月十七日歿す

守邦 狩野探牧の名

守部【畫】橘氏、伊勢の人、通稱北畠源助、池庵と號す江戸に出て、一家の學を唱ひ大に世に鳴る嘉永二年七月歿す年七十世に伴信友、平田篤胤、香川景樹橘守部これを天保の國學四大家と稱す

光長【畫】春日氏、隆親の男、畫所預となり從四位下に叙し越前權守となり後ち刑部大輔に任せらる父に畫法を學び巧みに佛像を畫く勉勵刻苦終に妙技神に入り中興の名手と稱せらる嘗て勅を奉じて佛刹靈驗の圖奇事の草子等を畫く又た年中行事の圖六十卷を描きて世に稱せらる人物花鳥精緻巧妙を極め慶恩、古光、行光、行秀と併せ稱して和畫の五筆といひ又た光起、光信、及び光長の三子を稱して土佐の三筆といふ其の名手たること推して知るべし文治年中の人、京師に歿す遺蹟の著明なるものは伴大納言草子、三十六歌仙殘缺、兒文殊、彦火々出見草子、病草子、京大報恩寺釋迦堂はめの畫、餓飢草子、吉備入唐草子等の外

十二にして僧となり諸國に遊歷し名勝舊蹟を探る性畫を好み人丸の像を畫く生氣活動す人丸の像を畫くもの之を以て嚆矢とす後世以て粉本となす長承四年二月五日寂す年七十九

行智【畫】比叡山の僧なり藤原隆能の二男、畫を能くし繪所預となる

行海【畫】藤原基光の男、僧珍海の弟なり叡山に住し傍ら畫を能くす

行厚【畫】山口氏、初名は居題、上賀茂の社家なり業を岡村法考に受け其秘訣を傳へられ甲斐守書博士に任せらる天保九年四月十一日卒す年六十六

行貞【畫】森氏豐前の人畫を能くす月航と號す文化年間

行誠【畫】增上寺の住職なり福田氏字は晋阿、建蓮社立譽と稱す幼にして小石川無量山に投じ剃染就學し稍々長ずるに及びて京師に遊び嵯峨の立道隱士に遇ふ領解練行頗る得る所あり既にして小石川に還り鸞州上人に隨て宗乘及び相宗の蘊底を盡し又た東叡山の慧澄和尚に參して天台及び倶舍の奥旨を極む行誠遁れて處靜院に入り又た清淨心院に隱る然れども大衆追隨して講延虛日なし會々兩國の回向院主席を虛うす檀信擧りて行誠に歸依し懇請已むなし行誠遂に之に應ず明治初年諸宗碩學共同して一社を結び名づけて同盟會といふ乃ち行誠を推して教頭となす尋ぎて大教院立つ又た教頭となる遂に傳通院に遷り增上寺に進み大教正に補す時に明治十二年なり十九年三月微恙あり深川本誓寺の隱房に遁る翌年三月總本山知恩院門主となる此年十二月病に罹る二十一年一月傳宗傳戒の要領を述作して後鑑に貽す三月に至りて稿成る名づけて傳語といふ四月病重し二十五日寂す年八十三

安信【畫】狩野家初め四郎二郎と稱し安信と號す又牧心齋、靜閑子、了浮齋の別號あり通稱右京法眼に叙せらる孝信の第三子なり畫法を兄探幽及び尙信に學び筆力遒勁頗る家法の妙を得たり又古書の鑑定を能くす時に狩野貞信歿して嗣なし出でゝ宗家を嗣ぐ世に中橋狩野と稱す其居江戸中橋に在るを以て也貞享二年九月四日歿す年七十、狩野氏第八世

安仙【畫】狩野春信初名は左門安仙と號す松榮の門人なり享保三年四月二十四日歿す

安生【畫】劉安生名は元育字は君毓安生と號し又壽山、長養齋と號す江戸の人諸葛藍の門人花鳥を能くし又行書に巧みなり寛政二年三月九日歿す

安守【畫】殿村氏、伊勢松坂の人和歌を能くし書に巧みなり

安室【畫】名は宗閑、伴狂子と號す大德百七十六世正保四年四月寂す年五十八

安泰【畫】中島氏、京都の人、天保年中

安藝【畫】巨勢宗義の女、後白河天皇に後ち出でゝ右京大夫に嫁す書を能くす

安信【畫】歌川國丸の門人、元治年中

安秀【畫】歌川國丸の門人、文久年中

安重【畫】歌川國丸の門人、文久年中

安常【畫】歌川國丸の門人、文久年中

安清【畫】歌川國丸の門人、文久年中

安峰【畫】歌川國丸の門人、文久年中

安長【畫】佐渡山氏、琉球の人、安政年中

書賛多くは自詠の歌を書す安政元年八月二十八日歿す年五十八

有所【書画】山本氏名は譽、上野國碓氷の人、明清の書法を研究して一派をなし又篆刻を能くす天保年中

有顧亭 十時梅崖の別號

行房【書画】藤原氏、從二位經尹の子なり家を一條と號す其先き行成以來世々書を以て顯はる行房又巧手なり笠置の陷るや行房脱し去り後醍醐天皇の隱岐に幸するに從ふ供奉はなはだ謹む天皇深く之を眷愛す會々光嚴院の位に即かるるや悠基主基の歌を屏風に書するものを撰ぶ京都其人なし是に於て議して行房を召還せんと欲す天皇之を聽いて悵然たり明年車駕京に歸る行房之に扈從す延元中妹夫新田義貞と共に金が崎に據る城陷りて陣歿す

行廣【書画】土佐守に任せらる繪所預たり

行秀【書画】繪所預修理亮に任ず

行智【書画】藤原氏、隆能の子なり書に巧みなり

行秀【書画】藤原氏繪所預修理亮に任ぜらる

行知【書画】春日氏、隆親の弟父隆能に學びて書を善くす

行安【書画】藤原氏、大嘗會主基の屏風を書く

行廣【書画】藤原氏、備後守藤原光國、太夫法眼永春及び行秀等と共に融通念佛の緣起を書き傳へて京師嵯峨の清涼寺にありと云ふ

行秀【書画】春日氏、土佐行廣の男、後ち春日と改む別に一家を爲す從四位下に叙し修理亮大藏大輔に任ぜらる能く家法を守りて書を能くす永享二年勅を奉じて弟光弘とともに大嘗會の屏風を書く

行長【書画】春日氏隆親の三男土佐家の士族左近將監に任ぜらる書を父に學びて能くせり承元年中の人

行光【書画】土佐行光は經隆の男（或は吉光の子となす）書所預となり從四位下越前守に任ぜらる延文年間の人

行廣【書画】土佐家行光の長子從五位下に叙し土佐の守に任ぜらる又越前守に轉ず家業を嗣ぎて繪所預となる後ち剃髮して經元と云ふ永和年中の人

行季【書画】世尊寺權大納言一條實久の子にして世尊寺行康の後を受け諸官に歷任して刑部卿兼侍從に至り正二位に叙せらる書を善くするを以て世に名あり天文元年薨ず年五十七

行成【書画】藤原氏、右近衛少將義孝の長子なり祖父伊尹養ひて子となす初め侍從より累遷して權大納言となる性直諒にして才藝多く最も書法に長ず兼明親王、藤原佐理と並び稱す一條の朝勅を奉じて宮闕禁門の傍に題す帝褒賞して特に其位を進む時に勅して僧空海書する所の美福門院榜を修飾せしむ長保中外祖源保光の舊宅を捨てゝ世尊寺を創す後世行成の書法を傳へて世尊寺家様と稱す萬壽四年薨ず年五十六

行忠【書画】巨勢行忠は有久の子、其畫みな支那風にして筆力絶妙なり十六羅漢を畫けり文和年中の人

行平【書画】在原行平は、阿保親王の第二子なり始めて在原の姓を賜はる正三位に叙せられ中納言に任ず幼より丹青を好みて能くす寛平三年薨ず年七十六なり

行尊【書画】參議基平の子、年

ふ休甫乃ち虎を書きて去る後ち住僧其鬚なきを訝る他日休甫再び來る住僧之を語る休甫大に驚き直に虎の側に一個の鑷子を書きて走る其奇行概ね此くの如し

休古(畫)鈴木氏、狩野常信の門人

休心(畫)羽賀氏、名は隆信、初め畫法を狩野玉燕に學び後ち狩野主信の門に入る天祿年中

休庵(畫)椿椿山の別號

休補(畫)狩野氏、永碩一信の子なり休補は其號、畫法を父に學ぶ寶曆年中

休山(畫)狩野氏、名は德信、休補の子なり父に學ぶ寶曆年中

共位(畫)木下氏、字は子與、月洲と號す紀州の人文化年間

共樵(畫)織田氏、尾張の人、安政年中

舟川(畫)狩野令信、又は晴信と云ふ舟川と號す即譽の門人

舟明(畫)樋口氏畫を以て法眼に叙せらる大阪島之内に住す後ち江戸に移る又た根付を彫刻するに頗る巧妙にして時人の驚嘆するところとなる

有宗(畫)巨勢家第十代の人、民部大輔に任せらる益宗の子なり、保元年中

有家(畫)巨勢家第十四代の人、紀氏、光康の子にして畫を以て家を嗣ぎ名手の稱あり元亨年中

有康(畫)巨勢家第十五代の人、光康の次子、畫を能くするを以て兄有家の後を嗣ぐ建武年中

有行(畫)巨勢家の支族、掃部介に任せらる文應年中

有久(畫)巨勢家の族なり有行の子、從五位上に叙せられ左近將監采女正壹岐守に歴任す最も佛像に巧みなり延寶年中の人

有忠(畫)巨勢有行の子、修理亮と稱す弘化年中の人

有重(畫)巨勢有忠の子正安年中の人なり

有房(畫)姓氏詳ならず繪所預りとなり前加賀權守を兼ね建長內裏を造るに當り勅命を奉じて之を畫かんと欲す舊本の據るべきものなし偶ま人あり鴨居殿の倉より金岡の畫本を出して之を示す有房依りて以て畫くことを得たりと

有隣(畫)德力氏、名は良顯、字は子原、有隣は其號、別に恭軒と號す元文三年五月十日歿

有煌(畫)森氏、字は仲光、春溪と號す巧みに獸類を畫く文化年中

有年(畫)江戸の人、名は實信、一苗齋と號す通稱は一郎

有景(畫)宮脇氏、名は素行、法橋に叙せらる畫風狩野家より出づ

有竹(畫)畫を野呂介石に學びて殊に山水に巧みなり紀州の人、天保年中

有[illegible](畫)藤原氏、大嘗會悠基の屏風に畫く繪所預となる

有德(畫)海北氏、京都の人文化年中

有功(畫)千種氏、正三位有條の二男、千々酒舍と號す文化四年從五位下に叙し文政五年左近衛權少將に任じ尋ぎて權中將正三位に進む和歌を能くし藤原忠良、有栖川織仁親王、久世通理等に學び又た景樹、[illegible]鷹等と交り一種の風を詠ず故に冷泉、飛鳥井兩家と好からずといふ畫は景文に學び

吉野【畫】實の名は德子、父は元西國の武士松田某を以て業とす已にして父母共に世を辭す德子寄託する所なきを以て島原の娼家彥左衞門の遊女となり浮舟と稱す嘗つて廓樓の櫻花爛熳たるを見て『こゝにさへ嘸なよし野は花盛』と是を以て人呼んで吉野といふ和歌に巧みに書を能くしまた管絃を善くす後ち豪商灰屋紹益のために身を贖はれ遂に其妻となる性酒を好む其藏する所の盤の盃甚だ著名なり寛永八年八月二十五日歿す年三十一

吉繼【畫】大谷氏書を能くし豐太閤の像を寫す三百年前の人

吉信【畫】狩野吉信、源三郞と稱す狩野永德の長男、父に書法を學びて能くす慶長年中の人

吉光【畫】土佐經隆の三男佛畫を能くす又雜畫に巧みにして妙手の譽あり長兄邦隆の後ちを嗣で畫所預となる從四位下に叙し刑部大輔に任せらる正安中の人

吉光【畫】春日氏、光長の男なり能く神釋人物を畫く嘗つて伊勢八幡宮の神像を畫く日蓮上人之に題贊す其氣韻活動す今駿河國沼津妙海寺に藏せりと云ふ

吉久【畫】中原氏、嘗つて大嘗會の時勅を奉じて悠基の屛風を畫き作繪をなす作繪とは彩色の至つて濃きを稱す吉久之に妙を得たり

吉次郞【畫】盛雲に從ひて學び後ち遂に妙手に至れりと云ふ

吉村【畫】伊達氏、仙臺の領主なり陸奧守左中將に任ず吉村夙に文武の道に志しまた諸藝を好み且つ風雅の道を娛しむ會て狩野常信を師とし繪畫を學ぶ其畫く所水墨の山水設色の花鳥あり其落款には左中將吉村とあり寶曆元年十二月二十四日歿す享年七十二

休白〔一世〕【畫】狩野長信初め源七郞後ち七左衞門と稱す松榮の五男、剃髮して法橋に叙せらる承應三年十一月十八日國す年七十八

休白〔二世〕【畫】狩野氏、名は昌信初め名を左衞門と稱す休白は其號、一世休白の男書法を父に學ぶ法橋に叙せらる寛文二年正月八日歿す

〔三世〕【畫】狩野氏、名は壽信、休白は其號、二世休白の男、家法を守り書を能くす

休德【畫】狩野氏通稱庄兵衞と稱す永德の門人

休山【畫】狩野是信、內記と稱す休山は其號、淸信の男なり父に學びて其筆意を得たり

休碩【畫】狩野氏、名は友信宮內と稱し後ち左兵衞門と改む休碩は其號、昌信の子家法を安りて能く畫けり享保六年九月五日歿す

休宅【畫】狩野里信、林宅一に休琢と號す休圓の三男書法を父に學びて能くす

休圓【畫】狩野爲信、休圓と號す家法を守りて能くす

休圓【畫】狩野淸信、內記と稱し休圓と號す昌信の弟、父長信に就いて學び其家法を守る或は曰ふ昌信の長男と

休佐【畫】小林氏、畫法を狩野常信に學ぶ

休甫【畫】津田氏、弱冠にして宇喜多氏に仕ふ後ち國亡びて復た仕へず伊豆の海邊に住し剃髮して俳諧の連體を唱へ或は琴棋書畫を作る諸國に歷遊し嘗つて大坂に至り天滿栗東寺に詣づ住僧喜びて之を迎へ新造の杉戸を以て畫を請

在中【畫】原致遠、字は子童、在中、又た臥游と號す京師の人、明畫を慕ひ之を究めて後ち一家を爲す山水花鳥を能くす其設色のもの精密にして太だ美麗なり又有職の畫に巧みなり當時其右に出づるもの鮮し天保八年十二月二十八日歿す年八十八

在明【畫】原氏、字は子德、在明又た寫照と號す在中の二男なり父に就いて畫を學び名手の稱あり天保十五年歿す年六十七

在榮【畫】三輪氏、江戸の畫家なり花信齋と號す猿を畫くに妙なり寛政九年四月二十二日歿す

在上【畫】朱雀天皇に事へて能畫の聞えあり承平年中掃部守とともに藤原純友の首を畫き天覽に供せりと云ふ

在正【畫】原在中の子、字は子榮、父に先ちて歿す

在照【畫】原在明の子、近江守と稱し南荊と號す屢々宮中の屛障を畫く安政年中

在親【畫】梅戸氏、京都の人、原在中の門に遊ぶ文政年間

在滿【畫】荷田在滿、通稱東之進、字は持之、仁良齋と號す國學を修め專ら有職の學を究む中年田安家に仕ふ後ち故ありて退き徒を集めて業を授く門下頗る多し寶曆元年八月八日歿す年四十六

仲安【畫】名は梵之松屋と號す別に又竹天叟と稱す畫を墨溪に學び多くは大黑天及び不動尊の面を畫く

仲山【畫】服部元丘、字は仲山、覇陵と號す通稱眞藏、仲英の男

仲簡子 狩野永敬の別號

西行【畫】西行法師は本と佐藤氏、名は義淸、鎭守府將軍藤原秀鄕の孫にして左衞門尉康淸の子なり累世武を以て顯はる義淸勇敢にして射を善くし頗る韜略に通ず鳥羽上皇に事へて北面の士となり左兵衞尉に任ぜらる上皇其才を愛して甚だ寵遇す然れども義淸夙に遁世の志あり遂に嵯峨に入りて剃髮し名を西行と改め又た圓位と號す時に年二十三是より身を雲水に托し樹下石上を宿として各地を周遊し足跡殆と至らざる所なし和歌を善くし兼ねて書に巧みなり建久元年二月十六日京師に寂す年七十三

西溪【畫】西村氏、越前敦賀の人、松村景文に從ひて畫法を學び花鳥を能くせり

西臺【畫】小林良休岳陽また鳴春山人と號す伊豫西條の人なり

西海枝(サイカチ)【畫】通稱太郎左衞門と云ふ出羽小野城主なり畫法を雪村に學びて能くし筆力奔放と稱ぜらる

西湖【畫】淺野氏名は晁溪、亦西湖と號す又桂齋或は白毫の號あり江戸の人

西子民【畫】浪花の人西渠と號す花鳥を能くす文化頭

西河【畫】永田忠成、字は伯行、觀鶩の子書を父に學びて能くす式部省史生に補し起前大掾と賜ふ文化六年三月歿す年五十三

西洞【畫】藤井玄之、字は子祥、西洞は其號、一に祥菴と號す通稱伊織、平安の人、書風李北海を模して一家の風をなす兼ねて醫を能くし又物產の說に精し明和七年八月歿す年四十一

西山 德川光圀の號

西元 大西圭齋の名

【書画】藤原氏、書を能くす和泉堺の乙寶寺の緣記を書く奥書に貞和三年八月繪所預正五位下加賀守藤原伊久之書とあり

伊川【書】狩野氏、名は榮信、元賞齋と號す惟信の男長、法印に叙せられ伊川院と號す斯道の名手と稱す水墨に金泥を施す事を發明す又一種の氣韻あり文政十一年七月三日歿す

伊信【書】渡邊氏素平の子なり父の號を嗣いで又素平と號す業を父に學び而して父に勝れりと

伊洲【書画】菊田氏、名は秀行、章羽、又た松鳴と號し後ち伊洲と改む書を狩野伊川に學びて能くす後谷文晁等と交り又た京阪の間に歴遊し畫法一變し遂に一家を成す最も山水人物花鳥に巧みなり嘉永五年十二月一日江戸に歿す年六十二

伊豫【書】伊豫入道は幼にして書を好み閑あれば則ち從事す其の父これを悦ばずして戒む入道嘗て破土器を以て不動尊の像を中門の廊廓に書く健筆見るもの嘆賞せざるはなし父其制すべからざるを悟り後之を戒めずして書を學ばしめたりと云ふ

伊尹【書画】藤原氏、師輔の子、世に一條攝政と稱す從一位大政大臣となる書を好みて能くす天祿三年薨ず

伊亮 尾形光琳の別號

伊年 野々村宗達の別號、門人宗悦に此號の印を授く

至道【書画】東洲と號す東福寺の僧なり聖一國師の法嗣にして書を善くす後ち元に入りて大覺寺を建立し其開山となる

至石 住吉廣保薙髪後の號

仰齋【書画】早野氏、名は辨之、字は士譽、永輔と稱す仰齋又大痩生と號す浪花の人中井竹山の門に學ぶ後ち懷德書院の敎授となる書も亦可なり寛政二年三月二十七日歿す年四十五

充信【書】牲川氏、大阪の人、櫟同と號す鶴澤探山に就いて書法を學び後一家をなす

充興 吉村周山の名

式部太夫【書】宅間氏、宅藤派の畫家なり元德二年五月十七日歿す

式部【書】池永氏、狩野長信の門人なりと傳ふ又休伯に就いて學びしともいふ

式子內親王【書】後白河帝の皇女、書を好みて能くし萱齋と號す薙髪して佛に歸し承如法と號す平治年間の人

池旭【書】女史は小池氏、初め紫雪と號す加賀の人江戸に出で大沼枕山の義妹となり書を以て諸國を歴遊す後ち參州豊橋の客舍に歿す時に明治十一年、年五十五

池菴【書】佐々木氏、名は玄龍、字は煥父、通稱萬次郎、池菴は其號、江戸の人なり德川幕府に仕ふ書體一家をなして名大に世に鳴る享保七年二月二十二日歿す年七十四

池亭【書】山下爲榮、字は君翼又た友齋と號す江戸の書家なり文化十年九月十二日歿す年八十

池庵 橘守部の號

館岸駒の別號

兆溪【書】初め富豪を以て閭里に雄たり一旦悟る所あり髮を剃りて弘福寺鐵牛和尚の弟子となる經を誦することを好まず獨り畫を喜ぶ後兆殿司の畫を見て之を愛し長崎に至りて鎭臺某に乞ひて佳繪五十幅を得京師に歸りて兆殿司の五百羅漢を模し且餘力を以て釋迦文珠普賢の三像を畫く筆法善く備はる後ち又た阿彌陀觀音勢至の三像を寫し之を漢土に傳ふ王永明といへるもの素と畫を能くす一見駭服して曰く東方に至摩詰ありと乃ち石印一顆を贈れり其文に曰ふ筆轉聖胎と

全愚【書】名は周崇、字は大岳、全愚は其の號、別に臥遊道人の號あり畫僧にして相國寺に住せり應永三十年寂す

夙夜【書】青木氏、名は俊明、字は大初、春塘又た八岳と號す本姓は徐、韓國章王の後なりといふ池大雅に就いて畫法を學び殊に山水に巧なり大雅歿する後ち其舊跡東山の大雅堂に住す呉春及び應擧等と時を同じうす

宇多天皇【書】薙髮の後ち金剛覺と號せられ世に寛平法皇と稱す丹青に心を寄せ其技を能くせらる嘗つて長恨歌の意を寫して亭子院の屏風に圖し給ふ

曲河【書】清水氏、名は晃、字は子章、連江と稱す江戸の人、谷文晁に學びて花鳥を善くす後ち畫風を一變す文政二年五月十一日歿す年七十三

曲池【書】小池氏、陸前の人、文政年中

自當【書】墨色の山水を能くせり

自宅【書】雪村の畫法を學び山水花鳥に巧みなり

自牧子建西堂の號

自牧小栗宗丹の號

自適齋狩野尚信の號

自得齋西川祐信の號

自閑齋【書】三村氏、通稱萬助、信州松代の人狩野尚信の門人なり正徳年中

自庵熊本元朗の別號

自怡堂伊藤坦庵の別號

自觀居士土肥默翁の別號

交山【書】松本氏、通稱文右衞門、名は機、字は眞宰、大學と稱す江戸深川八幡山七艸庵に住するを以て人呼んで山の交山と云ふ初め谷文晁に師事して畫を能くし後ち法眼に叙せらる慶應二年十月九日歿す年八三

交翠山房守村抱儀の別號

伊信【書】藤原氏、爲繼の男、畫を能くす右馬權頭正四位下たり現存三十六人詩歌の屏風の跋に曰ふ此屏風は建治二年春閏三月關東相州時宗結構せられたるものにして圖は伊信入道、詩は藝中納言資宣、歌は右大辨入道眞觀之を撰すと書も亦た當世の能書を以て色紙形に書せしむといふ

伊久

章【書畫】川端氏、別に敬亭と號す天保十三年六月四日京都高倉瓦町に生る中島來章に從つて書を學び後ち自ら切瑳琢磨の功を積み其技大に進みて圓山派の泰斗と稱せらる明治十七年東宮御殿御客室の御襖を書き二十一年皇居の御杉戸を畵け東京美術學校の教授となる **玉成** 岡島冠山の號 **玉川** 細井廣澤の別號 **玉川**【書】加藤嚢山の別號 **玉川** 狩野正信の別號 **玉川**【書畫】菅原氏、慶應年中の人 **玉鱗**【書畫】近江の人、僧玉翁の法弟にして書を師に學び墨竹を能くす文政年中 **玉峰** 福原五岳の名 **玉圓** 狩野種信の號 **玉鳳**【書畫】長谷川氏、通稱富八、越後の人南宗畫を能くす文政年中 **玉淵** 増山雪齋の別號 **玉義** 東洋の別號 **玉琤舍** 立原杏所の別號 **玉潤堂** 松本龍澤の別號 **玉女山人** 草場佩川の畵號 **令德**【書】雞冠井令德は俳諧を松永貞徹に學び兼て書を能くす延寶二年三月歿す年六十八 **令信** 狩野舟川の名 **必東**【書】泉必東、泉一に錢に作る名は貞、字は恒郷、必東は其號、浪花の人、其先は清人なり沈南蘋の畫法を慕ひて花鳥人物を能くす又た書を蒙所に學びて之を能くせり明和元年十二月歿す **必**

大 吳北汀の字 **甲東** 大久保利通の號 **甘谷**【書畫】加藤氏、五左衛門と稱す尾張の人、山水を能くす常に中林竹洞、山本梅逸、浦上春琴等と交る天明年中 **甘谷** 松崎蘭谷の別號 **卯翁** 小川笠翁の別號

六畫

宅嗣【書畫】石川氏、淡海三船とともに文人の魁と稱せらる心を歴史に潛め、涉獵太だ廣く書を能くして草隸に工に當時此人の右に出づるものなし勝寶のはしめ朝散太夫に叙し治部少輔に補せらる後文部大輔に移り内外官に歴任す寶字年中藤原良繼の事に坐し大伴家持とともに吏に下されしかど日ならずして解くことを得たり後ち藤原永平等と謀りて光仁天皇を立て中納言に拜せられ物部と改めて遠祖の姓に復せり後數年詔して石上に復し大納言に轉じ金紫光祿太夫に至る天應元年卒す享年月詳ならず **向陵**【書】多賀谷瑛之、字は伯華、通稱は貞吉、江戸の人、書を以て世に聞ゆ **向功**

學びて山水及び蘭竹梅菊に長ず又和歌を冷泉家に學びて善くす天明四年九月歿す

玉英【書】女史木村玉英、字は君華、鶴洲と號す通稱彌須、文化年間江戸の人

玉蟾【書】朔月玄、字は玉蟾、通稱藤兵衛、初め土佐光成に學び後ち山口雲溪に從ふ池野大雅柳澤淇園の蹤と漢畫を工夫し唐宋元明諸家の精華をとり筆致尤も高し寶暦五年八月三日歿す年六十三

玉仙【書】望月氏、誠齋の男、父に學びて家風を善くす

玉川【書】望月氏、玉仙の男、名は暉、字は子瑛、初め岸駒に學び後ち月溪の畫風を慕ひて其風格を變じ遂に一家をなす嘉永五年三月六日歿す

玉洲【書】矢野道和、廣澤に學びて書を能くし時に稱揭せらる天明二年十月二十八日歿す

玉山【書】石田尙友、大阪の人、法橋に叙せられ法橋玉山と稱す近世版刻密畫の開祖なり初め關月に就いて畫法を學び後ち一家の風をなせり著述の畫頗る多く當時京都の版畫は大概皆玉山の手に成らざるものなく一時の名手と賞せらる天明より弘化の間に涉る門人頗る多し岡田修德といふものあり二世玉山の名を繼ぎ江戸神田に住し盛んに畫を弘む然れども版行のものは毫も畫かざりしといふ畫風初世玉山と相伯仲す

玉室【書】名は宗伯、瞳眠子と號す春屋宗園の法嗣にして大德寺百四十七世の住職なり自贊畫を作る氣韻淸高と稱す寛永十八年五月寂す年七十

玉山【書】岡田玉山、名は修德、又た尙、字は子秀大阪の人、畫を月岡雪鼎に學び人物花鳥に巧みなり後ち益々研精して一家を爲し法橋に叙せらる繪本太閤記は此人の著したるものなり是より其名大に振ふ文化九年歿す年七十六

玉溪【書】井上氏平安の人なり白井廣士[illegible]門人にして畫を能くせり

玉山【書】岡本禎、玉山と號す山水を善くす奥洲の人文化頃

玉淵【書】小澤成、字は淵、京師の人、詩文、俳諧を能くし又た畫に巧なり筆意雪舟に似たる所あり年代詳ならず

玉堂【書】浦上氏、原と紀氏、備前の人京師に住す性畫を好みて多く元明の古跡を慕ひ畫法を研究して大に進む後ち一派の風を起して水墨の山水に長ず其筆勢超脫にして奇韻あり又た書を能くす文政三年九月四日歿す年七十六

玉潤【書】女史は小林氏、上總の人、小林藏六の妻、元と德川旗下の士某の女あり故ありて落魄し酒家の婢となる藏六偶々其家に來り婢の畫を見て大に驚き金を出して婢の主人に投じ遂に納れて妻となす夫妻終身畫を以て樂しみとなす女子又た能く琴を彈じ和歌に巧みなり明治十二年歿す

玉泉【書】望月氏、名は重岑、字主一、通稱駿三、京師の人天保五年生る父玉川に就きて畫を學び技を以て世に鳴る

玉堂【書】川合氏、通稱芳三郎、金華山人、長流閣等の別號あり幼より畫を好み望月玉泉、幸野梅嶺等に畫法を問ふ後ち橋本雅邦に就いて研究す

玉山【書】岩城氏、名は處厚、字は三龍、越中富山の人、幼にして畫法を書博士岡本保誠に受く晩に畫を以て徒に授く明治三十九年歿す

玉

歿す年七十八

永洗【畫】富岡氏、通稱秀太郎、舊松代藩士なり元治元年三月生る明治十五年以後小林永濯に就いて畫を學び遂に其衣鉢を受く明治二十五年歿す年四十八

永濯【畫】小林氏、通稱榮太郎、鮮齋と號す狩野家の門人にして密畫に長ず明治二十五年歿す年四十八

永湖【畫】佐竹永海の義子なり天保六年彦根藩邸に生る父に從つて文晁派の畫法元明以下の典型を習得し又た鳥取藩の畫家沖一峨に師事して土佐狩野畫法を學ぶ妙筆の名夙に世に知らる

永陵【畫】無田氏、祖父正木龍塘に畫道を學び佐竹永湖に畫を學ぶ明治五年五月生

永仙 狩野元信の名

永貞 狩野安信の號

永眞 狩野憲信の號

永榮【畫】狩野主信の門人狩野氏を冐す寶永頃

永竹【畫】高木氏、後ち狩野氏を冐す寶永中

永民【畫】小坂氏、信濃の人、初め春谷と號す南宗派の畫家なり明治初年歿す年七十餘

永春齋【畫】森氏、名は陽信、畫を櫛橋正盛に學ぶ森祖仙の長兄なり文化五年歿す年七十三

永和【畫】近松氏、永昌の子、世々佐竹家の畫員たり明治二十二年歿す年七十六

永春【畫】松山氏、江戸の人、畫を佐竹永海に學ぶ文久年中

永碩【畫】狩野氏、名は一信、是信の子畫法を父に受く

玉翁【畫】蘇我氏、二直菴の子、父に就いて畫法を學び鷹を畫くに妙なり

玉菴【畫】蘇我氏、玉翁の子なり畫法を父に學びて能くす父と同じく鷹を畫くに妙なり

玉樂【畫】狩野氏、名は宗祐、玉樂は其號なり元信の族姪にして一殊牧の弟なり元信に學びて其眞趣を得水墨設色皆元信の筆に伯仲す永祿年中の人

玉榮【畫】狩野左信、示榮と號す文化元年六月二十一日歿す年七十五

玉燕【畫】狩野秀信、玉燕と號す休碩の子、寛保三年八月一十一日歿す年六十一

玉洲【畫】桑山嗣粲、字は子殘、左内と稱す紀伊の人にして南畫を善くす野呂介石初め玉洲に學べりといふ

玉燗【畫】町田麗花、上野の人、畫を能くせり

玉翁【畫】名は堪、岳陽と號す洛東永觀堂に住し淨土宗の宿學なり詩文を能くし畫を能くす元明の古跡を模して墨竹に長ず然れども畫を以て名を顯すを欲せず數々其號を更む蓋し跡を匿さんが爲め也といふ

玉洲【畫】美濃立政寺の住職なり玉翁の法嗣にして墨竹を能くす

玉鱗【畫】玉翁に學びて墨竹を能くせりといふ

玉舟【畫】名は宗璠、春睡又た善哉と號す山城の人、紫野大德寺百八十五世の住職たり書畫を能くす寛文八年十一月十八日寂す年六十九大徹妙應禪師と諡す

玉蘭【畫】女史名は豐子、八田香秀に就いて畫を學び山水人物花鳥を能くす備後の人なり筆法勁秀名三備の間に著る天保年間の人

玉瀾【畫】女史は池野大雅の妻なり名は町、玉瀾は其號別に松風葛覃居と號す京師の人、夫及び柳里恭に

て聚樂殿の金壁等を書く當時諸大夫の第も亦大厦を營み金壁を設くれば必ず其書を求む又た桃山御殿百双の屛風半ば其筆する所なり天文十二年正月十三日生れ天正十八年九月十四日父に先ちて歿す年四十八、狩野氏第五世

永德【畫】狩野氏、名は高信、英信の男、四郎次郎と稱し成文齋永德と號す父に學びて殊に花鳥に巧み也徳川氏に仕へて治部卿法眼に叙せらる寛政六年十二月廿九日歿す年三十二、狩野第十二世

永有（モチ）【畫】巨勢氏第十二代の人なり宗久の子書を以て其家を繼ぐ藏人と稱す寛元年中の人なり

永了【畫】多羅尾氏、狩野安信の門人、初め七左衛門と稱す

永隆【畫】多羅尾氏狩野主信の門人也

永恕【畫】三宅氏、狩野主信の門人なり書を能くす

永玄【畫】三宅氏、狩野安信の門人にして通稱を仁右衛門といふ

永伯【畫】三宅氏、狩野安信の門人にして通稱を與助といふ

永孚【畫】藤永孚は中洲と號す書を細井廣澤に學んで能くす

永機【畫】通稱鈴木義親螺舍と號し後ち老鼠肝と號す又た深川氏を稱す江戸に生る徳川氏の臣壯年より俳諧を好み湖十の門に入る長州侯に出入し二十人扶持を給ふ嘉永五年八月二十八日歿す年七十六

永菴【畫】大谷業廣青蓮院門跡の坊官たり法印に叙せらる深く御家流を研究して妙手に至る又た和歌を善くす安永九年七月十一日歿す年八十二

永信【畫】周文の門人にして墨梅に巧みなり

永信【畫】長谷川信春の子なり書風父に似たり

永海【畫】佐竹氏、永海は其號なり又た愛雪、梅九、周村、成堂等の號あり會津の人、文晁の門に學び遂に妙手に至る書を以て彦根侯に仕ふ明治七年十二月二十四日歿す年七十二

永光【畫】木村氏、近江蒲生郡の人、狩野山樂の父にして京狩野の祖薙髮して善了と稱す淺井長政に仕へて近侍となる書を狩野元信に學び花鳥を善くす然れども意に適せざれば筆を取らざるを以て遺墨世に存するもの少し元龜頃の人

永茂【畫】細井氏、狩野安信の門人にして能く狩野風に書けり

永壽【畫】藤田氏、狩野主信の門人にして能く其師の風を得たり

永俊【畫】住吉永俊は土佐派の畫人なり然れども其畫宅磨派の筆格あり佛像に巧みなり法眼に叙せらる

永雲【畫】太田氏、狩野安信の門人にして能く其の體を得たり

永碩【畫】奥山氏、狩野安信に學びて法橋に叙せらる

永休【畫】武田氏、狩野安信の門人にして書を能くす

永三【畫】津田氏、狩野主信の門人なり

永春【畫】土佐光顯の長男、太夫法眼と稱す支族となりて別に一家をなす其畫法父に則るところ多し貞治年門の人

永覺【畫】名は元賢、字は永覺黄檗山の僧なり文名あり

永悳【畫】狩野氏、伊川の五男、鄭信の家を繼ぐ名は立信永悳は其の號也又た晴雪齋と號す徳川幕府の奥繪師となり法眼に叙せらる明治二十三年十月帝室技藝員となり二十四年一月二十九日

し其妙に臻る

牛入（畫）久隅守景の子、畫を父に學ぶ佐渡に住す正德年中

牛山（畫）加藤氏、通稱牛之丞、豐後の人、畫を能くす嘉永年中

牛夢（畫）岩瀨氏、名は廣隆、後ち可隆と改む林屋と號し別に琴泉の號あり紀州の人、田中訥言浮田一蕙等に從ひ畫を學ぶ晩に鐵翁に學び水墨の蘭竹山水を能くす明治十八年八月歿す年六十九

牛田（畫）前田氏、南宗派の畫を能くす天保年中の人なり

永隆（畫）狩野章信、永隆と號す安信の門人寶永頃

永伯（畫）狩野永伯山亮と號す永敬の男、初め畫法を文に學び後ち主信の門に入る明和元年七月歿す

永良（畫）狩野氏名は永良、通稱縫殿助、山晟齋と號す永伯の義子、義父に畫法を學びて能くす後ち禁中の畫師となり子孫世々相傳ふ明和六年歿す

永常（畫）狩野永常、通稱縫殿助、山隆と號す永良の男、能く家風を守りて畫けり天明七年歿す年五十八

永俊（畫）狩野永俊、山朴と號す、永常の男、畫法家風を守りて能くす文化九年歿す年四十八

永岳（畫）狩野氏、名は永岳、通稱縫殿助、永俊の義子、畫を能くするを以て時人に賞揚せらる元と永納の畫風を習得したりといへども四條風の筆意を雜ふるを以て晩年其風格を變ぜり平安近代の妙手と賞せらる安政年間の人

永翁（畫）狩野房信、傳兵衞と稱し永翁と號す安信の門人

永叔（畫）狩野氏、初めの名は敏信、又た明信後ち牛信、澹然居士と號す時信の子、後ち法印に叙せらる享保九年六月七日歿す年五十

永意（畫）狩野氏岡の男其筆力父と相伯仲して何れが鑑別し難きものあり

永納（畫）狩野氏、名は永納字は伯受通稱縫殿助一陽齋と號す又た梅岳、山靜居翁等の號あり山雪の長男父に畫法を學び後ち安信に就いて其蘊奧を極め山雪の風を捨てゝ狩野の正風に依り遂に一家を成す又た文事を好み鑑識に精し本朝畫史を著はして世に行はる我國畫人の傳實に之を嚆矢となす當時聲名世に噪ぐ元祿十年歿す年六十七

永敬（畫）狩野氏、縫殿助と稱し仲簡子と號す永納の長子なり能く家法を守りて巧なり元祿十五年九月十八日歿す年四十八

永梢（畫）狩野永梢、松之尉と稱す山雪の二男能く家法を守りて巧みなり東本願寺の繪所となる寶永年中の人なり

永雪（畫）狩理氏、內匠と稱し永雪と號す永梢の男、畫風父に似たり

永德（畫）狩野氏、松榮の長男、初の名は州信後ち重信と改む世に古永德と稱す通稱源四郎、織田信長に仕へて近侍たり後ち法眼を歷て法印に叙せらる畫法を父に學び又た祖父元信の筆蹟を追慕し大に畫法を研究し技益々進む其畫く所の山水花鳥人物鳥獸悉く巧みなり就中大畫に妙を得或は松梅長さ一二丈或は人物高さ三四尺其筆法皆粗にして草なり而して元信と頡頏するの勢あり嘗つて安土城中畫の間一式を筆作し信長の感賞を受け又た豐太閤に仕へ

なり明治二十年歿す年六十五

石埭【書】永阪周、字は周二、弘化二年九月名古屋に生る家世々醫を業とす詩書に巧みなり

石湖【書】相澤氏、江戸の人、春木南湖の門人なり人物花鳥を能くす天保頃

石谷【書】十市氏、通稱は恕輔、豐後の人なり南宗畫の山水を能くす嘉永六年歿す

石巣高久靄崖の別號

石鳥【書】鳥山石燕の門人、安永年中

石楠齋太田南畝の別號

半江【書】岡田氏、名は肅、字は子羽、半江と號す又た寒山獨松樓等の號あり字佐衛門と稱す米山人の男初め父に畫を學び後ち明人南宗の山水を好みて大に修むる所あり遂に一種の畫風を得たり父と共に其名聲甚だ高し弘化三年二月八日歿す年六十五

半仙【書】中根容、字は公默閑徒老人、玄石、又た訒齋と號す詩に巧みに書を能くすまた篆刻に妙なり其技大に觀るべきものあり嘉永二年八月四日歿す享年五十二

半齋【書】細合離、字は麗玉、通稱八郎右衛門、斗南と號す半齋、太乙山人等の別號あり書名高し享和三年十一月歿す年七十五

半平【書】松井道輔、字は巽甫、香軒また鶴仙と號す初め通稱は岡之助、後ち孫兵衛と改む小田原侯の家臣なり書法を父に學び又た寂源より書傳を受け入木皆傳の正統たり

半兵衛【書】吉田氏、好色訓蒙圖繪を畫けり貞享中の人

半香【書】福田氏、名は佶、字は吉人、小字恭三郎、半香は其の號又た曉齋、曉夢生と號す遠江國見附の人なり少より畫を善くす江都に至り勾田臺嶺及び渡邊華山に從ひ益々其技を修む尤も花卉に工みなり此時華山の高足椿椿山も亦花卉に工みなり半香更に意を山水に刻し竟に其名を擅まゝにす世人揮して以て華山門中の巨擘となす晩に根岸に隱れ幽居を結び扁して松蔭村舍と云ふ蓋し御行松に近きを以てなり其畫を乞ふもの足門に相繼ぐ當時關東の畫人未だ潤筆を定めず半香獨り先づ之を定む世人或は之を毀る一日揮毫を乞うて潤筆を贈る者あり其定規に過ぐ半香辭して受けずして曰く人を以て價を二にするは我れ爲さゞるなりと乃ち其規定を受けて悉く其餘を還す其人大に其廉なるに感ず元治元年甲子八月二十三日病歿す年六十一

半平太【書】武帝氏、瑞山、一に吹山と號し又た茗澗と號す土佐の藩士なり頗る擊劍に長じ、傍ら書史に涉り又た畫を善くす瑞山慷慨激昂大に尊攘の義を唱へ水戸薩摩長門三藩有志の士と相往來す屢々言を藩廳に陳じ以て時弊を矯正せんと欲すと雖も一も納れられず却て嫌疑を蒙むること益々甚し文久三年九月二十一日藩廳遂に瑞山を捕へて獄に下す明年元治元年四月始めて鞠訊せらる爾後屢々鞠訊せらると雖も獄竟に成らず慶應元年五月二十一日死を賜ふ時に年三十七明治二十四年正四位を贈る

半嶺【書】中根氏、名は聞、字は公升、舊高田藩士中根半仙の長子也、天保二年二月神田於玉ヶ池に生る父に就き書道を學び晩年漢隸を研究

王義之に移り自から一家を成す明治二十一年九月三十日歿す年九十二 **正風**【書】高崎氏、鹿兒島藩士、王政維新に功勞あり諸官累進樞密顧問官に任ず夙に八田知紀に就きて歌學を脩む御歌所長たり亦書を能くす **正賢**【書】增山雪齋の號 **正齋**【書】岩井氏、尾張の人、書を以て德川宗勝に仕ふ寛政年中 **正高**【書】杉村氏、通稱清兵衛、菱川師宣の門人なり正德年中 **正榮**【書】狩野氏、京都の人、書に名あり文化年中 **正之亟**【書】菱川氏、師宣の二男、書を父に學びて能くす元祿年中 **正雪**【書】油井氏、劍法教授の餘暇書を狩野探幽に學ぶ兵を擧げて幕府を斃さんとし事露はれて慶安四年七月二十六日自刄す **正盛** 楢橋榮春齋の別號 **正生** 武田耕雲齋の號 **正人** 江馬天江の名 **正猗** 石島筑波の名 **正志齋**【書】名は安、字は伯民、通稱は恒藏、水戸藩士なり幼にして警敏學を好み彰考館寫字生となる初め留守に班し後ち歩士に班して江戸より還る尋ぎて諸公子に侍讀し數年にして累進して進物番と爲り藤田幽谷歿するに及びて彰考館總裁となる尋ぎて病を以て職を辭し教授となる後ち擢んじられて郡奉行となり小性頭總教に轉ず前後秩を增して二百五十石に至る哀公薨じ烈公の封を襲ぐや信任尤も厚く正志齋の啓沃する所亦甚だ多し烈公致任して國事一變す正志齋亦致任して憇齋と稱す幾ばくもなく讞を得て幽屛四年にして江戸に還る烈公の再び起つや正志齋亦擧用せらる文久三年歿す年八十二

石圃【書】岡野享、字は元震、石圃と號す別に雲津の號あり伊勢の人京師に住す清人李漁の法に摸して粉本の布置をなす是より李漁の說大に行はるゝに至れりといふ **石燕**【書】鳥山豐房は狩野周信の門人なり然れども其書風浮世繪に等し天明六年歿す年七十六 **石谿**【書】初め雪舟に學び後ち牧溪を慕ひ達摩並に雜圖を書く **石亭**【書】竹本氏、名は正興、通稱又八郎、對松堂と號す幕府の德川末姬の館に仕へ御侍たり幼より書を好みて文晁の門人相澤石湖に就て學び後ちに支那南北の書法により又た狩野土佐の風を折衷し獨學數十年終に一派をなし舊幕殿中の步障を書き東海東山五畿北陸南海諸道の名所舊跡を探り明治十一年中宮內省の命を受けて澤三位が書く所の七卿長門落の圖を模して若干の賞賜あり詩文和歌の外滑稽文狂歌等に巧みなりと云ふ傍ら圍棋を好み又た本草學に委し明治二十一年一月一日病んで歿す **石齋**【書】高橋氏、名は豐珪、字は子玉、通稱幸次郎、石齋は其號又た煙岳、松谷等の號あり父會平擊劍を以て尾張藩に仕ふ石齋教を家庭に受け亦劍法に精し後ち江戸に出でゝ志を文學に專らにし最も書法を究め力を顏柳に得其妙所多く劍法より悟入すといふ明治五年七月二十四日歿す年五十六 **石寶**【書】粟山壽、江戸の人、初め相澤石湖に學び後ち浪花に出で其技大に進む人物花鳥に巧み

たり初め狩野家に學び最も墨書を善くす子孫世々尾州侯に仕へて士籍に列す

正水【畫】井出氏加賀の人平安に住す書法を志津摩に受く後一家をなせり

正安【書】奥平節、正安潛忠堂と稱す又た竹漢老人、淨軒居士等の別號あり長州侯の儒臣なり程朱の學を奉じ長州侯に仕ふ又た幼時より漢土名家の書を學び自ら一派を成す天保年中韓人某其の詩書を見て大に嘆賞すといふ

正心【書】眞幸氏、名は忠辰、通稱素介、初め正眞後ち正心齋と號す又た三國筆海堂の號あり薩摩の人、書風御家流より出で丶別に一家を成す書に巧み也書を以て水戸藩に仕へ祿三百石を食む嘗て數多の名蹟を蒐集印刻し署して筆海全集といふ威公其書を以て幕府に献ず將軍大に之を賞し以て國家の重寶と曰ふと延寶二年十月二十日歿す年六十一

正敬【書】徹書記の門人にして和歌に長せり又た書を能くし師の風を得たり

正般【書】歌人なり又た書を徹書記に學びて之れを善くす明應年中歿す

正望【畫】桑原氏字は三五、又た民之、遠州の人なり初め畫を句臺嶺に學び後ち諸家の精英を拔き別に一家をなす畫名日に隆し安政五年歿す年五十二

正隣【畫】山口氏、名は子臣、松村月溪の畫風を學び四條派の畫家なり

正茂【畫】墨畫を畫くに妙なり又た蓮鷺の圖を寫すに雪舟の風ありて筆致愛すべきものあり原啓書記の風を學べり

正路（マサミチ）【畫】淺井氏、惟寅の男にして上總介大舍人たり畫を能くす

正持【畫】佐藤氏、幼名を理三郎といふ江戸の人、初め畫を南湖に學び又た文晁に隨ふと雖も上達する能はず變じて浮世繪を學び技大に進む傍ら國學を修め國史に精し安政四年八月歿す年四十九

正慶【畫】正慶尼は三好氏、幼名は阿雪、大阪の人なり書畫を柳澤淇園に學び又た擊劍柔術を好み其技に通ず彼の演劇に扮する奴の小萬の實名なり年七十二にして歿す

正善【畫】佛像人物を畫けり和泉堺に住す

正盈【書】畠中氏、寬齊と號す魯堂の門人小字政五郎といふ儒にして書を能くす

正之【書】堀氏、通稱新右衞、正水の門人たり能く師の禮を得て能書の聞えあり

正輔【書】大堀氏、近江彦根の人、京師に出で丶加茂季鷹の門に入り業を修め又た江戸に至りて千蔭に就き詠歌及び書體を學ぶ

正村【書畫】水谷氏、小字彌九郎、常陸の人、世々結城氏に仕ふ武功を以て著はる暇あれば則ち書畫を事とす慶長元年六月二十日歿す年七十六

正納【畫】大辨氏、耕雲克原の法嗣もと法を西礀曇に嗣ぐ曾て元に入りて諸宿老に參し後ち歸朝して萬壽の席を董す善く弘祖の像を畫きて巧みなり筆格超越氣韻生動し庸手の及ぶ所にあらずと

正甫【畫】土佐派の畫人なり氏名詳らかならず泉州堺に住す土佐光起の門人にして畫を能くす鶵を畫くに妙を得たり元祿年中の人

正齋【書】柳田貞亮字は節夫、正齋は其號、下總香取郡佐原村の人、初め江戸の昌平黌に學ぶ性臨池を好み初め趙子昂を學び後

讃岐の人、花鳥を能くす文化年間

白蛾【書】新井氏、名は祐登、字は謙吉、白蛾は其號、又た黃州、龍山、古易館の號あり通稱織部、後ち白蛾を以て通稱とす儒學に邃く中年の後ち好みて和歌を詠じ傍我國の典故を修む寛政四年五月十四日歿す年七十八

白龍【書】菅原氏、名は元道、羽前の人、東京日本橋に居る因て日橋隱士の號あり初め書法を熊坂適山に受く既にして一縣社の祠官となり國學を學び得る所あり乃ち漢書の法を措てゝ一機軸を出だす人却て或は和臭ありと嘲るも却て其偏狹を罵りて意氣傲然たり殊に山水に長じ博覽會共進會に配銅牌を得ること數次明治三十一年五月二十四日歿す年六十六

白雪【書】前橋氏、大坂の人、嘉永年間

白山【書】淺井氏、別に柳塘と號す阿波の人、漢書を能くす文久年中

白玉生　田崎草雲の別號

白蓮子　狩野探幽の別號

可卜【書】卜を一に木に作る棟雲子と號す康西堂の弟子なり書を師に學ぶ鎌倉建長寺に住し晩に常陸水戸に移る貞和年中

可翁【書】名は宗然、可翁は其號、又た良全と號す筑前の人、元に至りて留まること十餘年歸朝の後ち筑前崇福寺に住居し後ちまた萬壽寺に移る和泉の禪通寺を創む勅を奉じて南禪寺に住せり當時高德知識の名此右に出づるものなし專ら書を好み每に寒山拾得及び觀者の像を書くまた墨竹の圖あり其他の書は殆んど無しといふ書風は牧溪に似て巧みなり晩年洛東の山麓に一草庵を結び此に隱遁す名づけて天潤菴と云ふ貞和元年四月二十五日寂す大聖禪師と諡す

可亭【書】岡本氏、通稱竹二郎、長春堂の號あり安政四年大坂に生る父は藤堂侯に仕へ御家流を能くす可亭乃父の敎を受け後ち各家を參酌し特に趙子昂の筆意に入る

可亭【書】古川氏　文久年中

可存【書】呉春明の師事せし人にして常行に學びて書法を得たり

可全【書】大村氏、京師の人和歌を好み季吟法印の門に學ぶ又た書を能くす

可亭【書畫】羽倉氏、京都伏見稲荷の祠官にして從五位下藏人たり書を釋月峰、豐本豊に學び遂に妙手となる又た篆刻及び書を善くす天保年中歿す

正信【書】狩野家開祖なり藤原大織冠鎌足の後ち二階堂主計允行政（一に山城守に作る）八世の孫に狩野次郎景信と云ふものあり伊豆國加茂郡狩野村に住す書を好みて足利義敎に仕ふ正信は其長男四郎次郎と稱し後ち大炊助と改む剃髪して亦た祐勢（或は友淸に作る）と云ふ此時山東兵革輟まざること累年家族衰微し殆んど給食し難し乃ち亂を避けて京師に入る正信天性書を好む初め父景信の書法を受け上洛の後ち如雪を師とし後ち周文の門に入りて研究し遂に一家をなす足利義政に仕へ圖書の事を掌り食邑五千貫を賜はる最も人物に長じ好みて滅筆を用ふ晩年薙髪して法眼に叙せらる延德二年七月九日歿す年三十八（一に三十七）

正祐【書】狩野元信に從ひて學べり

正齋【書】岩井氏、尾張の人也德川宗勝の書師

漁史 萩原秋巖の別號 **古狂生** 賴鴨涯の別號

由一【畫】高橋怡之助、藍川と號す油畫師なり文久二年九月蕃書取調所所屬圖書局に入り川上冬崖の敎を受くまた英國公使館付武官「ワルグマン」に就いて脩むるところあり慶應三年諸生徒とともに書を作りて之を佛國博覽會に出品す明治四年大學南校の畫學敎授となり明年之を辭す後ち濱町に一の畫學會を起し子弟を敎授す之を天繪學會といふ明治二十七年七月六日歿す年六十七

白華【畫】名は忍海、字は白華海雲と號す

白隱【畫】原白隱、名は惠鶴、俗氏は長澤駿河原宿の人年十一にして僧となり松蔭寺に入りて弟子となる後ち高僧智識の名海内に遍し書風瓢逸禪品を帶ぶ明和五年十二月十一日歿す年八十一勅諡して神機獨妙禪師と賜ふ

白駒【畫】關氏蓑洲と號す白駒は其名、大坂の人、鎌田巖松に學び山水人物花鳥を善くす明治八年二月歿す年七十四

白瑛【畫】福智氏、平安の人なり八田古秀を師とし山水を能くす其の設色頗る巧みなり

白山【畫】清瀨清輿、白山は其號、越前の人なり梅關に就いて畫を學ぶ神韻自然の妙あり明治十五年歿す年八十一

白岩【畫】諸葛氏、字は宣齊、院雲居士と號す花鳥に巧なり

白石【畫】新井氏、初名與、後ち君美と更む、字は在中、一の字は濟美、通稱勘解由、白石は其號、又た紫陽、錦屏山人、天爵堂、勿齊等の號あり其先は新田氏に出づ父を正濟と云ふ常陸の人、後ち江戸に出づ木下順庵の門に入りて業を修め出藍の稱あり初め古河侯堀田正俊に仕ふ後故ありて仕を致し淺草に住す元祿六年幕府の儒官に登庸せらる時に年三十七待遇厚渥遂に從五位下筑後守に敍任す專ら著述をなし其書多くは經濟に係る世其の有用を稱す尤も詩に長じ才力絕倫なり采地千石を給はる享保十年五月十九日歿す年六十九

白幽【畫】氏名詳ならず洛北白川の山中に住す常に金剛經を誦す石川丈山と友とし善し僧白隱怪みて詰るに唯長生の法を告ぐるのみ白幽常に巖上に坐し傍に卓一基を置き上に老子と金剛經とあるのみ其筆法超凡世に存するもの甚だ稀なり寶永六年八月九日寂す長壽にして幾何なるを知らず或はいふ二百餘歲と

白雲子【畫】筒井氏、吟龍軒と號す通稱は左京進、京師の人、書風御家流より出でゝ遂に一家をなす世に白雪子流と稱す門に入て學ぶもの頗る多し

白駒【畫】岡氏、名は白駒、字は千里、通稱太仲、龍州と號す播磨の人、京師に出で學を徒に授く晩年蓮池侯の儒官となる詩文を能くし書に巧みなり著書二十餘種經史の傳註多し明和四年十一月八日歿す年七十六

白加【畫】百濟の畫工なり用明天皇の時、歸化す

白龜【畫】小松屋白龜は三右衞門と稱す江戸の人、藥店の主人なり西川祐信の畫法に倣ひて多く秘戲圖を畫けり又た版下の繪をも畫けり明和年中の人

白受【畫】寺島氏、字は采卿、竹波と號す

氏、徳川幕府の醫員にして能書家なり平安の人白雲老人と號す幼にして直瀬正紹の門に入りて學ぶ年十六にして師正紹に代り生徒に教授す慶長十五年法橋に叙せらる

玄東【書】名は玄東字は瀬翁、幻華道人と號す

玄芬【畫】村上氏、字は秀齋、玉峯と號す日向の人、大阪に住す山水に長せり文化年間の人

玄鳳【書】釋玄鳳、山水に長す嘉永年中

玄素 福原五岳の別號

玄圃【畫】山本氏、京都の人、嘉永年中

玄覽【畫】佐藤氏、源助と稱す京都の人、江戸に住す初め四條畫風を修め後ち文晁の風格を學ぶ明治十八年歿す年六十八

玄止齋 狩野惟信の號

玄信齋 宮本武藏の別號

玄仙 曾我紹仙の號

玄裳 赤松鶴年の號

玄々子 萩坊乘圓の號、又た玄々翁ともいふ

玄圃【畫】池田氏美濃の人、夙に漢畫を能くして世に名手と稱せらる弘化年中

玄勝齋【畫】角田氏、通稱市助、肥後の人にして漢畫に巧み也文化年間

玄龍 佐々木池庵の名

玄道【書】矢野氏、通稱茂太郎、愛媛縣の人なり平田篤胤の門に入りて國學を修め後ち昌平黌に入りて漢學を古賀侗庵に學ぶ明治元年神祇官に出仕し後ち大學中博士に任じ從六位に叙す後ち宮内省に召され御系譜編纂に從事す十七年圖書寮御用掛に補せらる著述數十種あり人と爲り神采秀で儼として威容あり常に云ふ余が性蒲柳にして酒を好む若し女色を近くれば宿志を累すことあるべしと終身妻を娶らず明治二十年春病歿す年六十五

古閑【畫】大石氏、畫を狩野常信に學びて其の風を能くせり

古馮【畫】菊谷氏、字は元机、葛破と號す南都の人、花鳥を能くす文化頃

古秀【畫】八田氏、字は子瑩、希賢と號す應擧の門に學ぶ最も人物を能くせり文政五年九月五日歿す年六十三平安の人

古嫺【畫】名は明譽、虛舟と號す畫を狩野永納に學び後ち雲舟の畫風を慕ひ人物山水を畫く殊に大黑の像多し初め大和郡山西巖寺に住し後ち京師報恩寺の住職となり晩年隱居して東山西岩倉に住す享保二年五月二十三日寂す年六十五

古岳【畫】名は古岳、海雲山法藏寺の住

古谿【畫】名は秀蓮、字は古谿、城州八幡神宮寺の社僧なり

古溪【畫】名は宗陳、大德百十七世慶長二年正月寂す年八十三大慈廣照禪師

古香【書】秋月、氏名は種樹、古香と號す日向高鍋城主學和漢に通じ詩文を善くし書に巧みなり元老院議官、錦鷄間祗候、貴族院議員たり明治三十七年十月十七日歿す年七十三

古法眼 狩野元信をいふ

古永德 狩野重信をいふ

古川 狩野常信の號

古雪【書畫】長三洲の弟、詩文書畫を能くす明治年中歿す

古義堂 伊藤仁齋の別號

古愚軒 柴野栗山の別號

古易館 新井白蛾の別號

古梁

し又た茶道を宗佐に學び其の道に精通す茶識骨董を好み戯書を能くす寛延元年十月二十一日歿す年七十四

仙巖【書】名は元嵩、字は仙巖黄蘗山の僧來朝の人なり

仙可【書】周文に學びて彩墨の山水を善くせり

仙嶺圓山應擧の別號

仙洲【書】太田仙洲は南宗派の書人なり安政年間の人

仙花堂西村重長の別號

仙桂【書】橋本氏、仙桂は其號、越後敦賀の人、花鳥に巧みなり寛文年中

仙堂彭城百川の別號

玄也【書】狩野元信に學びて大書を善くす筆法酷だ永徳に似たり

玄澤【書】大和菩提山に住す書法を周文に學びて善くす

玄翁【書】越後の人、佛書を作る應永三年正月歿す年七十一

玄瑤【書】後水尾天皇第七の皇女なり林宮尼寺宮法親王にして照山と號す狩野安信に書を學び觀音の圖多し享保十二年五月薨ず年九十四

玄光【書】長崎の書家なり獨菴と號す天性卒直にてし愛憎情を匿さず水戸義公其の藏するところの文苑英華を借らんと欲し人をして之を請はしむ玄光固辭して應せず人あり其の故を問ふ對へて曰く吾れ其の人と爲りを喜ばず故に其請を容れざるなりと

玄照【書】姓氏詳ならず周文より出で牧溪の風を慕ひ其風を能くす

玄空【書】書を嗜み戯書に巧みなり豊前久保手山の僧なり

玄上【書】藤原氏、從四位下諸葛の子從三位參議たり承平三年正月二十一日薨ず年七十一書を好みて能くす

玄之【書】千葉玄之、字は子玄通稱茂右衞門、芸閣と號す古河侯の儒臣にして書を能くす寛政四年十一月歿す年六十六

玄陳【書】里村氏、紹巴の孫、堺に住す書を能くし法眼に叙せらる

玄明【書】歐陽玄明は其明の子、父に業を受け書に巧みなり

玄證【書】高野山月上院の住僧にして閑觀房と號す覺鑁上人の附法大東坊證印の弟子なり醍醐に入り範果の室にも學べり繪書の道に長じ巧妙を極む元久元年六月八日歿す年七十二

玄洞【書】井上氏、初め寺井玄策と稱す京師の人なり醫道を曲直瀨道三の門に受け傍ら書を學び且つ筆札に工みなり初め水戸藩に仕へて醫藥を上る義公之を召す玄洞曰く公一世に限らば吾れ當に仕ふべきなりと公即ち之を許す是に於て水戸に至り常に公の左右に侍す義公卒後致仕して京師に歸る後ち公の事跡を記して之を安積老中に贈る三木佐太夫之に由りて二書を著はす署して桃源遺事と云ふ其の筆記今猶ほ彰考館にありといふ

玄對【書】渡邊瑛、字は延輝、松臺と號す又た草堂林麓等の別號あり通稱又藏湊水の男なり後ち薙髮して內田玄對と稱す谷文晁に從ひて一家をなす山水花鳥を巧みにす文政五年四月四日歿す年七十四

玄岱【書】湖玄岱は松江と號す信濃松本藩の儒臣なり少うして桂山彩巖に學びて詩文に巧みに兼ねて書を能くす

玄琢【書】曾我氏、越前守に任せらる傳詳ならず

玄琢【書】野間

氷仙【畫】香川園葵、字は不淑、氷仙と號す養川素琴の妹なり美人の圖を畫くに長ぜり **氷高** 高芙蓉の別號 **氷計** 長澤蘆雪の名

主信【畫】狩野氏、名は主信、時信の男初名は敬信後ち明信と改む又た主信といふ澹然と號す幼名四郎次郎、後ち右京又た永叔と稱す畫を父に學び家を繼ぐ法眼に叙せらる享保九年六月七日歿す年五十狩野氏第九世 **主膳**【畫】狩野氏、永徳に學びて畫法を善くす **主税** 大石良金の通稱

平洲【畫】紀平洲、名は徳民、字は世馨、平洲は其號 又た一に如來山人と號す細井氏初め甚三郎と稱す尾張の人なり家世々農を業とす平洲幼にして穎悟學を好む延享中名古屋に出で秋元淡淵に學ぶ後ち長崎に游びて唐音を學ぶ居ること三年にして名古屋に歸り帷を下して敎授す幾くもなくして江戸に來り後進を誘掖す居ること二十年講業の盛なる殆ど虚日なし列侯貴紳より庶人に至るまで仰で師とするもの甚だ衆し聲價一時に高し尾州侯之を聞き用ゐて儒官とす又た米澤侯の賓師となり藩治を翼賛す享和元年六月二十九日歿す年七十四 **平陵**【畫】松會芳文、字は子言、通稱三四郎、平陵山人と號す下野の人、畫を以て業とす文化十年十二月六日歿す年七十三 **平良**【畫】人見氏、名は正、字は子順、山水花鳥に巧み也寛政十年六月歿す年六十八 **平蕙**【畫】名は信、字は直雅、平良の男、畫を父に學び亦能く山水を畫き文化三年歿す **平兵衛**【畫】望月氏、京都の人、文化年中 **平差**【畫】天野氏、南宗畫を善くす安政年間 **平安四竹** 宮崎筠圃、山料李蹊、御園中渠、淺井圖南の四人京師に時を同じくして畫竹に巧みなるを以て此稱あり

田善【畫】永田氏、亞歐堂と號し又た田善と稱す氏の永田と通稱の善吉を省せるなり岩代須賀川の人父昆山固と紺屋を業とす而して花鳥山水を畫くに巧みなり和畫を父に學びて稍々名あり藩侯白河樂翁之を聞き江戸に召し時の洋畫家司馬江漢に從つて洋畫を學ばしむ時に蘭人銅版畫を献ず侯其法を傳へんと欲し江漢と善吉に謀る善吉勞を吝まず刻苦經營し侯亦た財を費して終に完全なるものを製するを得て之を蘭人に贈る或は曰く兩人侯の命を以て和蘭に航し之を學ぶと蓋し誤りなり善吉文政五年五月七日を以て郷里に歿す年七十二 **田阿**【畫】何許の人たるを詳にせず江戸に住す土佐家に法り雅致多し奇人なり太田南畝と友善し寛政年中 **田原天皇**【畫】天智天皇の皇子光仁天皇の皇親、施基皇子也靈龜二年八月薨ず後ち尊號を追奉して田原天皇と稱す天皇嘗つて繪畫を好ませ給ひ閑に乘じて筆を揮はれしものあり其の親しく畫かれたるもの大和國多武峯にあり甚だ巧妙なりといふ

仙鶴【畫】堀内氏、化笛齊又た長生庵と號し晩に白鶴翁と號す水間沾徳の門に入りて俳諧を能く

に巧みなり正平十二年八月寂す

弘庵（書）藤森大雅、字は淳風、通稱泰助、弘菴は其號、又た天山の號あり江戸の人、少うして學を好み柴野碧海、古賀穀堂、古賀侗菴、長野豊山等に從ひて經史を修む最も詩を能くし又た筆札に巧みなり文久二年十月歿す年六十四

弘貫（書）住吉弘貫は廣尙の子初めの名は廣定、又た弘定、或は內記と稱す書風土佐家の古風を慕ひ筆法逸氣あり近代の名手と稱せらる從來住吉家は狩野家と齊しく德川幕府の畫師たりと雖も座席大に下れり弘貫に至りて狩野と同じく旗下に列するに至る文久三年歿す年七十一

弘蓬（書）高木氏、住吉弘澄の子、書法を父に學びて能くす元祿年中

弘齋 巻菱湖の別號

弘庵 山田陽谷の別號

弘法大師 釋空海の諡

片石（書）木村氏、中井監物に學びて山水人物を善くす

本如（書）本願寺十九世の門主なり應擧門人吉村孝敬に書を學ぶ又原在中等を招きて畫事を談じ遂に其の蘊奧を極め畫風自から圓山派の雅趣を帶ぶ文政九年十二月十二日寂す年四十九

本高 釋風外の名

包山（書）北原政治は書を廣澤に學びて能くせり

丘山（書）岳亭丘山、八島氏、名は春信、堀川多樓、又た陽齋、定岡と號す戲作者にして丸屋斧吉といふ江戸の人、狂歌を善くす畫は堤秋榮、葛飾北齋等に學びて能くせり

司直（書）藤木氏、加茂の祠官なり生直の子、從五位下甲斐守書博士に叙任す寶永六年八月入木道七箇大事を稲葉備前守正員に受く正德五年三月筆道論一篇を靈元天皇に奉り筆道本源の號を賜る同年六月重ねて入木道を近衞關白家熙公より受く甞て靈元法皇の恩顧を蒙り數々淨書を奉獻す元文三年正月二十九日歿す年五十五

生雲（書）雪淸と號す畫風雪舟の氣韻を帶べり

生直（書）藤木氏敦直の孫なり從五位下に叙せられ甲斐守に任せらる後書博士に任せらる祖父に繼いで其の名海內に布く

生白（書）雛屋立圃の子、鏡山と號す書を父に學ぶ寛文年中の人

生信（書）狩野氏、祖酉の孫、季信の弟、享保年中の人

生信（書）狩野氏、信之の二男、元祿年間の人

市太夫（書）加賀金澤桶町に住す資性風雅を好み書を善くし專ら蒔繪を畫き又茶事を愛せり淸水源四郎の門人にして世に稱する所の加賀印籠は其作市太夫の右に出づるものなく世人の賞玩する所となる

安政年中

立信 狩野永悳の名

立元 井上金峨の名

立齋〔書〕賴氏名は綱字は士常、賴山陽の姪にして又た其の門に學ぶ詩文を善くし篆刻に巧みに筆札に長ず文久三年七月十三日歿す年六十四

冬基〔畫〕藤原氏、攝政關白左大臣一條昭良の第二子、醍醐家の祖なり畫事を好みて能くす正二位權大納言に至る元祿十年七月十四日薨ず年五十

冬崖〔畫〕川上氏、名は實信濃の人、南宗畫を修め兼ねて洋畫を究む明治十四年歿す年五十四

世和〔畫〕中條氏、字は輿夫、藍泉と號す讃岐の人山水人物を能くす

世美〔畫〕北山氏、名は元章、字は世美、橘菴と號す河内の人、其先は楠公より出づ曾祖以來醫を以て業とす儒を柳澤淇園に學ぶ又た書を能くす常に士を愛して文雅の交りを重んず一奇人なり

世球〔畫〕奥田氏、字は無瑕、梅堂〻號す南都の人畫を能くす文化中

世美〔書〕關世美、字は士濟、南頼と號す浪花の人なり書體一家をなす

世脩〔畫〕瀧氏、字は子敬、草山と號す南都の人、獸類を畫くに工みなり文化年中の人

民部〔畫〕鉅鹿部氏、魏子明といふ明樂を傳へて京師に住す傍ら畫を能くし墨竹に巧みなり其の號を凌雲閣と云ふ

民聲〔畫〕大原氏、民聲は其號別に東野と號す奈良の人、大阪に住す山水人物に巧み也傳統年代詳ならず

民部之亟〔畫〕粟田口氏、累世畫を以て著る永享頃の人

台機〔畫〕佛畫を能くす甲斐國法泉寺の住職なり

台麓〔畫〕鳥羽希聰字は叡夫、通稱は萬七、台麓は其號、別に右隱の號あり漢畫を能くす天保年間

弘高〔畫〕巨勢氏、第五代の人にして公涅の子なり采女正に任ぜられ家を繼ぎて繪所の長者となる諸畫を好くして貝平親王に重ぜらる初め僧となり後ち還俗して其の罪障を悔ひ地獄の圖を畫きて供養すといふ筆法凡ならず地獄の圖の世に流布するに至りたるは此人に始まれりといふ今昔物語に曰く一條院の御代に繪所巨勢の弘高といふものあり古にも恥ぢず今も肩を並ぶる者なし云々と寛弘年中の人

弘濟〔書〕伊藤氏、志賀藏と稱す東里の子（或は云ふ弟なりと）父の業を繼ぐ人と爲り温厚にして寡言天保九年の冬徳川幕府命じて曰く弘濟父祖五世敎諭を以て任とす純徳の報想ふに當に斯の如き綿々の榮あるべし是れ世に希に見る所なり今より永く戸役を除き年々銀を賚ひて以て積善を表せんと弘化二年八月歿す私に諡して靖共と曰ふ

弘眞〔書畫〕名は文觀、醍醐寺の法務にして東寺の長者を兼轄せり法驗の聞え甚だ高し後醍醐天皇の叡旨を奉じ北條高時を討ずるの謀議に與り事發覺して流刑に處せらる梵書を能くしまた頗る書

に作る名は種次、書法を狩野光信に學べり　**左洲**〔書畫〕渡邊氏、南宗派の書家なり文久年中の人

左信の別號　狩野種信

以天〔書畫〕名は宗清、以天、又た機雪と號す山城紫野大德寺八十三世の住職にして法務の餘閑書を弄び祖師の像並に寒山拾得の圖を寫し時に山水花鳥を書けり天文二十三年正月十九日寂す年八十有三

以貫〔書畫〕穗積以貫、字は伊助、播磨の人、大坂に出でゝ教授す頗る能書の聞えあり享保十一年歿す年七十八　**以空**〔書畫〕觀音寺の住職知識の名あり　**以十**〔書畫〕小西氏、名は光是、光琳の孫なり光琳の實子春一郞故ありて京都銀座役人小西氏の養子となる以十は其子なり祖父の書風を能くす

以悅達の別號　野々村宗

右近〔書畫〕峠氏、狩野元信の門人なり曾て幕府の命を受けて節分の寶船の圖を書けり　**右岳**〔書畫〕名は宗亘、生台子と號す大德寺七十六世永正中寂す佛心正統禪師　**右嶙**〔書畫〕垣內氏、右嶙は其號、飛彈の人、書を鹽川文鱗に學ぶ　**右衞門尉**〔書畫〕津川武道三松軒の弟なり國亂に依て其名を晦まし或は醫となり或は書を業とし泉州堺に寓す織田信長之を憐み迎へて地を與ふ　**右京太夫**〔書畫〕昭明門院に仕ふ藤原隆信の女なり天性丹靑を好みて善くせり今昔物語の書を書けりといふ　**右門**〔書畫〕板橋氏、會津藩士なり藩主忠烈侯の右筆となる尊圓流の書法を善くす天保二年歿す年四十二

立圃〔書畫〕野々口氏、名は親重、松齋と號し、俗稱を紅屋庄右衞門（一に次郞左衞門一に市兵衞又た宗左衞門に作る）と云ふ丹州保津の人京師に出でゝ雛人形を鬻ぐ因りて呼びて雛屋と曰ふ和歌を烏丸光廣に書を尊朝親王に學び兼ねて又た俳諧に巧にして貞德門の二客と稱せらる書は土佐氏或は謂ふ狩野氏の門に出づと寬文九年九月病んで歿す年七十一醒世翁曰く立圃は專はら浮世繪を書けり醫師中川雲作の草双草紙の挿書は多く立圃の手に成ると又許六が歷代滑稽傳に雛屋立圃は貞德門人にして撰集數多あり又た書をよくす京童と云ふ名所記圖書あり云々竹齋の書も亦立圃なりと著はす所の書はなひ草德萬歲其他二十數種あり句あり曰く『海棠かいやさやうにはなしの花』　**立光**〔書畫〕酒卷氏、字は天瑞釣翁と號す又蓑笠釣者の號あり書を善くす　**立德**〔書畫〕立林何幣、又た大靑、後ち白井宗謙或は鶴岡、金手入道といふ光琳の門に入りて書法を學び妙手に至る　**立節**〔書畫〕中村氏、義竹と號す出雲の人書を以て水戶侯に仕へ祿三百石を食む書法を岡谷佐衞門次賢に傳へ草露貫珠を著はして印行す蓋し光國の命ずる所なり其他墨池妙訣、書法指南、書法纂要等の著書あり　**立翁**〔書畫〕立石氏、越後の人漢書を能くす

に住し後ちに赤坂に移る其の家魚を賣るを業とし松平志州侯の用達たり故に蒔畫の傍に魚屋としるせり人又呼びてト、ヤ北溪といふ初め狩野養川院の門に入り畫法を學び後ち北齋に就き其風を學び狂歌摺物を畫くに巧みなり北門の高弟と稱せらる後ちに魚屋の業を止めて畫を專業とせり北溪漫畫を著はす又た鬼武作麓の花馬琴作美少年錄二編六樹園作北里十二時および江戸名所等を畫く北溪は唯繪畫に長ぜるのみならず學を嗜み書を藏す嘉永三年歿す年七十 **北嵩**【畫】葛飾氏、原と島北氏を稱す名は重宣、醉醒齋、閑々樓蘭齋等の號あり葛飾北齋に就き畫法を學び種彦作の讀本淺間ヶ嶽面影草紙馬琴作の八丈綺談等を畫く後ちに漢書に志し東居と號す神田明神下伊勢屋佐兵衛の家に同居せりと歿年月詳ならず **北壽**【畫】葛飾一生、昇堂と號す北齋の門人、其の畫く所多くは名所繪とす文政年中の人 **北雲**【畫】、葛飾北雲は久五郎と稱す元と大工職を業とす北齋の門に學びて名手となり北齋漫畫及び讀本類を描けり天保年中の人 **北馬**【畫】有坂氏、俗稱五郎八、蹄齋又た駿々齋と號す江戸の人、北齋の門に學び善く狂歌摺物讀本の類を畫く殊に讀本の密畫に妙を得て其の畫く所皆世に行はる讀本類は馬琴作の復讐石言遺響、蘭山作の三國妖婦傳、馬琴作の常世物語、鬼武作の自來也物語等なり彩色美人畫及び左筆の曲畫を善くす畫風少しく師と異なり後ち落髮す歿年月詳ならず **北溟**【畫】高山氏、名は尙賢、平助と稱す安永六年八月二十五日歿す **北鵞**【畫】三田氏、小三郎と稱す江戸の人、畫を葛飾北齋に學ぶ天保年中 **北英**【畫】錦畫に巧なり又た俳優似顏を畫くに巧みにして常に劇場看板を畫く **北洲**【畫】北洲は大阪の人、春好齋と號す紙商にして浮世繪を善くす文政中有名の畫家なり或は曰ふ葛飾北齋の門人なりと **北川**【畫】野口氏、通稱勝章、常陸の人、椿椿山と交り書法を受けて殊に山水花鳥に巧みなり書も亦佳に篆刻を能くす明治元年歿す年五十二 **北麿**【畫】葛飾北齋の門人、天保年中 **北泉**【畫】近藤氏、通稱伴右衞門、豐後岡藩の人、北齋に學びて畫を能くす天保年中 **北岱**【畫】葛飾北齋の門人、北岱は其號、別に盈齋と號す文政中 **北龍齋**【畫】來城氏通稱平右衞門、北宗派の畫家なり嘉永年中 **北齋の女**【畫】葛飾北齋の長女畫法を父に受けて能くし柳川重信の妻となる文政年中 **北肉山人** 藤原惺窩の別號 **左**

左近【畫】長谷川氏等伯の男となせども其筆法を按ずれば大に異なる所あり宗道の畫意を得たるもののごとしと或は氏の長谷川なるを以て後人附會して其の系統となせしか何れか詳かならず **左顏**【畫】常陸眞壁郡光明寺の住職なり經學の外兼て兵略に長ず又畫を好みて雪村の奧旨を得たり左顏一に左閑に作る **左素**【畫】初め周文に學び後ち可翁の風を學べり **左近**【畫】或は右近

老人等なり其の他不染居、九々蜃白山人等の號あり又た戯作の名は時太郎可候是和齋等なり轉居の癖あり一生の轉居九十三回甚しきは一日三所に轉せしことありと云ふ幼にして聰敏後ち名を改めて鐵藏と云ふ十四五歳の時彫刻家某に就き學ぶ安永六年年十九彫刻の業を廢し浮世繪師勝川春章の門に入りて畫法を學び數年ならずして善く師風を得たり因りて師名春字を讓られ勝川春朗といふ後ち窃かに狩野家某につきて畫を學びしが春章の知る所となり破門せられ是より叢春朗と號す天明五年名を改めて菱川宗理といふ後堤等淋を學び雪舟の風を窺ひ又た住吉廣行に就き土佐の風を學び又た司馬江漢に西洋畫を學び又た明人の畫學を學ぶ寛政十一年畫風を一變し其の名を門人宗二に讓り自ら北齋辰政と號す妙見を信仰するを以て名づく妙見は北斗星即北辰星なり嘗て柳島妙見に賽し途上大雷の落つるに遇ひ堤下の田圃に陷る其頃より名を著せるが故に雷斗と名づけ又た雷震といふ是より專ら狂歌摺物又は草紙を書き或は自ら戯作をなす名を時太郎可候といふ德川將軍家齊北齋の妙技を聞き放鷹の途次文晁及び北齋を淺草傳法院に召して席上畫を畫かしむ文晁先づ畫く次ぎに北齋將軍の前に出で從容懼るゝ色なく筆を揮つて先づ花鳥山水を畫く左右感嘆す最後に長く續ぎたる唐紙を横にし刷毛を以て長く藍色を抹し豫て携へ來れる鷄の趾に朱肉を付け之を紙上に放ち趾痕を印せしめ乃ち曰く是れ立田川の風景なりと一拜して退く人皆其の奇巧に驚く是より北齋の名四方に噪ぎ畫を請ふ者及び來り學ぶ者亦日に多し然れども家常に貧しく嘗て尾上梅幸が一世一代の演劇東海道五十三次を演せし時北齋に來観せんことを請ふ北齋蚊帳を賣り僅に金二朱を得て之を懷にし劇場に赴き一覽の後ち其二朱を梅幸に與へて歸る本所の地卑濕蚊多く夜々之に襲るれども晏然筆を採る平常の如し友人某之を聞き蚊帳を購ひて與ふ文政元年名古屋に出で伊勢紀州大阪京師に遊ぶ時に佐伯岸駒が畫盛んに行はれて畫を北齋に請ふものなし適々文晁松平越中侯の命を奉じ畿內の神社佛閣にある古畫を檢閲して京師に在り窃かに北齋を招ぎ先づ龍を畫かしめ旅費を與へ促して江戸に歸らしむ而して文晁其の龍の畫を潢裝し人の來るあれば其筆力の非凡なるを賞す是より北齋の名大に京師に顯はれ人々爭て畫を購ふ天保五年富岳百景の初編を畫き名を改めて卍と云ふ爾後落欵には必ず畫狂老人卍或は前北齋卍と署す嘉永二年四月十八日歿す年九十北齋善く戯作をなし又た狂歌俳句を吟ず畫法は元と浮世繪に則とれども和漢の諸流に涉り終に一機軸を出だし晩年專ら西洋の油繪を研究し自ら其の繪の具を製すといふ其の死に至るまで凡七十餘年間畫く所夥し然れども其肉筆は多くは海外に購ひ去られ今存するもの少し板刻の畫は繪本狂歌山滿多山、東都勝景一覽、繪本東都遊、繪本隅田川兩岸一覽富岳百景、北齋漫畫三體畫譜其數十種あり錦畫は山水人物共に行はれて幽靈の圖最も世人の珍賞する所なり

北溪【畫】俗稱岩窪初五郎、後ちに金右衛門、拱齋と號し又葵園と號す江戸の人、四ッ谷鮫ヶ橋

〔書〕清波と號す其筆法は明兆を學び彩色の白鶴及び果花鳥類甚だ善し

王謹〔畫〕名は公瑜、天龍道人と號す墨色の葡萄を能くす信濃の人

幻華道人 玄東の號

斗南 細井半齋の別號

斗米翁 伊藤若冲の別號

允明 戸崎淡園の名

允明 遠坂文雍の名

爪雪 高橋杏村の別號

五畫

四明〔畫〕宮本氏、一立菴と號す加賀金澤の商賈なり通稱吉兵衛、畫を好み且つ風流を愛す家を次弟某に讓り京師に出で、圓山應擧の門に入り勉勵怠らず其の技大に進む恬淡名を求めず人の需むるあれども興至らざれば畫かず其の遺跡のごとき殆んど稀なり一日瓢然として家を出で行く所を知らず數年の後ち九州にて邂逅せし人ありといふ

四明〔畫〕上柳氏、名は啓、或は美啓、字は公通、一の字公美、四明、又た士明と號す京師の人儒家にして書風一家をなせり

四明 與謝蕪村の別號

四明 石川丈山の別號

四維 林羅山の別號

四碧 野呂介石別號

四澤堂〔畫〕芳澤氏、通稱あやめ、京都の俳優初代あやめの男、あやめ亦た俳優を業とす初め崎之助と稱す書を善くし四澤堂と號す又た俳諧を嗜み春水と號し其名文人墨客の間に知らる寶曆四年七月京都に歿す年五十三

四恕軒〔畫〕矢田氏、通稱太郎兵衛、書を好みて能くす加賀の人、文政年中

四十八谷 藤森葦田の別號

北海〔畫〕江村氏、名は綏、字は君錫、通稱は傳右衛門、北海は其の號、伊藤龍洲の第二子なり九歲より十八歲に至るまで舅氏の許にありて未だ曾て學に就かず好みて俳諧を作る一日梁田蛻巖告げて曰く子の才氣を以て能く之を藝文に移さば聲譽遠近に鳴らんと北海是より大に學に志し晝夜精勵四年學駸々乎として進む後ち宮津侯の文學江村毅堂の後を繼ぎて其の氏を冒せり天明二年二月二日病みて歿す年七十六

北汀〔畫〕吳氏、名は其正、字は必大、北汀は其號初め浦上春琴に學び後ち元明の古法を探りて一家を成す殊に山水墨竹に巧みなり兼ねて訂書を善くす天保年中の人

北齋〔畫〕葛飾氏、本姓は藤原、名は爲一、中島氏、又た葛飾氏、又た川村氏幼名時太郎、後ちに鐵藏、又た假に八右衛門、又た仁三郎と云ひ畫名は勝川春朗、叢春朗、群馬亭、魚佛、菱川、宗理、辰齋、錦袋舍、爲一、畫狂人、卍翁、卍

九皐に學び勉勵研鑽終に古法を極め聲名世に噪ぐ天明三年十一月歿す年五十八

天眞【畫】初め平安に住し後ち洛北貴船に移る書風一家をなして時に稱せらる

天室【書】名は宗竺、大德九十五世永祿二年正月寂す東光智證禪師

天祐【書】名は紹果、青霞山人夢伴子、實夢叟と號す大德百六十九世寛永六年九月歿す佛海祖灯禪師

天産【書】名は靈苗、字は天産、詩文を能くす

天桂【書】名は傳尊、字は天桂、孝螺蛤と稱す詩をよくす

天江【書】江馬天江、名は正人、又名は聖欽、字は永弼、江州阪田郡中村下坂篁齋の第六子、幼にして讀書を好み頗る才名あり醫を學び年二十一にして江馬榴園の義子となり與に仁和寺に仕して侍醫となる大阪に赴き緒方洪庵に就きて洋書を學ぶ性甚だ詩を樂しみ梁川星巖の門に入りて敎を受け詩名早く當時に顯る明治元年徵士を以て太政官史官に任ぜらる時に年四十四名を正人と改む後ち官を罷めて儒學を以て徒に授け復た仕途に就かず明治三十四年三月八日歿す年七十六

天放【書】秋月新。字は士新、通稱新太郎、天放は其號なり必山人、七劍堂、七硯堂、瑞華、無何有は皆其別號なり豐後舊佐伯藩士にして秋月橘門の男天保十二年七月生る幼にして廣瀨淡窓の門に學びて文詩書を善くす初め陸軍佐官となり又た太政官內務省等に歷任し女子高等師範學校長に任じ貴族院議員となる

天龍【畫】世に葡萄和尙と稱し葡萄の書に巧み也甲斐の人、天保年中

天岳【畫】岸氏、肥前の人岸駒に學ぶ弘化年中

天海【畫】上野寛永寺の開祖なり名は天海、南光坊と稱す慈眼は其謚號、俗姓三浦氏、奥州會津の人、武田信玄天台宗の諸師を延きて議論せしむ無慮三千人而して天海之が講主となる言辭雄壯旨趣深宏滔々として絶えず衆嘆服す是より名朝野に聞ゆ後ち德川家康に信ぜらる秀忠、家光亦甚だ之を重んず其老いて病むや家光駕を枉げて問候し親ら湯藥を奉ず敬愛想ふべし寛永二十年十月二日歿す年百三十四

天山 足利義滿の號

天山 藤森弘庵の別號

天麗【畫】渡邊氏、甲斐の人天保年中

天開窟 岸駒の別號

天散生【書】荒川氏、名は秀、字は敬元、又景元に作る小字は善吾、蘭室と號す後ち天散生と號す山城の人、紀州侯の儒官となる享保二十年歿す年八十二

天爵堂 新井白石の別號

天谷老人 梁川星巖晩年の號

天外老人 戴曼公の別號

天外戴笠人 戴曼公の別號

巴泉【畫】筆法周文を學びて能く布袋を描けり永享年中

巴山翁 釋少林の號

互瀨【畫】藤原氏安政年中

王膳【畫】吳氏、竹砂と號す又別に靜竹の號あり江戶に住す人物山水を能くす

王堂

中興【畫】狩野元信の筆意を受けて巧みなり其年代詳ならず

中信【畫】狩野氏、伊川榮信の四男にして友川助信の義子となる式部と稱し余樂齋董川と號す徳川家の繪師となり後ち法眼に叙せらる明治四年五月歿す年六十一

中信【畫】狩野氏、柳清邑信の子なり柳雪と號す明和年中の人

中漸【畫】村井氏、漸痴道人と號す又た平柯、邱壑外吏等の號あり肥後の人、西依成齋に儒を學び傍ら書畫を能くす寛政九年二月二十四日歿す年九十

中臺【書】小河保壽、字は子昌、通稱喜兵衛、中臺は其號、又た散巣主人と稱す江戸の書家なり家世商を營む中臺幼より學を好み書を善くす金石古帖及び書籍を購ひ遂に家産を蕩盡するに至る然れども泰然嗜好を變せず遂に書を以て一家をなす筆力遒逸高致あり天明三年九月十一日歿す年七十

中渠【畫】御園氏、名は常尹、字は延瞻、主計助と稱す中渠は其號、京師の人、墨竹を畫くに妙なり故に宮崎筠圃、山科李蹊、淺井圖南と共に平安の四竹と稱せらる寶暦年中

中和西村梅溪の名

中岳堂佐脇嵩之の別號

水齋【畫】井上天祐、字は順氏、水齋は其號、山水を能くす江戸の人

水月【畫】登米氏、雪舟の門人、能く文珠及び雜畫を作る文安年中

水香【畫】市村氏、高槻の人、學を藤澤東畡に受け詩を藤井竹外に學ぶ書を能くす明治三十二年歿す年五十八

水雲【畫】大島氏通稱は亮通

遠州西照寺の住職なり最も山水に長ず安政年中

天漪【書】高玄岱、字は子新、一字は斗膽、天漪は其號、通稱新右衛門、初め儒及び醫を戴曼公に學び薩摩侯に游事し後ち室鳩巣三宅觀瀾と共に幕府の召に應じ江戸に來りて儒員に列す天漪兼ねて書を能くす其法亦た戴曼公に出づ林道榮と名を齊しくす太宰春臺曰く林道榮高天漪は倶に草書を善くするを以て名あり然れども林は高に及ばず筆法變化なきが故なり但林は諸體を兼ね高は草書に非らざれば造る能はず是れ高の林に及ばざる所なりと享保七年八月八日歿す年七十四

天壽【書】韓天壽、字は大年、通稱中川長四郎、醉晋齋と號す韓國餘章玉の裔たるを以て韓氏とす伊勢の人、初め葛烏石の門に入りて文衡山を學びしが後ち東江の言に依りて二王を學び遂に一家の風を成す又た古篆を模して印刻を能くす名聲時に高し寛政七年二月二十三日歿す年六十九

天民【畫】清水鑒、字は士徹、天民は其號近江の人、初め市川君圭を師とし後ち岸駒に學ぶ東游して江戸に住し人物翎毛に長ず前に並河天民あり後ちに大窪天民あり所謂三天民是れ也中年にして歿す時人皆悼惜す

天游【書】服部氏、字は伯和、嘯翁又た蘇門居士と號す天游は其名、平安の儒者なり講說を以て生徒に授く塾を長嘯社と云ふ能書の聞へあり明和六年九月十六日歿す年四十六

天姥【書】松山敬和、字は伯義、通稱源藏、天姥は其號、江戸の人、初め書を細井

【書】通稱傳吉其世系を詳にせず肥前長崎鍛冶屋町に住す元德の門人にして書を善くす安永年中に歿す瓊浦書工傳に曰く元淇清貧にして聞達を求めず筆致清高古雅尤も沈南蘋の僞書を作るに妙にして世人之を以て南蘋となせりといふ

元明【書】名は元明、字は良哉、釋氏なり

元明【書】名は元明、字は曉巖、書をよくす

元良【書】名は元良、字は最岳、巣雲と號す大興禪師を賜はる

元昭柴山賣茶翁の名

元澄大内松岳の名

元喬服部南郭の名

中齋【書】大鹽氏、名は後素、字は子起、中齋と號し平八郎と稱す少小讀書を好み尤も王陽明の人と爲りを慕ひ專ら其學を修め又た能く吏務に熟達す文政十年天主敎の徒を京阪の間に捕へて功あり是を出身の初めとす其後十二年姦吏等竊かに豪商數人と謀りて政を亂り人を苦しむるの事あり事貴權の家人某に連及せるを以て人懼れて敢て之を問ふ者なし時に高井某大阪町奉行たり之を憂ひて中齋に謀る中齋憤然として曰く君請ふ意を勞する勿れと此れより日夜搜索し大に其實を得たり依て悉く之を執へて罪に處し其私する處三千餘金を收め悉く之を市民に與へ以て其難を救ふ天保元年是れより先き町奉行令を發して破戒の僧を論すこと數々然れども一も之を改むる者なし是に至りて中齋大に怒て其徒を捕へ悉く之を流刑に處す是より其名遠近に聞え勢望一時を傾く既にして高井某老を以て其職を辭す中齋亦た其己を知る者なきを慨き尋で共に職を養子格之助に讓り專ら諸生に敎授す天保八年米價俄かに騰貴し市中餓死する者多し中齋之を憂ひ奉行に說て貧民を賑はさんことを望む言納れられず是に於て大に怒て曰く古語に言へるあり四海困窮せば天祿永く終はらんと近年天變地異指を屈するに遑あらず然るに有司恬として知らざるものゝ如し豈に坐して是れを視るに忍びんやと藏書を賣り自から金を出して貧民を賑し且つ戒めて曰く火の擧るを視ば集り來れと又た檄を攝津河內和泉播磨に移し以て人民を煽動す既にして同志の同心平山助次郎の密告に依て事露はる中齋乃ち黨人與力瀨田濟之助小泉淵五郎同心吉見九郎右衞門渡邊良左衞門近藤梶五郎庄司儀左衞門元同心河合鄕左衞門を率ひ二月十九日火を市中に放ち城代の館を攻む城代跡部山城守逆擊之を破る中齋事の成らざるを度り火を避くる者の爲ねして八軒家より舟に駕して天滿橋下に匿くれ夜に入りて四橋より上陸し徒黨を散じ龜ヶ瀨峠を越えて吉野に走ると稱し途に案內者を殺して大阪に歸る妾は其生む所の子と共に早く其親東成郡般若寺村の農橋本五兵衞の家に遁れしめ五兵衞は之を京都に奔らしむ後に捕へらる大鹽父子は油掛町の美吉屋五郎兵衞の隱宅に潛む三月二十六日夜官吏を遣して之を圍む中齋格之助を介錯し自から火を放ちて自裁す中齋年四十六格之助年二十七

中將姬【書】橫佩右府豊成の女、世塵を避けて大和雲雀山に入り後ち天平寶字七年に至り同國當麻寺に入りて薙髮す佛書を書くに巧なり寶龜六年三月十四日安座稱名して寂す

還る時に土佐光信の男光茂猶幼なり元信光信の女婿たるを以て後見して畫所預となり越前守に任ぜらる時に年五十義澄義植義晴に歴仕す剃髮して法眼に叙せらる其畫く所温雅にして細密滋潤にして清秀山水人物鳥獸花木共に妙處を窮め殆んと神品に入る近世土佐氏の細畫雪舟の墨畫等各々其妙を極むるも獨り元信は彩墨共に其美を盡し和漢其宜きを得たり是れ古今に冠絶する所以なり永正中數幅の山水花鳥を作りて蠻船に附し以て明國に達す知勸城の鄭澤(一に溪澤に作る)之を觀て曰く筆法は趙昌馬遠の如し墨畫は牧溪玉澗に似たり一草一木亦た毫も放心する所なし日本五百年來嘗て此品あるを聞かず若し夏士良の時に遭はば必ず圖繪寶鑑中に列せんと乃ち書を元信に贈りて曰く吾れ先生の畫彩を看るに恰も趙昌馬遠の如し筆跡甚だ歡ぶ可し若し我が國に遊ぶを得ば必ず先生の門下とならんと彫工後藤祐乘元信と交り善し能く獅龍を彫して世に名あり而して皆元信畫く所に依る今に至りて後藤家代々の彫物は皆な狩野の畫に傚ふと云ふ應仁より永祿に至るまで殆んど百年の間圖畫盛んに行はれ畫師多く出で各其技を擅にすといへども土佐光信釋雪舟狩野元信に次ぐものなし嘗つて狩野永納此の三人を稱して本朝の三傑と曰ふも故なきに非ず元信文明八年八月九日を以て生れ永祿二年十月六日を以て歿す年八十四

元誠〔畫〕五十嵐氏、浚明の二子書を父に學びて能くし殊に人物に長せり天明四年十一月歿す年三十九

元敬〔畫〕五十嵐氏、浚明の三子、長兄佐野子謹の養子となる畫を能くし又た詩書に巧みなり天明年中

元仙〔畫〕狩野氏、名は方信、元仙は其號福信の男なり寶暦元年五月六日歿す年四十九駿河臺狩野第三世

元俊〔畫〕狩野氏、了乘の男、家風を能くす通稱は隼人、慶安年中

元珍 狩野春湖の名

元佐〔畫〕狩野氏松榮及び休白に學ぶ元佐一に元休に作る天正年中

元瑞 釋月仙の號

元長 安藤廣重の名

元朗〔畫〕熊本元朗(朗一に郎に作る)字は君玉、華山と號す、又た白菴の號あり服部南郭に從ひて學び詩を善くせり又葛烏石に學びて書を能くし最も楷書に巧みなり

元照〔畫〕狩野氏、通稱九郎二郎、大學了之の子、寛保年中

元賀〔畫〕墨畫を能くす多くは扇面に描けり狩野風なり

元規〔畫〕通稱長兵衞を以て呼ぶ畫を能くせり

元直〔畫〕島田氏、字は子才、子玄と號す平安の人、應擧の門に入りて花鳥を能くす

元亮〔畫〕岡本元亭、名は十貫、秋田の人、京師の儒村瀨栲亭に學びて詩を能くし又書を巧にす

元鳳〔畫〕岡本元鳳、字は公翼、通稱元達、浪華の人なり葛子琴と名聲を齊うし混沌社の一人なり又能書家たり

元陳〔畫〕吉田元陳、字田源氏、諱は守清、角倉氏の類族なり丹青の技に長ず法橋より法眼に昇任す洛東清水寺の邊に住し畫名一世に鳴る寛政七年十一月二十一日歿す

元忠〔畫〕江北氏、元信の風を學びて能くす

元淇

號、宗知の子、松榮の門人後ち加賀侯に仕ふ寛永年中

友汀【書】石田氏、幽汀の子なり父に學びて能く其家を得たり寛政年中

友房【書】菱川氏、師宣の門人、師宣の筆意に似たり寶暦年中

友閑【書】藤田氏、通稱は善兵衛、彩雲翁と號す攝津富田の人、松花堂猩々翁の高足なり又た書を能くす初め榮閑と號す子を心海といふ又た能手なり享保年中

友閑齋【書】名は有信狩野派の書家年代詳ならず

友樵【書】海北氏、通稱將監、友松の後裔なり京都に住す安政年中

友賢【書】別所氏、圓山應擧晩年の門人、好みて書を能くするを以て常に師應擧に隨從して落款の代筆をなす且つ應擧の信を得たるを以て其印章の如きも自由に押捺せしめられしを以て自書に師の印を捺したるもの亦少なからず子東溪父の書法を嗣ぐ

友德【書】佐久間氏、狩野派の書家なり書を以て仙臺伊達家に仕ふ延寶年中

友松齋 岡本俊彦の別號

友淸 狩野峰信の號

友齋【書】寺澤政長、通稱友太夫、友齋は其號江戸の書家にして寺澤流を創む元文六年正月二十四日歿す年七十一

友竹 廣瀨柳榮の別號

友竹 菱川師宣の號

元康【書】內藤氏、細川侯の臣、左衛門尉と稱す一の名は承貞、松岩と號す初め一瀧庵居士と稱す武技の傍ら書を能くし和歌に巧みに詩も亦た佳なり詠歌は載せて新續古今集にあり長康年中の人

元贇【書】陳氏、字は義都、既白山人と號す明の虎林の人、崇禎中進士に試みられて下第す寛永十五年亂を避けて我邦に來り尾張侯に客事す時に京師又江都に來り諸名士と文字の交りをなす元贇能く邦語を解す故に人と語るに唐語を用ひず初め萬治二年名古屋に於て僧元政と始めて相ひ識り契合尤も厚し其平生互に唱和する所彙めて元々唱和集と云ふ世に行なはる元政詩文は袁中郎を慕ふ本邦中郎を奉ずるは元政を以て首めとす而して元政は本と元贇に因りて中郎あるを知るなり元贇書は趙子昂を宗として大に風致あり又自から陶器を製す其風安南に似て頗る雅致あり世人稱して元贇燒と云ふ又拳法を善くす拳法とは明國に於て人を捕ふるの術なり當時未だ此技あらず元贇創めて之を浪士三浦與次右衛門義辰、磯貝次郎左衛門、福野七郎右衛門に傳ふ三人これに工夫を加へ柔術を發明し正保中江都城南西久保國正寺に於て徒に敎ふと云ふ寛文十一年六月九日歿す年八十五

元興【書】陳元興は歸化の明人、書を能くし多く黃蘗諸師の眞像を畫けり尤も墨梅に巧みに淸奇遒逸愛すべきものあり明曆年中

元信【書】狩野氏第二世初め四郎次郎と稱し後ち大炊助と改む剃髮して永仙又た玉川と號す世に古法眼と稱し狩野家の泰斗とす幼にして書を父正信に學び周文を慕ひ又た小栗宗丹を師とす天性書を好み巧みに人物鳥龜草木を畫く時人稱して奇童となす十歲に及びて足利義政に東山殿に仕へて近侍たり書を以て寵遇せらる後ち諸國の名山勝地を歷覽し景趣を臨摸し京師に

し易からんことを欲し文選淫靡の句李王鉤棘の辭皆之を取らず明に於ては唯々唐荊川歸震川王遵巖の三家を取るのみ其詩は杜工部を宗とす仁齋家屢空し然れども之に居て晏如たり又た世の毀譽褒貶毫も襟懷に介せず五子あり長は長胤次は長英次は長衡次は長準次は長堅各々儒學を以て顯はる而して長胤長堅殊に秀出たり時人相呼びて曰く堀川五藏首尾最も良しと寶永二年三月十二日病みて歿す年七十九私に謚して古學先生と曰ふ

仁慶【畫】越前の人、叡山の僧なり顯空を學び晩年資具を作りて兩界曼荼羅を圖し又た佛像を刻すといふ年代詳ならず

仁山 平林東谷の別號

友松【畫】海北紹益、友松と號す近江國堅田の人、初め狩野永德に畫を學び後ち朝鮮に航し宋人梁楷の筆意を學びて能く之を了得し遂に一機軸を出す歸朝の後ち京師に住す畫く所山水人物花鳥悉く梁楷の潑筆法を用ふ殊に人物の畫は俚俗代表人物と稱して之を稱譽す墨龍を畫いて朝鮮王に贈る王乃ち書を與へて之を賞す又た後陽成天皇の未だ踐祚せざりし時友松を召して畫法を問ふ故に間々宸筆の賛ありといふ榮譽と謂ふべし慶長二十年六月二日歿す年八十三

友雪【畫】海北道暉、友雪と號す友松の男、初め畫を父に學び後ち狩野風に移る延寶五年九月三日歿す年八十

友竹【畫】海北從親、又道香、友竹は其號なり友雪の男、家法を善くせり享保十三年九月十日歿す年七十五

友泉【畫】海北氏、友竹の男、家法を守りて能手なり元文年中

友禪【畫】宮崎氏、京師の人、後ち加州金澤に移る專ら職業を研究して遂に一家の風を興す所謂る友禪染是れなり又た畫に工みなり絹本に染物畫を寫して其精密巧妙なること他人の及ぶ所に非ず祇園の梶女が歌集「梶の葉集」に其筆跡あり元祿年中の人或ひは云ふ友禪は染工にあらずして畫僧なり專ら扇面に花鳥等を畫ぎて世の求めに應ず婦女喜びて其扇を用ゆ故に染工其畫を請ひて以て模範となし一種の染法を發明せり是れ友禪染の名ある所以なりと兩說未だ孰れか是なるを知らず

友川 狩野寬信の號

友川【畫】狩野氏、木挽町狩野の族名は助信、融川の二男、青白齋と號す畫法を父に學ぶ兄昭信早世の故を以て家を繼げり天保二年十一月歿す年二十二

友淸 狩野峰信の號

友盛【畫】狩野岑信、本氏は松本、德川家宣の命に因りて狩野氏を稱し友益と改む

友信 狩野休碩の名

友信【畫】狩野氏、休圓の子なり文政年中

友節【畫】渡邊氏、字は友節、蒙庵と號す濱松の人、春臺の門人、儒にして書を能くす

友坡 狩野宗俊の號

友甫【畫】狩野氏、名は晏信、友甫又た武益と號す光信の門人、或は曰ふ永德の門に學ぶと寶曆十二年八月二十三日歿す

友我【畫】狩野氏、通稱は內藏丞、名は是谷、友我は其號、狩野直信に學ぶ本と山本氏法橋に敍せらる天正頃

友益【畫】狩野氏、名は氏信大學助と稱す友益は其

の僧正といふ封七十戸を賜はる性書を好み佛書に工なり嘗て曼陀羅を書きて其寺に藏す依て寺號となせり永承元年五月十六日寂す年九十三

仁清 【畫】野々村氏、通稱清兵衛、嘗て土佐に至り韓人佛阿彌に就き陶法を學び元和年間京師に來り陶工宗伯の門に入り益々陶法を究め京師の近郊各所に窯を設け陶器を製せり又た書を能くす皆陶畫の風にして密圖多し陶器と共に大に世に稱せらる萬治年間歿す

仁齋 【書】伊藤氏、名は維楨、字は源佐、初の名は維貞、字は源吉、仁齋は其號又た古義堂と號す堂前に海棠一株あり因て又た棠隱の號あり平安の人、寛永丁卯堀河に生る幼にして深沈戯遊を好まず十一歳のとき始めて大學の治國平天下の章を讀み歎じて曰く今世亦之を知るもの有る乎と既にして稍々詩を屬するに用語凡ならず衆共に嘆異す十九歳にして李延平問答を讀む反復輙まず紙爲めに爛敗す是れより意を性理の學に用ひ日夕研磨し遂に心學原論大極論及び性善論を著はす皆二十八九歳の頃に在り其居る所の室に誠修の二字を掲げて自から警しむ偶々疾に罹りて人事を謝絶すること殆んど十年計り家產之が爲めに傾く親戚故舊皆勸めて醫と爲らしむ仁齋肯んぜず遂に宅を仲弟に附し別居書を讀む中年始めて宋儒の學は孔孟の意に乖くの疑を發し考索多年乃ち謂らく大學の書は孔子の遺書に非らず而して明鏡止水沖漠無朕體用一源等の說は皆老佛の淫辭にして聖人の意に非ずと是に於て門を開て生徒を延く門前忽ち市を爲す時に大高坂芝山適從錄を著はして仁齋の學を排擊す弟子將に之を辯せんとす仁齋曰く學を爲すの要は虛心平氣己れを治むるに在り何ぞ爭ひを事とせんと後德大寺公學を好み每に諸儒を會して相論難せしむ諸儒互に攻辯卒に或ひは相詆訶するに至る然れども仁齋は獨り坦夷溫厚終始爭はず年三十六にして始めて論孟古義及び中庸發揮等の諸書を草定す延寶元年敎師火あり延ひて書堂に及び百物蕩盡す此の時仁齋唯だ古義一部を持して逃れ京極大恩寺に僑居す是より先き母里村氏膈噎を患ふること三年仁齋奉養備さに至り未だ一日も懈惰せず肥後侯聘禮を厚うして招けども辭するに侍養人なきを以て應ぜず明年父亦死す服喪前後通じて四年なりと云ふ仁齋人と爲り寛厚和緩疾言遽色せず人に接する城府を設けず邊幅を修めず一に誠を以てす而して其大義の關する所に及びては之を誘ふに百石を以てすと雖も奪ふ可からず故を以て德聲日に隆し四方の士京を過ぐるもの學ぶと學ばざるとを問はず一たび其面に接し其講を聽くを願はざるはなし刺を投じて來謁するもの無慮三千餘人唯だ飛驒佐渡壹岐の人門に及ばざるのみ生徒を敎導する未だ嘗つて科條を設け督察を嚴にせず而れども各々其材を就す平生學者に勸むるに道術に明かに治亂に達し有用の材たるべきを以てし空文に馳せ記誦に流るゝを戒しむ學專ら論語を以て主とす孟子之に次ぐ旁ら易大學近思錄等の書に及ぶ敎授倦まざること四十餘年之を講ずる直ちに主意の明かなるを期して末義を硏究せず從容饜飫聽く者啓發する所多し文を作る專ら唐宋八家を崇び辭理平穩務めて通曉

文晁の風を學ぶ明治十三年四月歿す年六十八

介眉【書】田中氏、名は樹德、通稱義兵衞、大阪の人なり介石の門に學ぶ弘化年間

介于 野呂隆忠の號

介法橋【書】攝州住吉の人氏名詳ならず建長年間

介亭 伊藤長衡の號

公辨【書】公辨法親王は後西院天皇の第十六皇子寬文九年八月二十一日生る母は天條局入道前權大納言定矩の養女延寶二年五月毘沙門堂に入り公海の附弟となる元祿三年台命に依り輪王子門跡となる爰に第三世なり狩野常信を召して畫を學ぶ筆功柔順逸品少なからず正德六年四月十七日寂す年四十八

公平【書】小澤氏、名は含章、通稱多仲公平は其字なり山東と號す常陸太田村の著姓たり少より學を好み博古多識凡百の技一として習熟せざるはなし而して最も詩及び書を善くす又た書畫古器多く模寫して家に藏す甚だ交遊を好む故に四方游藝の徒水戶に來るもの必ず公平の家を主とす彰考館に入りて撰修の事に預る官小十人となり孜々道に進み未だ止むを見ざるなり寬政九年七月二十九日病みて歿す年四十

公忠【書】畫家巨勢氏第三世の人なり本性は紀氏、相見の子采女正に任ぜられ丹青の技を以て世に名あり嘗て畫の屛風を賣らんと欲するものあり帥大臣某將に買はんとして先づ公望及び弘高をして之を見しむ公望曰く恐らくは是兄公忠の畫ける屛風ならん若し然らば裏面紙縫の間悉く姓名を記せりと因りて剝ぎて之を見れば果して其言の如し其の心を畫に用ゐる此の如し天曆年中

公望【書】畫家巨勢氏第四世の人なり本性は紀氏、造酒正に任ぜらる公忠の弟子にして其の家を繼ぐ嘗て小野宮の大臣屛風を造る時公望をして小松を畫かしむ天元年中の人

公氏【書】巨勢相見の二氏なり亦た畫を以て世に名あり

公長【書】上田氏、名は公長、字は有夫、應洲と號す浪花の人なり四條派の畫を能くし頗る風韻あり天保年中

公劉【書】松村氏、京都の人、畫法を上田公長に學ぶ文政年中

公主【書】上田氏、公長の子、畫法を父に學ぶ安政年中の人

公順【書】橘氏、京都の人、畫法を上田公長に學ぶ文化年中

公麟【書】北垣氏、通稱は歌之助、畫法を上田公長に學びて能くせり文政年中

公範 釋雲室の號

公美 龍草廬の名

公美 柳澤淇園の名

公敏 池大雅の初名

仁海【書】仁海は高僧なり丹後國與謝郡の人宮道氏初め元果阿闍梨に就いて密學を受け博洽を以て稱揚せらる後ち僧正に任ぜられ小野曼陀羅寺に講席を開きて敎授す敎を乞ふもの甚だ多し時人稱して小野の密派といふ寬仁三年夏大に旱す百姓之を憂ひ種々方法を盡すといへどもいまだ天雨を下さず仁海乃ち勅を奉じて雨乞を行ふ雨沛然として至り農民大に悅ぶ斯の如きもの九度皆驗あらざるはなし世依て之を號して雨

阿闍梨の號

日橋隱士 菅原白龍の別號

心叟（畫）氏名詳ならず周文の筆意を學びて墨畫の花鳥を書き又た淡彩山水に巧みなり文明年中

心海（畫）肥前の人、廣渡と號す畫を狩野祐清に學びて能く其筆意を得後ち法橋に叙せらる長享年中の人

心齋（畫）能勢氏、薩摩の人書に名あり弘化年中

心越（書畫）名は興儔、東皐と號す明の杭州金華府蔣氏の子、延寶中我國に來る水戸光圀迎へて祇園寺を營構し心越をして開山第一世とす書畫を能くす其水墨の畫清秀觀るべし又た篆刻に巧み也元祿九年九月晦日歿す年五十七

心畫堂 本堂蘭堂の別號

心靜堂 大竹蔣塘の別號

方壺（書）佐々木禮、字は伯厚、方壺は其號、明石の人、草書を能くす年十三にして身を親族浮屠に托す長ずるに及びて磊落不羈沙門を脫して學に志し筑前に抵り龜井南溟の門に學ぶ從遊數年夙に四方の志あり遂に諸國を歷遊し山川の奇勝一々之を詩に發す一時騷壇皆方壺を推す晩年江戸に出で僧寺に寓し孤影煢々一日瓢を携へて橋上に立飲し酩酊して傍人に謂つて曰く方壺山人今逝くと杯を投じて歿す時に年七十餘

方正（書）藥師寺正信、昭乘の門人にして能く師風を得能書の聞えあり

方信 狩野元仙の名

方信（畫）狩野氏、伯清の子、畫法を父に學びて能くす天明年中の人

方琳 中野其明の別號

方顧（畫）畫を相阿彌に學びて墨畫を能くす永正年中

方祝 尾形光琳の別號、其門人亦た此號を傳用せり

方外 桑原空洞の別號

介石（書畫）野呂氏、名は隆年、後ち第五隆と改む字は松齡、別に十友、矮梅、四碧、澄湖、混齋等の數號あり紀伊和歌山の人少うして畫を好む初め池大雅の門に入り後ち清人伊孚九の法を學び山水を能くす嘗て大和多武峰に遊び黃一峯の天池赤壁の圖を觀て一本を模寫し後ち其筆意に倣ひ遂に一峯の高致を得世に所謂る三石（即ち介石竹石及び愛石なり）の第一に居る介石晩年熊野に到り其峯巒谿谷を歷覽して專ら其自然の山水を法とす阿部絹洲が介石に贈る詩に云く要レ知ニ此叟師傳處一曾沂熊谿五十回と自註に先生話中の語を用ふとあり村瀬秋水弱齡の時紀州に至り介石を訪ひ門外に立て其內を窺ふ一の巨屋を設け數人此中にありて刀槍を試み拳法を習ふ其狀講武場の如し秋水謂らく是れ甚だ文人者流の家に似ず其或は介石の家に非るかと逡巡之を久うし之を糾すに果して其家なり驚て曰く介石武備ある亦此の如きかと紀州那智山の深處は古來到り極むる者なし介名一の修驗者と謀り米鹽及び食器を背に負ひ手に苧繩を携へ行ゝ繩を以て木に懸け岩石を攀ぢ絕壁に登り危谿を涉り七日七夜にして終に通覽を遂くと云ふ文政十一年を以て卒す年八十二其弟子紀之蔡微有竹僧少林皆な其の堂に上る

介菴（畫）目賀田氏、介翁、又た文村と號す文人畫に巧なり

す平安の人、醫にして詩書に長ず

太華【書画】福田氏、名は川象、一名無量、字は子壽、通稱儀右衛門、家世々熊本藩士なり弓馬、刀槍、火術、書畫、詩文、古實、國學、和歌、天文、地理、兵法及び水練等に達し多能の士なり嘉永六年八月二十一日歿す享年五十九

太室【書画】今宮氏、通稱彦平、攝津の人、漢畫を學ぶ文政年中

太峰【書画】柳田氏、江戸の畫家なり天保年中

太白 佐久間洞巖の號

太初 福原五岳の別號

太湖【書画】氏名詳ならず狩野常信の門人、正徳年中

太湖 谷如意の別號

太眞 釋大典の別號

太玄齋 狩野素川の別號

太郎庵 高田良齋の別號

太郎庵 中林竹洞の別號

太平山人 猿山龍池の別號

太乙山人 細井半齋の別號

少林【書画】名は道淳、字は巴山、初名黄峯、畫法を野呂介石に學び山水及び花竹を善くす攝津小松村に住せり

少貳法眼【書画】畫く所の涅槃像常陸國金剛院にあり應永年中の人なり

木米【書画】青木氏、名は玄佐、字は佐平、九々鱗と號す通稱八十八、其氏名を合せ縮め自から木米翁と稱す尾張の人、京に住す陶を善くするを以て聞こゆ少壯より儒雅の交を好む當時諸先輩の爲に愛せらる中年聾となる常に頼山陽と善し山陽常に之を賞揚す天保四年五月十五日歿す年六十七

木菴【書画】木菴は明國泉州の人、呉氏、名は性[illegible]、木菴と號す黄檗山二世の住僧たり好みて觀音の像を書き又た蘭竹を作る貞享元年正月二十日寂す年七十七

木星 東東寅の名

木佛 鹽川文麟の別號

木舜 荒木寛快の名

木門十哲 木門とは木下順庵の門下なり新井白石、室鳩巣、榊原篁洲、雨森芳洲、祇園南海、松浦霞沼、南部景衡、服部寛齋、向井三省、三宅觀瀾の十人をいふ

曰人【書画】遠藤定矩、字は文規、淸右衛門、又伊豆之介と稱す別號を竹林舍、不間菴、柚菴、富山翁といふ仙臺の俳人なり伊達氏に仕へて大番頭たり頗る多能の士なり初め志村五城に從ひて經史を學び又た鈴鹿流の長刀を善くす近世俳諧の大家とす其句奇警にして餘意あり學識造詣の深きに依る所門人千を以て數ふ兼ねて書を善くし淡雅雋逸謝蕪村の風に似たり世之を珍とす天保七年四月三十日歿す年七十九

日華【書画】田中氏、字は伯暉、月渚と號す又た不明ともいふ通稱辨二、筆法四條風より出づ後一家を成す弘化二年歿す

日東【書画】京都南禪寺の住僧にして桂崑子晶の法嗣なり書畫に名あり應永中の人

日南【書画】池原氏、肥前長崎の人、畫法を鐵翁に學び南宋派の山水に長ず明治初年歿す

日新 林閬苑の一名

日南亭 金子金陵の別號

日圓房 覺和

國巴里に航し研究年を積みて歸る又た俳書を能くす

不輟齋 伊藤坦庵の別號

不言道人 司馬江漢の別號

化林【書】名は性化、字は化林、釋氏なり

化笛齋 堀内仙鶴の號

及菴【書】武下氏、及菴は其號、奥州に住す探幽の門人にして書を善くす延寶年中の人

及雪【書】繼村齋と號す雪舟の門人にして書を能くす元龜頃の人

牛南【書】雨森宗貞、字は牙卿、牛南は其號、又た一に松蔭と號す越前の人、大野の醫官たり初め山本北山に學び經史に精通す又た詩に巧みにして書を善くす當時詩豪を以て稱せらる文化十二年十二月歿す年六十

牛山【書】箕田騰、字は士龍江戸の人書を能くす

牛雪【書】牛雪は氏名詳らかにせず雪村に學びて書に巧みなり

牛丸 英一蝶の別號

孔寅【書】長山氏、字は子亮、紅園と號す又た五嶺牧齋の號あり孔寅は其の名、四條風の書を善くす秋田の人大阪に住す松村月溪の門人にして殊に人物花鳥に長じ又た鶴の舍の門に入りて狂歌を學び三條茂佐彦といふ頗着物語の著あり嘉永二年九月二十七日大阪に歿す年八十五

孔陽【書】山本氏、字は文鼎、鶴峯と號す越中の人、山水を能くせり文化年中

孔平【書】關根義勝、字は孔年、通稱謙之助、江戸の人、書を善くす

氏足【書】岡本氏、加茂縣主たり保考より傳を受く初の名は氏祥、近江守書博士に任ず又た和歌を好む天保十一年四月八日歿す年五十一

氏政【書】北條氏、右京大夫、截流齋と號す書を好み玉樂に學ぶ天正十八年歿す年五十三

氏信 狩野友益の名

氏信 狩野玉樂の名

氏信【書】狩野氏、子學と稱す狩野種次の子、延寶年中

氏綱【書】細川氏、尹賢の子、高國の義子となる右京大夫に任じ管領職を襲ぐ其遺墨聖德太子騎馬の圖は今尙河內國石川郡叡福寺に存ずといふ永祿六年歿す年六十

內麿【書】藤原眞楯の男、右大臣從二位に叙せらる丹青の道に達せり弘仁三年十月六日薨ず年五十七

內匠【書】花田氏、承應頃の人、浮世畫の名手なり

內記【書】安田氏京都の醫師文晁の畫法を學ぶ人物に巧みなり明治三年三月歿す年五十

太華【書】飯田規文、字は巨卿、謙齋と號す百川の男なり父の書風を學び且專ら董其昌の蹟に倣へり安永二年六月二日歿す年五十八

太郞姬【書】藤原氏、近衞信平公の嫡女なり父に學びて書を能くす飽畫にして氣韻あり寬永年中の人

太室【書】小幡文華、字は君英、太室山人と號

稱す文調の門人にして浮世繪師なり文化年中 **文琟**【畫】杉浦氏、通稱桂輔江戸の人、谷文晁に從つて畫を學ぶ天保年中 **文珪**【畫】高橋氏、通稱男也、文政中 **文洲**【畫】小木曾直十郎と稱す美濃の人なり鹽川文鱗に學ぶ天保年中 **文隣**【畫】小柳氏、通稱文藏、越後の人、谷文晁に學ぶ天保年中 **文笠**【畫】稻田氏、三州の人、文久中 **文寅**【畫】鈴木氏岡本豐彥に學ぶ天保年中 **文軒**【畫】山崎氏、京都の人松村景文に學ぶ文政中 **文昌**【畫】井上氏、谷文晁に學ぶ文政年中 **文囿**【畫】推名氏、谷文晁門人、嘉永年中 **文信**【畫】小島氏、上野の人、谷文晁に學ぶ嘉永中 **文信**【畫】北條氏、備前の人、畫を以て法橋に叙せらる安政年中 **文眠**【畫】竹村氏、松村景文に學ぶ天保年中 **文錦**【畫】岡部氏、和泉の人、漢畫を能くす天保中 **文鵬**【畫】鹽川氏、文鱗の男、多年清國に遊び苦心研鑽遂に南宋畫の奥儀を極む **文六**【畫】横山氏、初名松三郎、後ち父祖の稱を襲ひて文六といふ性巧思に富む幼にして心を繪事に潛め善んで北齋の漫畫を摹す會々俄艦函館に來るレイマンといふ者あり内地の形勝を圖せんと欲し土人を雇ひ爲に險惡の山川を導かしむ衆皆畏れ避く文六則ち奮つて之に應ず因て洋畫法を得たり文六素と撮影法に通ず乃ち折衷し別に機軸を出だす又た下岡蓮杖に從つて紙寫石版の諸法を受け出藍の譽れあり明治九年陸軍士官學校に奉職し其術精を加へ自ら請うて氣球に駕し其の技を試るに至る明治十七年十月十五日歿す年四十七 **文擧**【畫】野村氏、別に石泉と號す安政元年京都に生る夙に梅川東擧に學び又た鹽川文鱗に就いて研鑽す畫名世に鳴る **文進** 岸連山の名 **文池** 平福穗庵の初號 **文伍** 谷文晁の名 **文溪** 釋江西の名 **文熙** 鈴木芙蓉の名 **文熙** 小倉雪峰の號 **文奎** 北山寒巖の名 **文鏡亭** 浦上春琴の別號 **文華堂** 西川祐信の號 **文陵軒** 櫻井雪館の別號

丹崕【畫】安藤氏、狩野派の畫家なり安政年中 **丹崕**【畫】渡邊氏、康雪と稱す慶應頃 **丹崕**【畫】高井鱗、字は秋潤、應擧月溪の風を慕ひて畫を能くす **丹陵**【畫】村田氏、名は竘、初め南北合派の畫法を學び後ち川邊御楯の門に入り專ら土佐の古法を修む明治五年七月生る **丹壽**【畫】宇野氏、吉村周山に學びて畫を能くす安永年中

不昧【畫】畫僧なり妙心寺の住僧にして名は雲居慈光と號す玉潤の風を學び墨色の山水を畫くに巧みに一時世に鳴れり **不重** 小倉東溪の號 **不明** 田中日華の別號 **不如無** 釋江雪の別號 **不折**【畫】中村氏、信州の人小山正太郎淺井忠に就いて洋畫を學ぶ後ち佛

受けて妙手に至る且つ圓山風を帶び一種の畫風あり文政十一年三月十八日歿す年三十二

文二 [畫]文晁の男、畫法を父に學ぶ嘉永三年五月歿す年三十九

文中 [畫]谷文二の男父祖に畫法を學ぶ安政年中

文簡 蝌足萬里の別號

文山 [畫]佐々木氏、名は臥龍、字は文山、墨華堂と號す通稱百助、加賀の人、池庵の弟也高松侯に仕ふ書體一家をなし當時名聲天下に振ひ來りて書を求むるもの多し又書を能くす享保二年五月歿す年七十七

文山 [畫]分葉秦と稱す讃岐の人嘉永年中

文調 [畫]柳氏、初め畫法を石川孝元に學び一筆齋と稱す江戸の人、男女の風俗俳優の似顔を畫く後ち法橋に叙せらる享和年中

文朝 [畫]柳氏、初め狩野氏を學び後ち文調の門に入りて俳優の肖像を畫くに巧みなり江戸通油町に住せり義太夫節の曲を好みて當時の名手朝太夫の門に入る文化年中

文朝 [畫]柳文朝の門人にして二代目文調と稱せり文政年中

文鱗 [畫]鹽川氏、字は子温、木佛道人と號す岡本豐彥に學び門下の高手なり嘗て孝明帝の勅を奉じて畫を作る常に酒を好み醉中の作殊に洒落にして奇風あり

文鱗 [畫]鈴木氏、通稱純、陸中の人、安政年間といふ弘化中歿す年七十餘

文鳳 [畫]河村氏、名は龜、字は俊聲、平安の人、岸駒を師とし亦た諸家に出入して自ら一格をなし人物に長ず筆力雄偉又た邦俗の人物を善くす思慮を假らず筆を援きて立ろに成る其山水の如きは秀潤にして奇逸なり義子琦鳳字は五逸家聲を墜さず弟子鳳僊筆法其師に似たり文政年中

文鳳 [畫]高橋氏、通稱伊助近江の人なり嘉永年中

文麗 [畫]加藤泰都、豫齋と號す伊豫大洲の城主なり從五位下に叙し伊豫守に任ぜらる狩野家の風を學びて之を能くす天明二年三月五日歿す年七十七

文麗 [畫]甲賀氏、名は璃、文麗は其號、別に百錬堂と號す山水花鳥に巧み也明治年中

文雍 [畫]遠坂氏、通稱庄司、十友園と號す江戸の人、谷文晁に從つて畫を學び人物花鳥を能くす嘉永五年七月二十日歿す年七十

文波 [畫]林氏、名は直之、大阪の人、畫を中井蘭江に學び人物山水花鳥を能くす弘化二年三月十六日歿す

文晉 [畫]馬文晉、名は良、文信と號す江戸の人、山水を能くす

文如 [畫]西本願寺の法主なり竹隱紹智に學びて藪內流の茶道を善くし傍ら書に工みなり

文雪 [畫]中川美濃、江戸の人にして畫を能くす文雪女史と號す

文竹 [畫]野口氏、畫法を狩野常信に學びて其風格を得たり山水人物を善くす元祿年中

文平 [畫]松本獻、文平と稱す備後の人、岸駒に學びて人物山水及び龍虎の圖を能くし又た詩に巧みなり天保年中

文鳴 [畫]奥氏、名は貞承、字は萬禮、文鳴は其號、又た陸沈齋と稱す通稱順藏、京都の人にして圓山派の畫人なり應擧に學びて能く其風を得たり應擧門下十哲の一人と稱せらる文政年中

文康 [畫]安五郎と

を學びて能くす文久年中

月亭【畫】鳥山石燕の門人にして浮世繪を能くす安永年中

月齋【畫】沼田氏、通稱半左衛門元治元年歿す年七十八

月潭【畫】松井氏、通稱は靜兵衛書を以て世に名あり文政年中

月岱【畫】佐々木氏、通稱は泰、尾張の人、月僊に學ぶ安政年中

月山【畫】曾我氏、通稱二木江戸の人なり安政年中

月渚田中日華の別號

月婿釋紹等の別號

月叟【畫】山本氏、名は直、字は子諒、漢書を學びて山水に巧み也正德頃

月潭【畫】名は道徵、字は月潭、黄檗山の僧たり洛西嵯峨直指菴の開山

月溪【畫】名は中珊、字は月溪建仁寺の住職詩名高し

月耕【畫】尾形氏、本姓田井、通稱正之助、東京の人、安政六年九月生る幼より畫を好み獨學して遂に大家と成る

月海柴山賣茶翁の別號

月波樓三世豐國の別號

文觀【畫】醍醐寺の座主にして東寺長者なり官僧正となり後醍醐天皇北條氏を滅せんことを謀るに及びて文觀及び圓觀を延きて北條氏を呪詛せしむ期に及びて事泄れ硫黄島に流さる亂平ぎて圓觀等と並に本寺に還住す後ち足利尊氏叛を謀りて兵を擧げ京師を犯すに及び文觀脇屋義助等と之を拒ぐ軍敗れて退く正平十二年歿す世に小野の文觀と稱す毎に能く佛像を書く其筆跡不凡にして畫家も及ばざるものあり曾て畫く所の慈恩大師の像は能く人口に膾炙す

文惠【畫】飯室阿闍梨と稱す書に工みなり藤原伊尹の孫義懷の子なり萬壽元年新に御堂を造り十二大願の意或は觀音品偈の意を書く共に精妙なり

文慧【畫】本院敦忠の孫、佐理の二男、一には敦忠の孫、相信の二男と曰ふ比叡山に登り天台の學匠となり法印大和尚に進み大雲寺の別當に任じ後ちに岩倉提房法印と號す永承元年六月三日寂す年八十、祖師人物を畫きて妙絶なり

文晁【畫】谷氏、文晁は其號又た字に用ふ初名は文朝、文五郎と稱す寫山樓、畫學齋、蜨叟、無二等皆な其別號なり薙髮して文阿彌と號す麓谷の男壯年にして畫を加藤文麗に學び中年北山寒巖に就いて清人の畫風を修め後ち宋の牧溪本朝の雪舟、探幽の筆意を追慕し自から一家をなし德川田安家に仕へて畫師となる東都に住す人物山水花鳥蟲魚に巧みなり特に水墨山水に妙を得曾つて白川樂翁侯の命に依り集古十種を編纂す又た名山圖繪、本朝畫纂等を著はし世に稱揚せらる文晁性寛量にして典故に屑々せず子文一嘗つて某侯の宴に侍す侯七賢紛鬪の圖を作らしむ文一色を正して曰く已に賢といふ何ぞ紛爭を之れ爲さんやと侯之を聞きて曰く文一の氣慨嘉すべしと宴罷みて歸りて之を文晁に語る文晁笑うて曰く汝盍んぞ寫さゞる七賢皆な酒客豈に其の喧鬪せざるを保せんやと天保十二年十二月十四日歿す年七十八

文一【畫】谷文一、字亦同じ痴齋と號す江戸の人、藥研堀の醫師利光某の男、養はれて谷文晁の子となる業を父に

此人の流を汲めるもの也享保十六年二月七日歿す年六十七

月湖【畫】名は清、通稱大友内記、氏を脩して沈とす、長崎の人、畫法を熊代熊斐に受く天明年間京都に住す

月峰【畫】名は辰亮、月峰は其號、又た菊澗と號す池大雅の畫風を學びて硏鑽精勵能く其氣格を得たり世に之を大雅堂の二代目と稱す京師東山雙林寺長喜庵に住す天保十年十一月九日歿す年八十、義子清亮亦た畫を能くし殊に山水花卉に長じ世に稱せらる

月僊【畫】名は元瑞、字は祥譽、月僊は其號、初め圓山應擧の門に入り後ち雪舟の筆意を慕ひて櫻井雪館に學び又た元明の古蹟に法り且參するに蕪村の筆意を以てし自から一機軸を出せり最も山水人物に長ず其人物の畫品恰も乞食に似たるもの多きを以て世に乞食月僊といふ名四方に顯はれ畫を請ふもの絕えず故に富巨萬を致す人皆之を譏る然れども晩に及びて佛寺を修め貧民を賑し死に臨み遺言して餘金を官に納めて賑救に備へしむ是に於て人始て月僊の意を知る文化六年正月十六日歿す年八十九

月溪【畫】松村氏、名は春、字は伯望、允伯と號す又た存伯といふ通稱は嘉右衞門、京師の人なり壯年の頃攝津吳服村酒造業某氏の家に寓す性書を好み每に酒樽の疏を書く主人大に賞歎す遂に吳服村にて新春を迎ひたるを以て吳春と改む初め醉月を師とし又蕪村に學び兼て俳諧に巧なり蕪村の歿後應擧の畫格を好み弟子たらんことを請ふ應擧固く辭して親友とす是に於て頻りに畫學を硏究し專ら寫生に勉む遂に一家を成し山水人物花卉鳥獸皆其眞を得たり畫風蕪村應擧の二法を混和して一家の流とす所謂四條風なるものにして京都四條通りに家居するを以て此名あり實に應擧以後の名手たり文化八年七月十七日歿す年七十

月樵【畫】張月樵は名は行貞、字は元啓、彥根の人、尾張名古屋に住す市川君圭に學び人物花鳥に長じ又た雜畫を能くす其名尾濃の間に高し天保三年六月二十二日歿す年六十三

月窓【畫】谷口氏、名は世達、字は孟泉、痴絕庵と號す月僊の門人にして山水人物花鳥を能くす慶應元年四月十三日歿す年九十二

月舟【畫】但馬美含郡圓通寺の住僧なり書畫を能くす常に江州琵琶湖の水を取りて艸隷を作る因りて湖水の水を辨知せり年代不詳

月浦【畫】佛像祖師を畫く殊に觀音の像を畫くに巧みなり祥啓に似て風致之に過ぐといふ建武年間の人

月友【畫】畫僧なるか雪舟を學び釋迦普賢の像を畫けり年代詳ならず

月林【畫】久我内大臣有房の子、佛に歸して茂古林の法嗣となり長福寺を開創す丹青の技を能くす觀應二年寂す年五十九

月麿【畫】谷本氏、京都の人、喜多川歌麿の門人にして讀本錦繪を畫けり文化年中

月桂【畫】女史は久保田氏、通稱は柳子、順卿の女なり書を能くす文政年中

月穹【畫】増田氏、字は和玉、素墨と號す大和東條の人、浮世繪をよくす文化年間

月嶺【畫】川口氏、通稱直七陸中の人、月僊の畫法

傳を受く个庵一に古庵に作る寛永二十年十二月五日歿す年六十七

五岳【畫】福原氏、名は玄素、後ち元素に改む字は子絢、通稱大助、五岳は其號、別に玉峰と號す備後の人、後ち大阪に住す畫法を池大雅に學びて殊に山水に長ず後ち巧みに人物を畫きて彭城百川以後の名手と稱せらる寛政十一年十一月十七日病歿す年七十

五岳【畫】平野氏、名は聞慧、五岳は其號一に古竹と號す豐後日田願正寺に住す廣瀨淡窓に從つて學を修め又た畫を僧鐵翁に學ぶ詩書畫三絶の稱あり其筆致風韻多く最も山水墨竹に長ず寸縑尺素といへども其揮毫せる所のもの人爭うて之を珍重す明治二十六年三月三日寂す年八十三

五峰【畫】三谷氏、岡本茂彦に學びて能くす安政年中の人

五峰 武井柯亭の別號

五彩【書畫】仁木氏、通稱桐柄、書畫俳諧茶事生花及び六絃琴に巧みなり文政年中

五雲【畫】三谷氏、名は粲、字は子如畫を吳春に學びて能くす文化年中

五嶺【畫】前川氏、京都に住す柴田義董の門に入り畫を學ぶ文政年中

五嶺 長山孔寅の別號

五七【畫】京都の人、春川榮山に學び文化文政の間浮世繪を以て世に知らる

五彩樓 歌川國丸の別號

五老井 森川許六の號

五丁亭 歌川貞幸の號

五龜亭 歌川貞房の號

五毛齋 長谷川昆芳の別號

五風亭 歌川貞虎の號

五雲亭 橋本貞秀の別號

五架園 澤田名垂の號

五字庵 渡邊鶴汀の別號

六甲【畫】高間氏、中井藍江の門人にて山水人物を能くす天保年中

六所【畫】佐久間氏、名は六德、友德の子なり書を以て仙臺侯に仕ふ天保年中

六巣 英一蝶の別號

六石 釧雲泉の別號

六左衛門【畫】僧雪村の弟、常州太田に住す畫を能くし雪村歿後其印を傳用す元龜年中の人

六々山人 石川丈山の別號

支峰【畫】頼氏、名は復、字は士剛、通稱又次郎と云ふ山陽の第二子にして三樹三郎の兄なり京師三樹坡に生る明治元年車駕東幸の際扈從し同年大學二等教授に任じ二年大學少博士に進み從五位下に敍せられ後ち職位を辭し閉居して復た青雲に志さず二十二年七月八日病んで歿す年六十六

支山 釋雲溪の號

支考【畫】俳家にして芭蕉の門人なり初め僧たり鎭藏主と號す中年伊勢山田に住し涼菟に學びて俳道に達す涼菟其才を惜み師芭蕉を介して其直弟となす世に美濃派、又た獅子門統と稱するは

清婉、小蘋は其號なり又た松村と號せり弘化四年生る正章の妻なり日根對山の門に入りて書を學ぶ山水殊に妙なり

小石【畫】巨勢氏、金起と號す金親の子、天保十四年京都に生る中西耕石及岸連山に學び大に名手の稱あり

小知 伊藤八兵衞の別號

小翁 泰鼎の別號

小四郎 藤田信の通稱

小痴道人 大西圭齋の別號

小笠山樵 中井董堂の別號

小造化廬 吉澤雪菴の別號

夕田【書畫】平原氏、肥前長崎の人、畫を木下逸雲に學び又た書を能くす明治初年歿す

夕顏巷 林羅山の別號

卍老人 葛飾北齋の別號

寸田【畫】高寸田、名は爲澄、別に雨香と號す大阪の人初め畫を鼎春岳に學び後ち元明の遺法を摸して一家をなす文政中

士新【書畫】宇野氏（宇野自ら脩して宇といふ）名は鼎、明霞と號す通稱は三平、士新は其字なり京師の人、幼より學を好み初め向井三省に學び後ち師承する所なく弟士朗と刻苦精勵足戸外に出でざる十餘年なり是より先き物徂徠復古の學を江戸に唱ふ士新初め其説を悦ぶ後ち意見漸く異なり事々反駁して遂に一家の説を立て兼ねて詞章を善くし又た時に墨畫を作る風韻頗る瀟洒なり終身娶らず延享二年歿す年四十八

士朗【書】宇野氏、名は鑒（一に監に作る）士朗は其字、初めの字は士茄、兵助と稱す京師の人、士新の弟なり江戸に遊びて物徂徠の門に業を修む其學兄に劣らず世に平安の二宇先生と稱す年僅に三十一兄に先ちて歿す時人之を惜しまざる者なし

士朗【畫】井上氏、尾張の人專菴と號す枇杷園又株菴の號あり專ら醫を業とし傍俳諧を好み龍門曉臺の門に入りて其蘊奥を極む又た範古を師として墨竹に巧みなり

士善【書】伊藤氏、本と鹽田氏、播州北條の人、名は榮吉、士善は其字、君嶺と號す錦里に三男あり皆早生す士善養子となりて其家を嗣ぐ儒學を以て越前の福井侯に仕へ家聲を墮さず寛政八年某月歿す

士德【書】森田氏、名は政、通稱吹田屋六兵衞、河内の人なり大阪に移居して子錢を業とす能書家なり人と爲り洒落にして恰も書生の如し能く人の急を救ふ趙陶齋一日急あり請うて金を借る士德乃ち其數を倍して之に應ず然れども毫も德とするところなし學を好み書を能くす喜びて名流と交り又た古書畫を愛して其鑑識に富む年五十に至らずして歿す

士豐【畫】大岡氏、圓山應擧に學び其畫格を得應擧門下十哲の一人なり文化年中

个庵【畫】淀屋氏、名は言當、浪花の人、戲畫を好み又た茶事を能くす源光寺祐心に從ひて古今

辭し去りて精里に東都に從ふ旣にして精里小竹に謂つて曰く親老ゆ何を苦みて遠く遊ぶと小竹惕然として感悟し未だ半歲ならざるに歸養す文詩を作るに甚だ刻苦せず曰く文は意を達するのみ詩は志を言ふのみ何ぞ巧を弄することを之れ爲さんと然れども天才秀拔にして語自から妙靈一篇出る每に人爭ひて傳誦す書法は元明諸家を學びて唐に遡り晚年自ら一機軸を出だす流麗雅健兩ながら之を兼ぬ書名海內に噪ぐ是に於て一時書を著す者必ず序跋をもとめ詩若しくは文を作る者は必ず批評を需め又た門楣柱壁必ず其揮染を懇く人となり濶達灑落にして軀幹長大音吐洪鐘の如く低語を喜ばす心甚だ精細にして事務に通達し毫も書生迂疎の習ひあるなし諸侯の大阪に鎭戍する者多くは小竹を聘して師と爲す最も知を安中侯節山に受く凡そ當世の名人往來交遊せざることなし少年輩其著作を示すに苟くも觀る可きものあれば則ち手づから寫して之を藏む其才を愛し善に服する槪ね此の如し是れを以て人皆な小竹を愛慕す嘉永四年五月八日歿す年七十一

小琴【畫】女史は龜井氏、筑前福岡の人、昭陽の女なり書を能くし又た詩に巧みなり傍ら黑竹を畫く頗る風韻あり弘化年中

小鸞【畫】女史は竹內氏、名は千賀、字は左琴初め畫を圓山應瑞に學び邦俗の美人を寫すに巧みなり後ち好みて秘戲の圖を作る後ち岸翁を師として其の畫格を極む年代詳ならず

小蓮【畫】鈴木恭、字は遠恥、江戸の畫家、鈴木芙蓉の子なり芙蓉一に老蓮と稱するに因りて遂に小蓮と號す詩文に長ず享和三年六月二日歿す年二十五

小舟【書】小永井氏、名は岳、字は君山、通稱八郎、平野氏、家世佐倉の藩老たり小舟少うして江戸に遊び野田笛浦、古賀謹堂に就き後ち又羽倉簡堂の門に入る安政五年小永井藤左衞門の嗣となり小永井氏を冒す明年軍艦操練所の屬吏となる萬延元年修信使に從ひ米國に航し歸朝の後ち調役に進み大阪に選任す維新の後ち一橋侯の侍讀となり次で尾張侯の聘に應じ國校の敎頭となる晚年淺草新堀に卜居し子弟を集めて敎授す濠西塾の名遠近に鳴る書を巧みにし殊に行草に長ず明治二十一年二月十日歿す年六十

小花【畫】女史は森川竹窓の妻なり夫に學びて畫を能くせり文政年中

小山【書】服部氏、名は元雅、字は豐卿、通稱小右衞門、小山は其號なり仲山の男、江戸に住す文政年中の人

小香【畫】越後新潟の歌妓にして能く蘭を描き名を文人墨客の間に知らる文化年中

小香 谷秋香女史の字

小楯 武市半平太の名

小虎 田能村直入の初號

小齋【畫】田能村氏、順之助と稱す直入の子なり畫法を父に受く

小篁【畫】田能村氏直入の孫、小齋の子、畫を能くす明治四十三年五月二十七日歿す年三十二

小紫【畫】京都島原の遊女にして畫に名あり元祿年中

小華【畫】渡邊諧、字は詔卿、舜次と稱す渡邊華山の第二子なり畫を以て稱せらる明治二十年十二月二十九日歿す年五十三

小蘋【畫】野口氏、名は親、字は

題常、字は大典、蕉中と號す又た梅莊、竺常、太眞等の號あり近江の人、宇野士朗に文章詩賦を學ぶ後ち相國寺に住す內典は固より其造詣深き所常に儒家の書を好み經史に博通にして近世緇林に希れなる人と稱せらる享和元年二月八日寂す年八十三

大愚【書】名は宗築、字は大愚、妙心寺に住す

大溪【書】名は浄高、字は大溪、詩文をよくす

大休【書】名は玄殊、字は大休、書を能くす

大學【畫】狩野氏種、一に氏信に作る光信の門人なり

大和【畫】京都の人、松井氏書名あり

大鵬【畫】名は正鯤、笑翁と號す明人にし安政年中て年十七の時歸化す後ち黃蘗山に入り僧となる書を能くし

大含【畫】東本願寺の講師、雲華と號す蘭竹を畫く竹を寫すに巧みなり

大梁【書】笠原信、字は士信、大梁と號す通稱初め源三郎、後ち勘助と改む清奇愛すべきものあり松山天姥の門人にして能書の聞え高し文化八年歿す年三十九

大域【書】名は温、字は子直、久太郎と稱す遠州日坂の人書法を祖父巣父に受け東京に抵り初め神田に住し後ち根岸に移る嘗つて勅を奉じて王羲之の書聖敎序を臨摹して之を奉る天皇嘉賞し尙方の御硯を賜ふ實に楠廷尉軍神に奉るの器なり時に翁の友人岩崎桂堂賜硯歌を作りて之を贈る是れより賜硯の二字を以て其堂に扁し書名も亦一世に高し貴人爭うて其門に入る又文部省檢定するところの習字帖の字畫の誤謬を辨正すること數十の多きに及ぶと云ふ

明治三十五年二月五日歿す享年七十六

大華【畫】福田氏、通稱儀右衛門、南宗畫家なり天保年中の人

大蘇【畫】月岡氏、通稱米次郎、江戶の人、畫を歌川國芳に學び後ち遂に一家を成せり明治年中歿す

大進【書】氏名詳ならず書を以て法眼に敍せらる曾て高野大師行狀を書けり應永中の人

大鳳【畫】竹村氏、薩摩の人、四條派の畫を能くす安政年中

大園【畫】熊坂氏、奧州伊達の保原に生る太田南畝に師事す好みて戲畫を作る家素より富めるを以て和漢の圖書を蒐集し室內部を分ち室毎に書匣と机硯とを備へ人をして縱覽するを得しむ南畝其室に命じて海老藏といふ文化年中の人

大任　巻菱湖の別號

大椿翁　鈴木百年の號

大孝齋　田中訥言の名

小竹【書】篠崎氏、名は弼、字は承弼、小竹は其の號、又た畏堂と號す通稱長左衛門、三島の養子なり三島程朱の學を以て帷を大阪に下し徒に授く小竹の生父名は某、吉翁と號す加藤氏、豐後の人、醫を業とし大阪に寓す小竹は某仲子なり幼にして穎異讀書を好む九歲にして三島に從ひて業を受く三島其岐嶷を喜び以て子となす遂に篠崎氏を冒す數歲にして專ら家學を修め東西修遊して偏く山水人物を訪ふ時に古賀精里東都に鐸を執る小竹東遊して之に從はんと欲し三島の許さゞらんことを恐れ敢て面請せずして潛かに家を

を大書す寺僧皆驚歎す大雅甚だ書才あり長ずるに及びて紀伊に之き書法を祇園南海に學ぶ又た大和に之きて設色の法を柳澤淇園に問ふ又た土佐光芳に從ひて我が國の書法を學ぶ是の時望月玉蟾亦書を以て名あり大雅之と約して曰く從來我國の書家は漢法を學ばす是れより共に主唱を爲さんと乃ち倪雲林の書法を模し又清人伊孚九に倣ひ山水人物花鳥皆其奧旨を極む其圖粗密共に雅朴竟に一家を爲す又書は唐宋の古法帖を學んで其妙所を得兼ねて和歌を能くせり人と爲り蕭散恬虛貧賤に安んじ寵辱に累はされず惠みて報を望まず毀譽得失恬如顧みず平生の行事多く人の意表に出づ故に世奇人を以て之を目す書肆の僕游蕩主人の金を糜して逐はれ將さに他國に之かんとし來りて別れを告ぐ意甚だ哀し大雅乃ち書畫及び什器を鬻きて其金を償ひ爲めに謝して復た仕ふるを得しむ又夙に石刻の十三經を買ふの志あり絲積粒聚遂に錢百貫を得而れども書肆尙ほ肯て賣らず大雅乃ち大息之を久うし悉く其錢を祇園の祠に獻ず夜門戶を鎖さず夜中靑氈を敷き書畫の敗紙皆此に在り一夜盜あり物を奪て去る大雅偶睡り覺む盜を呼び返して曰く攫去すべきものは猶數品あり唯だ靑氈敗帋は我家の珍とする所取るべからず其餘は君が欲する所に從ふのみと其豪放なること槪ね斯の如し好みて名山に遊ぶ千景萬勝悉く之を筆端に發す數々富士山に登りて每に其道を異にす因て富士の圖一百を作る奇狀變態皆其經覽する所にして古今畫工の及ばざる所と云ふ又白山立山に登る是より三岳道人の號あり閒居すれば其妻玉瀾と三絃を皷し古曲を歌ふ安永五年四月十三日歿す年五十四初め漢書を學ぶや扇子數十本に描き美濃尾張近江に周流して躬自から之を沽るに賣れず乃ち歎息して歸る瀨田橋を渡る時曰く我道行はれず命なりと悉く扇を湖に投じて曰く聊か龍王を祭る也と未だ幾ばくくならずして名聲大に振ふ玉瀾亦書を能くす

大梅【書】名は鋳、字は克從、通稱小鳥酉之助、大梅居孤山堂、瓢齋等の別號あり江戶の俳人なりまた詩をよくし且つ書に巧みなり梅外と號せり淺草藏前に住し家世々商を營む夙に學を好み市河寬齋に從つて詩文を學び五山詩佛如亭等の文豪と親しみ善し俳諧は鈴木道彥に學び最も長ずる所とす天保十二年五月二十九日歿す年七十

大平【書】本居氏、初め名は茂穗、十介と稱す伊勢松坂の人、宣長の門に入りて學ぶ後ち其養子となり三四右衞門と稱し藤垣內翁と號す和歌及び文章に長じ又た書を善くす天保四年九月十一日歿す年七十八

大林【書】名は宗套、大德九十世永祿十一年正月寂す年八十九佛印圓證禪師

大心【書】名は宗統、後ち義統と更む巨妙子、蓮華童子、東堂と號す大德二百七十三世の人なり

大眉【書】名は性善、字は大眉、黃蘗山の僧なり詩文に名高し

大潮【書】名は元皓字は月枝西溟と號す

大成【書】名は照漢、字は大成又泉石陳人と號す萬福寺二十一代の住職たり

大默【書】名は慧寂、字は大默、曇華堂と號す黃蘗山の僧なり

大典【書】名は

彦に就いて書を學び後ち專ら浮世風の書を描き遂に一家を成す天保年中の人

女龍【書画】江戸山崎氏の女、巧に浮世繪を畫けり享保年間の人

之信【書画】狩野氏、正信の仲子雅樂助と稱す初め父に從ひて學び後ち南宋の諸家に出入して遂に一家をなす時に三好細川及び松永の徒相繼で亂をなす依て兄元信とともに遁れて大津に出で三井寺に寓し扇面を書きて之を鬻げりといふ文龜年中歿す年三十九

之瑜 朱舜水の名

川竹【書画】田中氏、狩野派の畫家なり常信に從ひて書を學ぶ元祿年中

丈山【書画】石川氏、名は凹、初名は重之、嘉右衛門と稱す丈山其字、六々山人、四明山人、凹凸窩、大拙、烏鱗、山木、山材、藪里、東溪、三足等の數號あり參州碧海郡の人祖正信長湫に戰死す父信定亦武名あり丈山人となり驍勇武事に熟練す又好みて書を讀み歌詩を善くし傍ら茶道に通ず大阪の役東照公の麾下に在り殊功を建てんと欲し獨り窃に營を出でゝ先登し首二級を斬る然れども其軍令を犯すを以て黜けらる遂に京師に閑居す時に年三十三乃ち藤原惺窩の門に遊び林羅山堀杏菴菅原得菴野間三竹等の諸名士と文詩相交はり嘗つて漁村夕照の詩を作る其末句に曰く欲將簑衣隰返照釣竿還是魯陽戈と惺窩稱して曰く斯の人後ち必ず詩宗とならんと母老ひ家貧しきを以て強ひて紀伊侯淺野長晟の招きに應ず將に往かんとするとき羅山及び得菴に謂つて曰く此れ吾が志に非ず已むを得ざればなり母天命を得ば我必ず吾が志を成さんと時に年四十一從ひて藝州に徙る之に事ふる十三年母疾を以て歿す乃ち上書して致仕を請ふ許されず輙ち私に行て京師に反る所司代板倉周防守は丈山と舊あり善く之を遇す乃ち德川幕府に薦めんと欲す丈山固辭す寛永十八年叡山の麓一乘寺村に於て詩仙堂を築きて以て居る畫師狩野探幽をして漢魏より唐宋に至るまでの詩家三十六人の像を寫さしめ自から六々山人と號す或は頑仙子又凹凸窩と號す日に其下に吟哦して優游自から娛しむ諸名公の經過する每に談論唱和以て娛樂とす居ること之を久うし世其風を仰ぎ來り訪ふ者日に多し丈山其應接を厭ひ板倉侯に謂つて曰く我れ老いたり甚だ世事に倦む將さに故園に歸隱して吾が天命を終んとすと侯許さず丈山曰く然らば自今復た城市に入らずと乃ち和歌一首を作りて其意を示す『わたらじな瀨見の小川の淺くとも老の波たつかげははづかし』後水尾上皇其風操を高しとし徵して之を見んと欲す丈山乃ち嘗つて作る所の和歌を書して之を上り辭するに誓うて鴨川を渡らざることを以てす上皇歎賞强へず諸侯の召辭亦皆な應ぜず寛文十二年五月二十三日歿す年九十

大雅【書画】池野大雅、名は無名、初名は勤、字は貸成、秋平と稱す霞樵九霞山樵竹居皛滸釣叟三岳道者等の別號あり京師の人幼にして穎敏五歲能く字を寫す一日横藥山に登りて千呆禪師に謁し席上楷字

坡集唐宋八大家文數品本朝史は唯々烈祖成績藩翰譜のみ而して古今の史籍制度兵法及び家譜野乘渉獵せざるなく終に能く外史政記を成す詩は務めて實際を叙して虛設を事とせず尤も歌行に長じ喜びて史を詠ず書名亦た噪がし四方爭ひ索む然れども是れ皆緒餘のみ常に心を用ふる者は經濟の學なり平生讀書に耽り著述を勤む日夕草堂に置酒するに必ず門生を呼びて對飲す尤も伊丹の釀劍菱と號する者を愛す酒醒むれば則ち燈を挑げて書を讀み五更に至りて後ち寢に就く晝は則ち巳牌前に起き自ら衾裯を收さめ戶牌を掃くを以て常と爲す性古書畫を好みて頗る賞鑑を善くす死に先だつ數日門人畫を善くする者大雅堂義寛至り請ひて山陽の像を寫す山陽其上に題して曰く身偃仰一室。而心關百姓之得失。不恤巳鹽虀。而憂人家國。嗟。是何物迂拙男兒耶。雖然焉知無念此迂拙者之時乎と其自任する此の如し明治二十四年十二月正四位を贈る

山靜 狩野永納の號

山木 石川丈山の別號

山朴 狩野永後の號

山隆 狩野永常の號

山齋 山口素絢の別號

土佐局【書】後陽成天皇の宮女にして春日神主從三位大中臣時廣の女なり畫を善くす恩寵厚く二皇子を生む

久國【書】掃部助と稱す大永甲申の年眞如堂の繪詞三卷を畫く初卷は後柏原天皇の宸翰にして中卷は靑蓮院尊鎭法親王下卷は入道前内大臣曉空前大僧正公助の兩筆なり今尙ほ眞如堂に藏す

久寛【書】中村氏、字は子伯、栗圭峯と號す紀伊の人文化年間松花堂の門人にして頗る書を能くす遂に書を以て幕府に召されて祿を賜はる

久越【書】中村氏八幡の人、

久隆【書】藤原氏、狩野派の畫を能くす文政年中

久老【書】荒木田氏、通稱宇治主稅名は正董、五十槻園と號す伊勢外宮の祠官度會正身の子なり始め彌三郎と稱し外祖父秀世の家を嗣ぎ權禰宜に補す後ち離緣して實家に還り中書と稱す後ち齋宮と稱し荒木田久世の嗣となり內宮權禰宜に補し正四位下に叙せらる幼より皇國の古典を研究し後ち賀茂眞淵の門に入り精勵刻苦遂に大家となる最も力を萬葉に用ふ人と爲り豪放不羈常に靑樓に登りて日を經、酒池肉林以て自ら娛しむ又た四方を漫遊し徒を聚め古典を敎ふ從ひ學ぶもの頗る衆し其說く所古人の說を踏まず一家の學を唱ふ實に眞淵門下の一巨擘たり文化元年九月歿す年五十九

久行【書】姓氏詳ならず中務小輔たり應安年中の人

久兵衛【書】村井氏、狩野光信の門に畫を學び後ち狩野氏を冐す慶長年中

久德齋 勝川春英の號

上山【書】淺田寬、字子裕、六兵衛と稱す上山は其號、又た大陸山人と號す江戶の書家なり細井廣澤に學びて書を善くす著書若干あり

上龍【書】三畠氏、亦乘良と稱す京都の人、初め岡本豐

て山陽を江戸巷に生む山陽幼にして鋭敏嶄然頭角をあらはす年甫めて十三春水祗役して江戸邸に在り山陽詩を作りて之に寄す柴野栗山之を見て大に歎賞して曰く春水子あり之に教へて實材となさず乃ち詞人たらしめんと欲する乎宜しく其れをして史を讀みて古今の事を知らしむべし而して史は通鑑綱目より始めよと山陽之を聞き感奮して日に綱目を讀む然れども治亂の大勢を記するのみ書法發明等は讀むを屑とせず栗山益之を奇とす年十八叔父杏坪に從ひて東遊し尾藤二洲の塾に在ること一年にして才學日に進む文化七年菅茶山其塾生を督せんことを請ふ乃ち備後に遊ぶ明年去りて京師に遊び遂に止まる時に年三十二文化十三年春水の疾篤なりと聞く時に徒を聚めて莊子を講ず卷を投じて即ち發し晨夜之に赴く京より廣島に及ぶ殆んど百里五晝夜にして至る至れば則ち及ぶことなし遺憾自ら措く能はず是より終身復た莊子を講ぜず文政元年二月春水の大祥忌に廣島に歸着し喪除きて遂に鎭西に遊び豐筑より肥に入り長崎に留まること二月强南薩隅を窮む明年春廣島に歸り母を奉じて京に入り尋で廣島に送る爾後西省虚歲なく後ち數々之を迎ふ山陽既に客寓し家を治めて儉素妄りに一錢を費やさず然れども其母を迎ふるや有無を問はず務めて懽心を奉ず一日島原に侍遊して一大酒樓に登り妓樂を召して酒を侑む朱䑺銀盤其豐美を盡くす從行の婢之を見て愕然とし窃に山陽の袖を引て曰く阿主囊中の物以て之を償ふに足る乎と蓋し山陽國を去り定省を缺くを以て深く自ら悔恨し罔極の萬一を報いんと欲するなり六年家を三本木に移す山紫水明の處と稱す春花秋葉の候皆な坐して之を知る候至れば輙ち童を携へ飄然として出で〻遊ぶ其他近畿の名勝古跡は遊屐殆んど遍ねし其遊ぶや豫め期せず興至れば即ち往く天保三年六月忽ち咳嗽を發して血を吐く醫曰く是れ積年神を勞するの致す所所謂肺血疾なり治す可らず先生豪邁死を怖れず故に敢て實を以て告ぐ一醫曰く猶ほ治す可しと山陽曰く死生命あり然れども我れ上に老母あり且志業未だ成らず假令ひ一の生理なきも宜く醫療を加ふべし我愼みて藥を服し傍ら死計を爲さん耳と時方に日本政記編述に着手す乃ち日夜勇勵して稿を構ふ曰く吾必ず之を成して地に入らんと欲すと秋に及て疾益々劇し而れども客至れば爲めに筵を設けて談笑自若たり病革まりて曰く我が死方に逼ると猶ほ眼鏡を着け政記を手にして删潤して止まず忽ち左右を顧みて曰く且らく喧く勿れ我れ將さに假寢せんとすと乃ち筆を擱し眼鏡を脫せずして瞑す就て之を撫すれば則ち已に逝く時に九月二十三日なり年五十三東山長樂寺に葬むる著はす所日本外史二十二卷日本政記十五卷通議二卷春秋講義若干卷先友錄一卷文集十卷書後題跋四卷日本樂府一卷詩鈔八卷同遺稿八卷あり山陽人と爲り瘦軀高顴眼光炯々之を望みて威あり性峻峭にして尋常の人を包容する能はず常に昇平日久しく士氣振はざるを慨す故に氣節を以て自ら持し亦た以て人を導く未だ嘗て己を屈し人に隨ひて浮沈するを求めず專ら力を文章に肆いまゝにし最も史學に精し家に藏書なく四子五經白文東

虎の名之に基くといふ明治三十五年十一月二十七日歿す年六十八

子曇【畫】宋の台州の人なり文永年中我邦に渡來す數歲の後ち歸り正安元年寧一山と舟を同じくして再び來る北條貞時待つに師の禮を以てし迎へて建長寺に居らしむ繪畫を巧みにす京師紫野大德寺に其虛空の像を畫けるものあり德治元年十一月二十八日寂す

子復【畫】稻垣克、子復と號す畫を浦上春琴に學び山水に巧なり越中の人

子明【畫】眞部璋、子明は其號、畫に巧なり紀伊侯の世臣なり

子謹【書畫】五十嵐氏、浚明の長子、父に就いて書を學び能く其技に通じ又た書を能くす天明中

子與【畫】烏山石燕の門人、安永年中

子建西堂【畫】相國寺の住僧にして好みて畫を描く書法も亦た絕妙と稱せらる自牧、是庵、松屋老人等の別號あり文明年間

兀菴【畫】名は普寧、兀菴と號す異邦徑山寺無準の法弟なり詩書を能くす

山樂【畫】狩野氏、名は光賴平三と稱す山樂は其號亦三樂と曰ふ江洲蒲生郡の人木村永光の男幼より畫を好む永光初め淺井氏に事ふ既にして豐臣秀吉に事へて近侍たり秀吉城郭を營み屢〻臨監す山樂猶は幼秀吉の杖を持して其後に從ひ其杖を以て馬を沙上に畫き人の傍觀するを顧みず秀吉見て之を奇とし乃ち當時有名の畫師狩野永德に就いて學ばしむ後ち命じて父子の義を結ばしめ狩野氏を授けて修理亮の稱を賜ふ山樂筆法深く永德の正傳を得故に其畫く所の人物花鳥岩樹能く永德の風を摸す龍虎鷹馬に至りては頗る出藍の作あり又古土佐の畫法に傚ひて歌仙の像を作る桃山百雙屛風の畫は半ば此の人の作る所なり晚年に宋元を慕ひて筆力精巧平生多く鐘馗の像を畫く病者之を求めて靈驗ありと云ふ又東福寺法堂の天井に畫ける龍（龍の頭二丈餘身の長け十八丈數日にして之を畫けり）天王寺の堂壁に畫ける太子緣起其他畿內の佛閣に觀る所の畫は其筆に係る者多し又古老の語る所を聞きて初めて犬追物の圖式を畫き又帝鑑圖說等を見て其畫を摸寫す皆世に傳播す秀吉薨ずるに及びて猶大阪に在り大阪城陷て後ち身を男山の瀧本坊に寄せ畫を社僧に敎ふ後ち德川家康に駿府に謁し恩赦を蒙りて平安に歸休し薙髮して山樂と稱す一時名を海內に振ひ畫を求むる者甚だ多し寬永十二年八月四月京師に歿す年七十七

山雪【畫】松本氏、雪舟及び周文の畫風を慕ひ人物山水を善くせり其姓氏詳ならず或は狩野山雪ならんといふと雖も然らず同名異人たること疑ふべからず

山雪【畫】狩野山雪、本氏は千賀、蛇足軒又桃源子と號す京師の人山樂の義子となる義父に從ひて學び後ち變じて一格をなす山水人物花卉鳥獸皆潤畫宋人牧溪の筆意を得たり慶安四年二月十二日歿す年六十三

山卜【畫】狩野氏、不及子と號す山樂の支裔なり筆力雋逸畫風甚だ逸氣あり年代詳ならず

山陽【書】賴襄、字は子成、久太郎と稱す山陽は其號なり父春水はじめ大阪に寓し飯岡氏を娶り

是に於て元大に賞して曰く是れなり是れなり此にして止まずんば他日名天下に顯はれんと遂に師弟の約を結ぶ後ち果して俳諧を以て大家となる二十五歳にして夫死す乃ち一人の男子をして其家を嗣がしめ己れ尼となり別居して素園と號し風流自から娛しむ千代女畫を越後の吳浚明に學びて頗る風致あり百合の圖多し安永四年九月八日歿す年七十四

千代女【畫】金澤越後守顯時の女にして足利貞氏の室となる後ち薙髮して尼となり無學禪師に學ぶ畫を好みて能くす永仁六年十月寂す年七十六

千代女【畫】土佐氏、名は光久、光信の女にして狩野元信の妻なり畫を父に學びて家風の筆意を得たり傍ら和歌を能くす天文年中の人

千代女【畫】喜多川歌麿の門人、文化年中

千楯【畫】城戸氏、京師の人、俗稱蛭子屋市右衞門書林なり鈴屋門に入て修學し其歿後荒木田久老にも疑ひを問ふ京師に鐸舍を開舍して同志の士を集めて都講たり從ひ學ぶ者頗る多し後ち通稱を範次と改め古學敎示を以て業とす弘化二年九月廿一日歿す年六十八紙魚室と號す

千幹【畫】正木氏、江戸の人初め清原雄風に從ひて學びしに雄風曰く汝の才氣我門に在るべからず千蔭を以て師とすべしと因て其意に從ひ千蔭の門に入て修學し終に一家をなす

千秋【畫】荒木氏、肥前長崎の人也畫を僧鐵翁に學ぶ明治六年歿す

千谷【畫】溝口成從、字は子誠、莊司と稱す江戸の書家なりもと美濃の人松野龍谷に學ぶ寶曆十年八月二日歿す年六十五

千晴【畫】荒井氏、通稱次右衞門、田安家の臣にして住吉派の畫を能くす文政年中の人

千春【畫】高島氏、初め大阪に住居し後ち移りて東都に居る土佐家の畫風を摸して之を能くす安政六年十一月十二日歿す年八十三

千枝【畫】畫を善くす飛鳥部常則と時を同うし畫名一世に鳴る寬弘年中

千尋【畫】金子氏、通稱柳助、越後の人安政頃

千里【畫】田結庄齋治、天民の子なり篠崎小竹及大鹽後素に從ひて儒を學び田能村竹田中西耕石及び岡田半江に就いて畫を學ぶ山水に妙なり又書を善くす大阪の人

千古【畫】一柳氏、字は萬、豫山と號す又た章堂の號あり千蔭門下にして最も詠歌文章に巧みに書を善くす文政年中歿す

千引【畫】大石氏、江戸の人、千蔭に學ぶ國學歌文を以て徒に授く天保年中

千虎【畫】川崎氏、源六と稱す幼より畫を好み沼田月齋、土佐光文に就きて學ぶ後ち京阪地方に遊び繪畫研究の傍ら古社寺の什寶を探り大に考古の素養を修め有職故實に就きての造詣頗る深し明治十一年東京に上り下谷に僑居し勸商局、大藏省等に奉職せしが後ち博物館御用掛を命ぜられて美術部の整理に勉む又た歴史故實畫を以て美術協會其他の審査員に擧げられ後ち東京美術學校敎授となり傍ら自家に門人に授く三十三年名古屋に愛知縣立工業學校の設けらるゝや聘せられて意匠科敎頭となる其畫風土佐より出づと雖も大石眞虎の筆致を慕ひ竊に隔世の師と仰ぎて私淑する所多し千

に及び諸軍と奥羽に進撃し會津平ぐに及んで歸る三年冬權大史に任ず時に廢藩論起り而して一二の雄藩可かず三洲新封建論を著して之を駁す四年大學少丞に轉じ柳原前光に隨つて清國に使す五年文部少丞に任じ侍讀を兼ぬ學制五篇を草して上る尋で大丞に陞り教部大丞を兼ぬ七年學務局長に遷り侍書を兼ぬ八年一等修選となり尋ぎて一等編輯官に任ず是より先き三洲參議木戸孝允の爲に用ひられ其奏議多く三洲の草に成る孝允薨ずるや其知己を亡ふを痛み職を辭し詩文書畫を以て樂とすること二十年寵眷衰へず時に勅あり書畫を作りて上つらしむ二十七年東宮の侍書に拜す幾くもなく辭す二十八年正五位に陞叙す三月十三日歿す年六十三

三橋【書】岡氏、名は守節、三橋は其の號、別に雨香と號す山口藩士なり劍法に長ず又た臨池の技を能くす内閣書記官たり明治某年歿す

三蝶【畫】市川氏、柳文調の門人天保年中

三樂【畫】内海氏、肥後の人なり弘化年中

三丘【畫】横池氏、勘内と稱す尾張の人、天保年中

三谷【畫】平井氏、嘉永年間の書家

三江【畫】福見氏、安政年間の書家

三陽【畫】竹村氏、文久年間の書家

三亥 市川米庵の名

三足 石川丈山の別號

三同 羽川珍重の別號

三果堂 與謝蕪村の別號

三藐院 近衞信尹の別號

三國筆海堂 正木正心の別號

三十六

峰外史 賴山陽の別號

千蔭【書畫】橘氏、名は千蔭、芳宜園と號す耳梨山人、逸樂窩、江翁等皆其別號也通稱加藤又左衞門、又は德與磨、能因法師の裔、父は枝直、町奉行大岡越前守に仕へ江戸の與力となり八町堀に住す千蔭父に學で歌を能くし又た加茂眞淵に師事し後ち父の職を受く吏務叢委すと雖ども猶ほ歌學を研覃して懈らず天明八年疾を以て職を辭す乃ち力を所好に肆にす老て業愈進む集あり荒花編と名づけ世に流布す千蔭本と本邦古言の義に精しく又た和歌を善くするを以て苟も吟咏を嗜む者は其門墻を望みて趨らざる者なし官亦其著す所の萬葉解を上らしめ賞して銀錠若干を賜ふ是に於て名聲益著はる兼ねて筆札を善くし松花堂を摸して一家を成す書は建部綾足に學ぶ揮毫せるものは扇頭紙尾も人爭ひて之を珍とす文化五年九月二日歿す年七十五

千代女【書畫】加州松任の人表具師福増屋六兵衞の女十八歳にして金澤の表具師福田彌八に嫁す幼にして俳諧を嗜む但〻僻邑師に乏し會〻有名の俳家廬元坊行脚して松任に來る千代女其旅亭を訪ふ廬元坊正さに寢に在り千代女就いて志を述べ教を請ふ初夏の候なるを以て廬元坊時鳥を題として一句を作らしむ句成るに及び廬元坊舍てゝ顧みず又一句を作る復た斯の如し而して元既に睡れり然れども千代去らず沈吟旦に達す元起き驚き問ひて曰く夜明けたりやと時に千代一句を詠じて曰く『ほとゝぎす郭公とて明にけり』

三船【畫】淡海氏、幼にして僧となり元開といふ後ち還俗す繪畫を能くす東大寺關壇院屏之圖鑑眞和尚東征傳繪の二圖は元開眞人の筆とあり三船僧たりし時に畫く所文章博士となる嘗て勅を奉じて神武以來持統に至るまでの諡號を定む今稱する所は即ち是れ也延曆四年卒す年六十四 **三島**【畫】栗川氏、名は節、字は士川、越前福井の人、十八歲にして京師に入り梅泉の養子となり岸駒に就いて畫を學ぶ資性英敏忽ちにして畫法に熟す岸駒賞して神童と云ふ二十二歲にして歿す時人之を悼惜す **三島**【書】篠崎氏、名は應道、字は安道、三島は其號、又た郁州と號す通稱は長兵衛、大阪に仕して商業を營む年四十にして始めて業を改めて儒となり程朱の學を宗とす門人甚だ多く才學一時に顯る又た書を能くし詩に巧みなり傍ら天文、卜筮、音地の類に至るまで皆能く之を究む人となり濶達にして事を處する明快人と言ふ廻避する所なし肥後の藪孤山、肥前の松江某皆之を稱す文化十年十月三十日歿す年七十七 **三休**【畫】畫風元信に似たり玉藻の風を學べりといふ山水花鳥人物に巧くみなり **三令**【書】三神氏、字は子水、後樂齋と號す通稱治郎右衛門、平安の人書體一家をなす **三石**【畫】金谷氏名は興般、字は子般、通稱與右衛門大阪の人、長崎に遊びて熊代繡江に就きて沈南蘋の畫法を學び尤も花鳥に長す寛政六年五月二十三日歿す年六十三 **三角**【書】奥田氏、名は士亨、字は喜甫、三角は其號、又た蘭亭南山の號あり宗四郎と稱す伊勢櫛田の人、年十九にして京都に出で業を伊藤東涯に受く親炙十一年殆と其室に入る年二十九擢じられて津藩に仕へ謹愼事を勤め四世に歷仕して未だ嘗て過あらず歷世皆待遇優渥呼ぶに先生を以てし名を云はず天明三年五月四日歿す年八十一 **三英**【書】望月氏、名は乘、字は君彥鹿門と號す三英は其通稱なり幕府の醫官を以て著はる少より服部南郭に學びて經史に邃し享保中侍醫に進み法眼に叙せらる明和六年歿す **三洲**【書畫】長氏、名は炗、字は世章、又秋史、原と長谷氏、幼名富太郎、又光太郎、梅外の子、廣瀨淡窓の門に入り後其弟旭莊の大阪の塾に塾長たり尊攘の有志に交はり感憤する所あり萬延元年長門を過り長藩の儒士屋蕭海及び執政周布兼翼宍戸眞澄等に交はり同藩明倫館の講師となる後ち藩命を以て彥山僧徒及び二豐の志士を遊說す文久元治の頃長藩分れて正義俗論の二黨となる三洲俗論黨の爲めに忌まれ去つて長府侯に寄り萩侯の俗論黨を斥けんことを說かしむ慶應二年長府侯の爲めに筑前に使し又薩の西鄕隆盛に會し萩藩の素志を說き兩藩の軋轢を和げ巳にして萩藩に歸る俗論黨衰ひ正義黨藩政を執り大に三洲を重用す明治元年討幕の役三洲越後口に向ふ東軍と長岡城を爭ひ其再び官軍の手に入る

信に學ぶ大阪の人文政年間

卜信【畫】大岡氏、畫を春朴に學び其風を得たり安永年中

了月【畫】字は普照、神蓮社、又靈譽と號す京師の人、縁山の貞譽了也大僧正に投じて剃染す内外の群典多く深奥を探ぐる然れども宣揚せず人之を諮詢するときは唯々笑て止む眞素自然風韻還て高く名聲倍々聞ゆ四來一面して必ず欽尙を加ふ天性畫手にして能く萬象を模す甞つて了也に陪して屢々柳營に登る大樹常憲廟其畫を召見して大に優賞を降し狩野常信に命じて之を誘導せしむ遂に以て神に通ず常に顏輝牧溪の筆意を仰慕し自稱して顏溪と號す都下に三谷氏といふ者あり其寫す所の梅を得て之を壁上に揭げて以て宴集を設く黃鸝飛び來りて畫禎に觸れ囀語して去る甞つて法兄了說上人都下淺草の行安寺に住す了月其履蹟を踐んで住持すること年あり老後資了旭に附屬して燕居す了旭夭す更らに法姪了眞に附す處々に遊歷す後亦寺に歸る幾ばくなくして病を發す自ら起たざることを知つて專志念佛す又每日門生を集會して終期の軌を修習す小經懺悔發願念佛自から磬を鳴らして引頭すること凡そ二旬許疾を忍んで廢せず資了巖を顧視して謂つて曰く了月愚鈍なりと雖ども習禮日を積む豈に本懷を遂げざるべけむやと末期身を奮つて起たんと欲す侍者曰く疾勞已に深し爭でか起坐に耐へん唯釋尊入滅の儀相に隨つて可なりと首を揮つて答へて曰く了月何ぞ鶴林の儀に同うすることを得んやと乃ち承仕男五一をして背後を扶抱せしめ端坐合掌して佛顔を瞻仰し習ふ所の式を力修す念佛會に至りて眠るが如くにして化す寶曆八年十月十七日なり年七十四

了尊【畫】宅磨派の畫人なり嘉曆三年九月二日歿す年六十三

了歸【畫】墨色の竹雀を畫くに巧みなり年代不詳

了貞【畫】野村氏畫法を狩野常信に學べり

了昌【畫】青山氏、狩野安信の門人寛文頃

了派【畫】石井氏、名は滋久、通稱彌三郎、幼名千代菊、宗祇法師の門人にして連歌にたくみなりまた畫を善くす逍遙院より古今集傳授を受く天文五年法橋に叙せられ永祿二年五月歿す子孫世々京師に住して連歌の宗匠たり門下業成りて名を成しゝもの多し

了慶【畫】渡邊氏、狩野家の畫を學びて花鳥を能くす

了琢【畫】狩野氏、名は秀政、長六と稱す信正の二男、慶長年中の人

了乘【畫】狩野秀政、又た秀之、了乘は其號眞笑の男、家風を善くす常に天神の像を畫けり元和年中の人也

了不【畫】狩野氏、治部と稱す畫法を眞笑に學びて能くす慶長年間

了石【畫】馬淵氏、狩野安信に學び狩野氏を稱す正保年間

了山【畫】永井氏、江戸の人南宗畫を善くす嘉永年中の人

了齋【畫】吉村氏、蘭陵の子なり畫法を父に學ぶ嘉永年中

了慶【畫】三河臨濟寺の僧なり能く山水を畫く嘉永年中

了軌釋雲室の號

了介熊澤蕃山の字

歿

九洲【畫】和尚名は龍粿、葵齋と號す觀音大士の像一千七百餘軀を畫けり江西和尙の法弟にして建仁寺に居る壯年入唐の志あり謂へらく漢土に遊ぶ者は必ず補陀落山に到り觀音大士を拜して風雅を祈る我亦大士の冥護を得るにあらざれば恐くは志を得ずと乃ち每日大士の像を畫き遂に一千七百軀に達す之を携へて入唐し歸朝の日之を法姪正宗に示すといふ永享年中の人

九江 森蘭齋の別號

九江【畫】青木水、畫を能くす嘉年永中

九鴻 高橋杏村の名

九般 柴田耕齋の別號

九老 紀梅亭の別號

九々鱗 青木木米の號

九德齋 勝川春英の別號

九成堂 佐竹永海の別號

九里香園 鹽谷宕陰の別號

九霞山樵 池大雅の別號

九疊仙史 田能村竹田の別號

十洲【畫】小栗氏、名は光胤、字は萬年、十洲は其號宗栗の後裔、平安に住し兼て詩を能くす文化年中の人

十洲【畫】細川氏、名は潤次郎、十洲と號す舊高知藩士なり明治四年歐米に遊び歸朝後元老院議官に任じ累進して樞密顧問官文事秘書官長に任じ又た華族女學校長となる勳功を以て華族に列し男爵を授けらる文學博士たり

十水【畫】山本氏、通稱は清平南宗派の畫人なり嘉永中

十千 浦上春琴の別號

十友 野呂介石の別號

十內 小野寺秀和の通稱

叉兵衞【畫】和久氏、名は宗是、豐臣秀吉の書佐と爲り仙臺侯と相善し叉兵衞致老し來て仙臺に寓す侯客禮を以て之を遇し遣りて黑川郡大谷邑に住せしめ將さに身を終へんとす大坂の役起るに及び叉兵衞馳せ赴て豐臣氏の爲めに死を致さんと請ふ侯其志の奪ふ可らざるを知り終に之を遣る即日西上す和議即ち成る叉兵衞其將さに破れんとするを知り遂に留りて去らず軍果して起る其從者に謂つて曰く吾れ老たり一戰せんと欲するも得べからず汝城の保たざるを見ば來り報せよ吾れ將さに自から處する處あらんとするなりと因て其家に在りて城殆んど陷ると聞き將さに秀賴に一見し然して後ち死せんと欲す然れども道路梗塞して達する能はず奮ひて曰く兜なければ則ち人必らず老を侮りて近かずと乃ち白綾を被り兜を戴き紐を裁して之を擲ち躍りて東軍に入り遂に死を致す時に年八十一世稱して曰ふ齋藤實盛の遺風ありと

叉兵衞【畫】岩佐氏、名は勝重、世に浮世叉兵衞と稱す浮世繪の始祖なり天正七年父荒木攝津守村重織田信長の命に背きて自殺す時に叉兵衞二歲乳母に誘はれて本願寺の支院に隱れ越前の岩佐氏に育はる因りて其氏を冒す慶長年中京師に出で土佐光則の門に入りて大和繪を學び研鑽攻究後ち一家の風をなし越前侯に仕ふ其畫く所當時風俗の人物美人或は遊女白拍子等遊興の戲畫を作るに巧なり

叉新 林閬苑の名

卜有【畫】宗軒と號す東大寺緣起を畫く永正頃

卜菴【畫】山本氏、通稱十治郎大岡卜

二畫

二洲【書】尾藤氏、名は孝肇、字は志尹、二洲は其號、一に約山と號す通稱良佐、伊豫川江村の人、幼にして足疾あり大阪に來りて學を片山北海に受け復古學を講究す是の時安藝の賴春水亦た社友たり二洲と友善し洛閩の書を得て之を喜ぶ乃ち二洲に勸めて之を讀ましむ二洲亦た甚だ之を嘉みし以て正學となし相共に斯に從事す又た中井竹山の兄弟と親善なり寛政中德川幕府召して昌平黌の教官となし俸二百石を賜ふ其の足疾あるを以て特に官舎を黌の境内に賜ふ後ち第を壹岐坂に賜ひて老を養はしむ二洲人と爲り恬淡簡易詩は陶柳、文は歸震川を愛す老に及びて又た白傳を喜ぶ又た東儒名分を淆亂するを憎み詳に和漢名稱の當否を辨ず文化十年歿す年六十九

二天 宮本武藏の號

二鄕 浦上春琴の別號

二直庵【畫】曾我氏、直庵の男、父の名を繼ぎ直庵と號す二世なるを以て二直庵と稱せる也筆力父に劣らず粗畫尤も世の愛稱する所となる天和年中

七里 田崎草雲の別號

七重阿闍梨 釋靜尊の號

八兵衛【畫】伊勢屋八兵衛は別號小知、江戸の人豪放爽快好みて俳諧を作り三井親和に就いて書を學び晩年師の風を脱して自ら一家をなす後年産を破りしかば俳諧を以て業となし其居る所に就きて神田菴と號す常に人に語つて曰く人は童心天眞爛熳たるを失はざるを貴しとす高尙なる理論をなして何事をか能く爲し得むと乃ち多く兒童の玩具を蓄へ紙虎、藁馬、河豚皷、蘆管笛、錯落として左右に碁布し從容として常に其の間に坐す文化三年江戸大火あり八兵衛も又其災に遇ふ門人等至れば其家既に燒失して師の之く所を知らず皆以爲く師は年已に高し恐らくは焚死すと猶人を四方に派して之を求めしむ時に罹災者數百人皆護持院原に居る八兵衛また其中にあり松下に踞し筆を執りて俳句百韻を批す而して絶えて火を知らざるものゝ如し歿する年九十二

九如【畫】董氏、俗稱井手平助、名は弘梁、字は仲漁、九如は其號、幕府の臣にして西丸扈從となる又廣川居士、鞏門黄蘆園、遯窩室、遯齋等の別號あり宋紫石に就いて畫を學び後ち一家をなす享和二年七月二十三日歿す年五十九

九皐【書】細井氏、名は知文、字は天錫、別號は縮齋、又た澤雉道人といふ廣澤の男なり父の業を受けて書を能くす後ち事に坐して仕籍を削らる天明二年五月四日歿す年七十二

九皐【書】伊藤氏、華岡の男なり父の業を受けて能くし書風相似たり

九成【書】林氏平安の書肆にして早く能書の聞えあり名は義端、字は九成、通稱は九兵衛、文會堂と號す正德元年五月八日

長谷川雪旦の別號
一龍齋　二世歌川豊國の號
一龍齋　歌川豊春の號
一法齋　歌川芳豊の號
一雄齋　三世歌川豊國の號
一雄齋　歌川國輝の號
一筆齋　柳文調の號
一筆庵　池田英泉の號
一立庵　宮本四明の號
一立齋　安藤廣重の號
一勇齋　歌川國芳の號
一柳齋　歌川豊廣の號
一壽齋　歌川國政の別號
一旭齋　歌川芳秀の號
一停齋　歌川芳基の號
一鶯齋　歌川國周の號
一鶯齋　歌川芳梅の號
一孟齋　歌川芳虎の號
一峰齋　歌川芳鷹の號
一張齋　歌川芳廣の號
一桂齋　歌川芳延の號
一藝齋　歌川芳富の號
一登齋　歌川芳員の號
一物齋　歌川芳春の號
一蘭齋　歌川國綱の號
一勢齋　歌川芳勝の號
一風齋　歌川國明の號
一聲齋　歌川芳鶴の號
一春齋　歌川芳照の號
一春齋　歌川畫英の號
一蓮齋　歌川芳近の號
一集齋　歌川芳爲の號
一猫齋　歌川芳榮の號
一停齋　歌川芳基の號

一好齋　歌川芳兼の號
一鳳齋　歌川國盛の號
一燕齋　歌川芳鳥の號
一光齋　歌川芳盛の號
一圓齋　歌川國丸の號
一松齋　歌川芳宗の號
一寶齋　歌川芳彥の號
一寶齋　歌川芳藤の號
一寶齋　歌川國盛の號
一素齋　歌川芳貞の號
一雲齋　歌川國長の號
一翁齋　歌川國滿の號
一嶺齋　歌川芳雪の號
一魁齋　月岡芳年の號
一蕙齋　歌川芳幾の號
一翠齋　佐脇嵩之の別號
一海眼　釋鶴汀の別號
一時軒　岡田惟中の號
一具庵　一具の庵號
一峰閑人　英一蝶の別號
一閑散人　英一蝶の別號
一簑烟客　大西圭齋の別號

乙二　【書】陸奥白石の亘町千住院の山伏なり松窓と號す自居の門に入り俳諧を以て東北に鳴る門人に一具、布席、多代女、禾月女、乙良等あり文政六年七月九日歿す年六十九女喜代女溶々と號す亦俳名あり

像及び人物に巧みなり最も墨畫に長ず應永年中

一道 (畫)野馬氏、磐城標葉郡の人、年十二始めて畫を學び壯より老に及び諸州に歴遊し日に毫を揮うて竹を寫す遒勁縱横老て益々壯なり其の墨竹甞て叡覽を經といふ自から言ふ區々の拙畫至尊の清鑒を蒙むる高位重祿の榮も亦何ぞ之に易へんやと又た曰く吾半生他の技能なし故に終身竹を畫きて獨り樂むのみと悠然自得世と相忘る號して墨竹仙人と云ふ明治十六年東京淺草に歿す時に年百二歳

一具 (畫)一具庵一具は高梨氏、名は里春、羽州村山郡楯岡村の人、少にして家を離れ奧州岩代の專稱寺に入り髪を削り禪を學ぶ學成りて福島大圓寺に住す晩に俳諧を嗜み乙二に從つて學ぶ文政中寺を弟子に讓り東西に行脚し遂に江都に來り交りを由誓に結び中橋に僑居す傍ら書を能くす嘉永六年冬歿す年七十三

一六 (畫)巖谷一六、名は修、幼名辨治、古梅と號し別に金粟道人、喩霞樓主人、呑澤山人の號あり舊水口藩侍醫巖谷玄通の男也年甫めて六歳父を喪ひ母に從ふて京都に赴き母家に寓し八歳某の門に書を學ぶ十三歳皆川西園の門に入り學を攻む十六歳醫博士三角東圃の塾に醫學を修む二十一歳業成りて藩に歸り父の職を襲ふ明治の初年徵士議政官となり後ち太政官大書記官に轉じ七年內閣書記官に任せらる二十一年元老院議官に轉じ後ち貴族院議員となる人となり瀟落にして酒を嗜み又た雅樂俗曲概ね知らざるなし詩を能くす明治三十八年七月十一日歿す年七十一

一華 (畫)村田氏、通稱八郎兵衛、甲斐の人、南宗畫家なり文政年中

一味 (畫)狩野常信の門人なり元祿年中

一晶 (畫)芳賀氏、名は治貞、京都の人、別に冥靈堂、昆山翁の號あり俳諧を鷄冠井令德に學ぶ又た書を好みて能くす寶永四年四月二十八日歿す年五十六

一阿 (畫)鈴木氏、安政年中の畫家なり

一雄 高嵩谷の別號

一雄 (畫)鮎川氏、四條派の畫家、嘉永年中

一丘 (畫)大久保氏、伊豫の人、安政年中

一信 狩野尚信の初名

一信 狩野氷碩の名

一信 (畫)狩野氏、種次の子、初名は氏信、元祿年中

一信 (畫)逸見氏、江戸の人、畫を狩野素川に學ぶ文久三年歿す年四十八

一正 藤田幽谷の名

一山 釋一寧の號

一隅 久隅守景の別號

一蜓 二世英一蜂の別號

一淸 能勢心齋の別號

一善 鈴木鳴門の別號

一章 横山華山の名

一水 佐脇嵩元の初號

一蟬 小川破笠の初號

一位局 (畫)藤原政子（一に雅子に作る）飛鳥井大納言雅親の女なり繪畫を好みて土佐光信の風を學び物語又は人物扇合等を圖す甞て岩屋物語事實を畫きて其詞を書す永正年中の人

一得齋 岡本一抱の號

一陽齋 一世歌川豐國の號

一陽齋 狩野永納の號

一陽齋 狩野泰信の號

一陽齋

畫は小枝と雖も半ば風敎に關す徒に美花錦鳥を畫て俗眼を慰するは我徒に非るなりと一蕙慷慨にして氣節あり嘉永癸丑米艦の渡來せしより幕府屢々政を失す一蕙憂憤に勝へず畫を乞ふものあれば毎に神風夷艦を覆すの圖を作りて之に與ふ蓋し志氣を振作せしめんとする也安政元年米艦再び來る乃ち子可成を遣し其形勢を察し其地理を圖らしめ策する所あらんとす其年皇城火災あり一蕙御屏風を畫き褒賞を賜はる是時に當りて外患日に迫り國事甚だ非なり乃ち當路者某に因り時勢策一篇を上る天子之を嘉納し其名を問へば卽ち御屏風を畫く者也五年九月幕吏一蕙の父子を獄に繫ぎ尋で江戸に押送す一蕙獄中に在り幕吏の詰問を受くる毎に義を執りて屈せず六月十日父子遂に釋されて京師に歸る一蕙四中瘡を病み遂に癒えずして歿す年六十五時に安政六年十一月十四日なり文久二年父子の罪名を免じ明治二十四年從四位を贈る可成後ち長州侯に祿せられ宮內省出仕と爲るといふ

一休【畫】紫野大德寺四十七世の住僧なり名は宗純、初名は周覺、一休は其字狂雲子、夢閨、瞎驢、國景等の號あり後小松帝の蘖子なり幼時より出家して大德寺華叟宗曇の弟子となり佛道を修行して乍ち知識高德となる遂に華叟に嗣で大德寺に住す性磊落にして驕慢なり然れども人之を敬畏す又た畫を能くす就中花鳥山水人物の如き粗にして清趣あり特に梅樹、岩及び蘭を工みにしまた狂歌を善くせりといふ文明十三年十一月二十一日寂す年八十八

一峨【畫】沖氏、名は貞、字は子仰、通稱淵泉一峨は其號、後年剃髮して靜齋と號す、鳥取藩の人、江戸大名小路に住す極彩色の畫に巧みなり安政二年八月十一日歿す年五十八

一溪【畫】狩野重良、內膳と稱す一溪は其號、光信に就いて學ぶ或は曰ふ松柏の門人なりと寬文二年正月二十日歿す

一溪【畫】名は宗什、閑雲子と號す書を能くす大德寺二百十一世貞享元年六月寂す年六十七眞覺普應禪師

一翁 大岡春朴の別號

一翁【畫】狩野重郷は荒木攝津守村重の臣池永重元の子なり久藏と稱す狩野松榮に從つて畫を學び其氏を受け狩野內膳と稱し一翁と號す元和二年四月歿す年四十七

一抱【畫】岡本氏、通稱爲竹、一得齋と號す醫を以て名あり又た書を能くす近松門左衞門の弟なり

一鳳【畫】野村氏、周防の人、南宗畫家なり安政年中

一鳳【畫】森敬之、字は子交、通稱文平、大阪の人、徹山の養子なり畫法を養父に學び其筆意を得たり藻刈船の圖大に行はる藻を刈るは邦音もうかるに通ずるを以て商家競ひて之を藏す安政年間歿す

一笑【畫】宮川氏、高嵩谷の次男なり一珪の養子となり後ち英一笑と稱す安政五年八月歿す

一豐【畫】歌川氏、國芳の門人にして五池堂と號す慶應年間の人

一樹【畫】尾形光琳の風格を畫く氏名等詳ならず元祿年中

一雲【畫】通稱彌三郎、肥前長崎の人、畫法を狩野永德に學び大和畫を能くす天正年中

一之【畫】江藏主と稱す畫法を明兆に學びて能く其風を得佛

に二十七日に作る）年七十一 **一川**【畫】英一舟の男、家法を守りて戯畫を能くす安永七年正月二十八日歿す **一川**【畫】畫僧なり雪舟の畫風を慕ふ年代事歴詳ならず **一珪**【畫】英氏（或は一桂に作る）一蝶四世の孫にして名は信重（一に重信に作る）一川の男なり畫法を父に學ぶ天保十四年十一月歿す年九十六辭世の歌に『百まではなんでもないとをもひしに九十六ではあまり早死』 **一嶂**【畫】英氏、一蝶の門人なり寶曆十年四月二十八日歿す年七十 **一寧**【畫】一山と號す宋の臺州胡氏の子也幼にして郡の鴻福寺の融無等の席下に投じ久しからずして律を應眞に聽き臺を延慶に學ぶ已にして義學の勤を嫌ひ天童山に登り疑を堂頭敬簡翁に質し又た鄭の珍藏叟に依る會々他所に移り後ち愷東叟、昭寂窓、及彌頑極互に相來る一寧此三師に奉事す又た環溪横川の諸耆宿に謁し益々造詣を深くす元の宋を滅するに及びて法を祖印寺に闢らく居ること十歲補陀山に移る永仁六年我商船明境に達す初め辛巳の夏元國の樓船我西鄙を偵ふ神靈力を戮せて風波破蕩し元主野心止まず奇謀百計す我が邦人浮屠を貴ぶと聞き一寧に諭して間牒の爲め來らしむ一寧已むことを得ず船に駕して大宰府に着す時に正安元年なり副元帥平貞時之を聞き激怒して豆州に流竄す、或る人一寧の道譽を稱す貞時元より祖師の道法を重んず是冬延て巨福寺の席を主どらしむ尋で圓覺淨智二寺に移る正和二年夏圓規庵龍山に化す初め後宇多上皇一寧の德望を聞て屢々召し見んと欲す是に於て元師府に勅して一寧を促して上都に赴かしむ其秋寺に入る上皇山に幸して道を問ふ眷遇最も隆渥なり書法に精しく畫に巧に自賛の墨畫多く世に傳はる氣韻清高筆力雄勁なり文保元年歿す年七十一 **一恕**【書】李氏、字は眞榮、朝鮮慶尙道の人、文祿の役時に年二十三我が兵に捕へられ紀伊に來りて歸化し教授をなす博聞强記尤も易に精通し且つ書に巧みなり藩主德川頼宣之を遇するに客禮を以てす寛永十年歿す年六十三 **一甫**【書】小笠原長和、理左衞門と稱す江戸の書家なり明和七年十一月二十六日歿す **一蜻**【畫】大村氏、通稱清吉二世高谷の男、浮世繪を畫く **一茶**【畫】俳諧寺と號す小林氏、通稱彌太郎、信濃の人、幼にして母を失ひ繼母の爲めに苦しむこと久し自ら嗣を避けて早くより風雅に身を委ね初め素丸に學び後ち隨齋成美に從つて俳諧を學ぶ其俳趣脱俗洒落自ち一機軸を出だせり書も亦佳なり江戸に遊ぶこと十餘年文化十一年十一月十九日歿す年六十五 **一船**【畫】雪舟の畫風を學び山水を能くす年代事歴詳ならず **一歩**【畫】梅津氏、江戸の人、花鳥に巧みなり天保年中 **一味**【畫】隅田氏、狩野常信の門人なり元祿頃 **一蕙**【畫】浮田氏京師の人、原と豐臣氏、內藏允と稱す初の名は公信後ち可爲と改む一蕙の名最も著はる平居孝經を讀み諳誦一字を錯らず友弟に敎ふるに必ず先づ孝經を先きにす嘗つて孝經の圖を作りて之を天朝に獻ず常に門生に謂て曰く

め東都に於て澤庵和尚に參し頗る其堂奥に入る然れども甚だ重んぜられず因て京師に出で愚堂に見えて印見解を呈し遂に印記を受く常に法皇の寵遇を蒙り壯年にして在世佛頂國師の號を賜はる時人之を稱す曾て烏丸光廣、小堀政一、松花堂昭乘等と方外の友たり法務の餘暇書を好み一筆い達磨其他祖師の像を畫けり粗にして頗る氣韻あり又た茶道を善くす正保三年三月十九日寂す年三十九

一蝶〔畫〕英氏、本氏は多賀名は安雄、字は君受、幼名は伊三郎、長じて治右衛門又た助之進と稱す一蝶は其號、又た翠簑翁、牛丸、舊斗堂、一峯閑人、一閑山人、隣樵庵、隣濤庵、曉雲、六巣、瀾雪、寶蕉、和央（一に應に作る）雲堂の數號あり大阪の人、某侯の侍醫多賀伯庵の子なり年十五にして父と共に東都に移り吳服町新道に住す畫を狩野安信に學びて狩野信香と稱す或は曰ふ狩野安雄と稱すと年久うして遂に妙手に至り人物花鳥を善くす當時書家に佐玄龍、佐文山あり俳諧に芭蕉、其角、嵐雪あり金工に横谷宗珉あり通客に紀伊國屋文左衛門あり皆な親睦の友なり故に畫風に自ら俳興ありて觀るもの頤を解くに至る遠く鳥羽僧正を距るの後ち戲畫は一蝶を祖とすべし又た俳諧を好む書は玄龍に學びて之を能くし書畫一筆の名圖あり其畫風は斯の如きを以て或は浮世繪の評を下すものあるも實は狩野家の正風にして時に戲畫を描くことあるのみ元祿中佛像師村田民部と謀り戲に當世百人首一卷を著はす事執政者を誹るに坐し十一年十二月三日三宅島に謫せられ阿古邑に居す時に年十七在留十二年島中の石土木皮を以て繪具を製して畫く世に之を島一蝶と稱し特に賞翫す一蝶母に仕へて孝也謫居中恒に畫を母の許に送りて衣食の資に給す寶永六年九月赦に遇て東都に歸る年五十八其赦に遇ふ時會々一蝶草花の上に止まるを視る因て氏を英、名を一蝶と改む是より其畫益々行はる人となり豪放洒落嘗て市に奇古の石燈あり諸侯爭ひて之を買はんとす一蝶乃ち馳せ行き囊を傾けて之を購ふ又た新茄子を鬻ぐを視て亦た高價を以て之を買ふ是に於て每日火を石燈に點じて茄子を喰ひ傲然人に謂て曰く此乃ち天下第一の歡樂なりと又た隆達節の曲を好み新譜を製する者多し朝妻舟及東天白最も世に著はる嘗て妓某の話により女達磨の圖を畫く之を女達磨の圖の始とす晩年薙髮して朝湖と號せり又た潮湖、長湖と書す享保九年正月十三日歿す年七十三

一蜂〔畫〕英氏、春窓と號す初代一蝶の子、又は曰く門人と名は信勝、長八と稱す一號は栗舍、畫風能く師の格を得て妙なり元文二年十一月十一日歿す年四十七世或は之を以て二世一蝶に作る

一蜂〔二世〕〔畫〕英氏、又た一蜓と條す初代に繼ぎて二世一蜂と稱す天明八年六月十二日歿す

一蜩〔畫〕英氏、二世一蝶の二男、百松、孤雲と號す後ち源内と改む父の風を得て戲畫を能くせり

一舟〔畫〕英氏二世一蝶の義子なり（一に初代一蝶の義子に作る）名は信種、彌三郎と稱す一舟は其號、又た東窓翁、潮窓の號あり父の畫法を繼ぎて同じく戲畫に長せり明和五年正月廿三日歿す（一

日本書畫人名辭書

上巻

杉原夷山
清水退軒 編纂

一齋【書】佐藤氏、名は坦、字は大道、一齋は其號別に愛日樓、老吾軒の號あり江戸の人初め信行と名づけ幾久藏に改む年廿一にして坦に改め捨藏と稱す曾祖周軒始めて儒を以て岩村侯に仕へ家老に陞る祖治助信全、父勘平信由皆職を襲ぎて國政を執る一齋幼にして讀書を好み又た臨池の技を能くす射騎刀鎗學ばざる所なし又北條氏の兵小笠原氏の禮を學ぶ書は則ち七歳にして三井親和に從び篆隸諸體を學び擘窠字を作る成童に至りて嶄然頭角を見はす寛政二年始めて仕籍に登り入りて祭酒述齋の未だ林氏を嗣かず藩の公子を以て濱街の下邸に居るに近侍し倶に來往學を講ず又た井上四明、鷹見星皐の門に出入して其論を聽く四年浪花に遊び間大業の家に造る大業介して中井竹山に從學せしむ乃ち日夜切劘し業大に進む遂に京師に遊び皆川淇園に見え尋で家に歸る五年林簡順の門に入り其邸內に寓し始めて儒を以て業とす交る所松崎慊堂、清水赤城、市野隼卿の徒皆一時の後秀なり既にして名聲漸く高く門人日に多し大小侯伯斯文に志あるもの延聘して講說を請ひ殆ど虛日なし文化二年林氏の塾長となりて衆門生を督す文化九年侯の世子國を承くるや一齋を擢んじて老臣と同じく列して國事を議せしめ賜ふに廩米十五口を以てし師範と稱す後ち四口を加賜す姬路平戶二侯も亦た賜るに俸米を以てす其他尙ほ數家あり名聲海內に噪ぎ道に志し文を學ぶもの贄を其門に執らざるなし天保十二年幕府庶政を一新し賢良を求む是に於て擢じられて儒員となり祿二百苞を賜はり別に俸米十五口を給せられ昌平官舍に住む一齋黽勉從事し後進を誘掖し經義を講說し敢へて頹老を以て之を人に委ねず是に於て天下の人目して以て山斗と爲し景仰せざるなし侯伯以下迎聘して講を乞ふもの前後數十家或は駕を官舍に枉ぐ凡そ士民の門に入るもの無慮三千人と稱す同年特旨を以て易を幕殿に講ず嘉永三年廩米百苞を下賜し尋で班を布衣に進めらる安政六年八月廿四日歿す年八十八

一絲【書】江州永源寺の住僧なり名は文守、桐江と號す一絲は其字、岩倉木工頭具堯の三男、後ち加茂の靈源寺並に丹州法常寺の開基たり初

巍 七十二 籀 七十二 麝 七十二 韡 七十二

〔二十二畫〕 歡 七十二 鑑 七十二 鷗 七十二 聽 七十二 辯 七十二 讀 七十二 孿 七十三

〔二十三畫〕 顯 七十三 巖 七十三 麟 七十三

〔二十四畫〕 靄 七十三 靈 七十四 讓 七十四

〔二十五畫〕 籬 七十四 觀 七十四

〔二十六畫〕 鼇 七十五

〔二十七畫〕 矑 七十五

〔二十八畫〕 麋 七十五

〔三十畫〕 鸞 七十五

索引終

薪四十 蕭四十一 憲四十一 整四十一 蕪四十一 獨四十一 辨四十二 龜四十二 暾四十二 髻四十二
頭四十二 澹四十二 澤四十三 鴨四十三 篤四十三 錦四十四 華四十七 燕四十七 靜四十七 曉四十七
學四十八 親四十八 賴四十八 龍四十九 蕃五十 默五十 環五十一 醒五十一 積五十一 豫五十一
縉五十一 錄五十一 醍五十一 遵五十一 璘五十一 衞五十一 憩五十一 蕉五十一 頴五十一 隨五十一
勳五十一

〔十七畫〕

檉五十二 戴五十二 翱五十二 霞五十二 濟五十三 隱五十三 謙五十三 皞五十三 應五十三
彌五十四 檀五十四 聱五十四 穗五十五 鴻五十五 螺五十五 孺五十五 謝五十五 鍾五十五 滕五十五
學五十五 穉五十五 簣五十五 濯五十五 駿五十五 聲五十六 篷五十六 膽五十六 濱五十六 闇五十六

〔十八畫〕

歸五十六 禮五十六 雛五十七 額五十七 雙五十七 甕五十七 鵞五十七 藍五十八 豐五十八
鯉六十一 瞻六十一 繡六十一 蟠六十一 舊六十一 叢六十一 織六十一 燾六十一

〔十九畫〕

關六十二 櫟六十二 藝六十二 證六十二 願六十二 懷六十二 繪六十二 鵬六十二 羅六十二
邊六十三 寶六十三 鏡六十三 麓六十三 騎六十三 蟾六十三 藤六十三

〔二十畫〕

覺六十四 露六十四 嚴六十四 蘇六十四 藻六十五 蘆六十五 蘐六十六 鐘六十六 釋六十六
礫六十六 蠖六十六

〔二十一畫〕

櫻六十六 鶯六十六 蠣六十六 鶴六十六 蘭六十七 鐵七十七 灌七十二 鬢七十二 飜七十二

蜂十五　痴十五　矮十五　遍十五　暉十五　嗣十五　煙十五　感十六　開十六　煌十六
煥十六

〔十四畫〕

歌十六　熊十六　種十六　精十七　彰十八　輔十八　遠十八　漸十八　嘉十八
榕十八　監十八　維十九　圖十九　禎十九　綾十九　稱十九　福十九　臺十九　綱十九
端二十　碧二十　翠二十　榮二十　翁二十一　豪二十二　對二十一　壽二十二　蒼二十二　榲二十二
鳳二十二　鳴二十三　綠二十四　遜二十四　鞆二十四　熙二十四　暢二十四　蜨二十四　塵二十四　蒹二十四
蓑二十四　聚二十四　碩二十四　蜻二十四　槐二十四　鼓二十四　漁二十四　齊二十四　畸二十四　槎二十四
魁二十四　蒲二十四　夢二十五

〔十五畫〕

賣二十五　興二十五　閱二十五　慰二十六　遯二十六　墨二十六　駕二十六　儀二十六　醉二十六
遮二十六　蓬二十六　蔡二十六　適二十六　樂二十六　縵二十七　撝二十七　稻二十七　諸二十七　蓼二十七
層二十七　養二十七　寫二十八　慧二十八　慶二十八　潮二十九　賓二十九　隣二十九　樗二十九　篆二十九
徹二十九　窮三十　德三十　履三十　篁三十　節三十一　蔣三十一　潭三十一　魯三十三　熾三十三
盤三十三　毅三十三　蓮三十三　廣三十四　範三十六　輝三十六　磊三十六　瘦三十六　駒三十六　輞三十六
澗三十七　播三十七　嘯三十七　磐三十七　嘿三十七　確三十七　輪三十七　震三十七　寬三十七　銳三十八
賞三十八　潛三十九　蝶三十九　餘三十九　儋三十九　穀三十九

〔十六畫〕

澧三十九　融三十九　賢四十　橫四十　曇四十　叡四十　頤四十　遷四十　噲四十

富百八 棠百八 尊百九 隆百十 敦百十 集百十一 順百十一 渡百十一 棕百十一 惠百十一
喜百十二 喝百十二 善百十二 渤百十二 統百十二 湊百十二 壹百十二 智百十二 逸百十三 喚百十三
疎百十三 斯百十三 無百十三 絕百十四 費百十四 等百十四 寒百十七 湛百十七 象百十七 堯百十七
菱百十八 博百十八 湖百十九 雲百十九 貫百二十一 晚百二十二 晴百二十二 景百二十二 越百二十三 屠百二十四
陽百二十四 虛百二十四 傑百二十四 復百二十四 堤百二十四 粟百二十四 硯百二十四 溫百二十四 嵐百二十四 偃百二十四
筌百二十四 棣百二十四 斐百二十四 湘百二十四 補百二十四 備百二十四 鄉百二十四 萏百二十四 貴百二十四 萍百二十四
朝百二十四 就百二十四 衆百二十四 棻百二十四 都百二十四

下卷

〔十三畫〕

嵩一 源一 瑟二 琦二 意二 愛二 葛二 滄二 鼎三
誠三 詩三 業四 達四 鳩四 暘四 筠四 遊四 頑五 聖五
畫五 楠五 嵯五 照五 董五 楊六 經六 會六 塞六 幹六
馴七 搜七 瑛七 葉七 新七 粲七 載七 雷七 傳七 遂八
愚八 瑞八 資八 運八 慊八 圓八 慈八 道九 楚十 義十
楳十一 敬十一 溪十二 椿十二 楓十三 雅十三 琴十四 萬十四 碎十五 落十五
莊十五 葦十五 葎十五 萩十五 葭十五 葫十五 葡十五 蜆十五 睡十五 蜀十五

剛七十　晉七十　烏七十　栗七十　笑七十一　栢七十一　家七十一　祚七十一　草七十一　悅七十二
涼七十二　眞七十二　海七十四　素七十四　秦七十六　桂七十六　栖七十六　耕七十六　貢七十七　厚七十七
格七十七　茗七十七　晏七十七　孫七十七　神七十七　破七十七　桑七十七　馬七十七　拳七十八　息七十八
峻七十八　盈七十八

〔十一畫〕

惟七十八　鳥七十八　蛇七十九　國七十九　莆八十　悠八十　偷八十　透八十　研八十
理八十　淡八十一　袋八十一　基八十一　勘八十一　細八十一　巣八十二　啓八十二　部八十二　偃八十二
笠八十二　敏八十二　許八十二　淨八十三　祥八十三　陶八十三　鹿八十三　晦八十四　終八十四　規八十四
教八十四　曼八十四　紫八十四　雪八十四　寂九十　梵九十　粱九十　野九十　將九十　乾九十
清九十一　康九十三　盛九十三　深九十三　淑九十三　庸九十三　紹九十三　常九十三　淳九十四　曹九十四
笛九十四　荷九十四　魚九十四　崧九十四　淇九十五　筑九十五　訥九十六　探九十六　梅九十八　得百一
梨百一　通百二　梧百二　專百二　船百二　逍百二　帶百二　章百二　連百三　累百三
修百三　貧百三　釣百三　笳百三　祭百三　御百三　雀百三　張百三　麻百三　習百三
斜百三　混百三　爽百三　琇百三　第百三　頂百三　漢百三　移百三　梓百三　彪百三
畢百三　犀百三

〔十二畫〕

勝百四　爲百五　堅百五　散百五　登百五　棋百六　菁百六　菘百六　幾百六
惺百六　黄百六　琢百六　舜百七　巽百七　閑百八　棗百八　超百八　菊百八　琳百八

季十　武十一　林十一　周十二　其十三　長十四　芭十六　政十六　東十七　宗二十一
抱二十四　拙二十五　佩二十五　泥二十五　忠二十六　芥二十六　雨二十六　青二十六　枕二十七　芳二十八
直二十九　和三十　宜三十　苑三十　松三十一　金三十二　受三十四　易三十四　枝三十四　玩三十四
拜十四　侗三十五　承三十五　泊三十五　亞三十五

〔九畫〕

洞三十五　若三十六　星三十七　冠三十七　昭三十七　珍三十七　重三十七　風三十八　律三十八　胡三十九
洲三十九　威三十九　恒三十九　范三十九　宣三十九　拾三十九　奇四十　苗四十　紀四十　紅四十
英四十　柏四十一　指四十一　述四十一　貞四十一　柴四十二　契四十二　俊四十二　泉四十三　前四十四
咸四十四　要四十四　後四十四　亮四十四　相四十四　柳四十五　是四十五　珉四十六　保四十六　思四十七
看四十七　即四十七　秋四十七　幽四十九　柯五十　美五十　信五十　茂五十一　南五十一　春五十五
香五十九　省六十　茅六十　修六十　畏六十　畊六十　括六十　待六十　飛六十　咲六十
珂六十　枯六十　眉六十　則六十　胤六十　約六十　昂六十一　枳六十一　柿六十一　郁六十一
洗六十一　穿六十一　持六十一

〔十畫〕

祐六十一　眠六十二　純六十二　淩六十二　宮六十二　流六十三　索六十三　浪六十三　荔六十三　師六十三
庭六十三　益六十四　恭六十四　晁六十四　茶六十四　夏六十四　殊六十四　浚六十五　珠六十五　荊六十五
浩六十五　悟六十五　晃六十五　栲六十六　容六十六　宸六十六　兼六十六　特六十七　桃六十七　乘六十七
能六十八　峰六十八　泰六十八　時六十八　高六十八　祖六十九　鬼七十　峨七十　書七十　袖七十

〔六畫〕

宅五十五 向五十五 兆五十六 全五十六 夙五十六 宇五十六 曲五十六 自五十六 交五十六 伊五十六
至五十六 仰五十七 充五十七 式五十七 池五十七 在五十八 仲五十八 西五十八 吉五十九 休五十九
共六十 舟六十 有六十 行六十一 安六十二 圭六十三 守六十三 光六十三 朴六十七 旭六十八
江六十九 竹六十九 老七十二 羽七十二 年七十二 百七十三 如七十三 成七十四 米七十五 好七十六
名七十六 多七十六 朽七十六 耳七十六 先七十六 考七十六 艮七十六

〔七畫〕

良七十七 杜七十八 汶七十八 君七十八 快七十八 助七十八 呑七十八 佛七十九 角七十九 完七十九
忍七十九 李七十九 克七十九 志七十九 吳八十 秀八十一 村八十一 佚八十一 別八十一 伯八十一
岐八十二 似八十二 希八十二 廷八十二 男八十二 釆八十二 冷八十二 見八十二 孚八十二 作八十三
辰八十三 赤八十三 邦八十三 佐八十三 孝八十三 妙八十四 利八十四 杏八十四 含八十五 沙八十五
甫八十五 杉八十五 忘八十五 迂八十五

中卷

〔八畫〕

始一 岡一 侃一 房一 知一 往一 昔一 油一 侍一 奉二
夜二 卓二 岷二 臥二 孟二 尙二 征三 芝三 幸三 空三
性四 延五 明五 岸五 京六 具六 定七 虎七 坦七 竺八
果八 宕八 芙八 徂八 岳九 昆九 孤九 昌十 波十 來十

索引

上卷

〔一畫〕一 一　乙 六

〔二畫〕二 七　七 七　八 七　九 七　十 八　又 八　卜 八　了 九

〔三畫〕三 十　千 十一　子 十三　兀 十三　山 十三　土 十五　久 十五　上 十五　女 十六　之 十六
川 十六　丈 十六　大 十六　小 十八　夕 二十　卍 二十　寸 二十　士 二十　个 二十

〔四畫〕五 二十一　六 二十一　支 二十一　月 二十二　文 二十三　丹 二十五　不 二十五　化 二十六　及 二十六　牛 二十六
孔 二十六　氏 二十六　内 二十六　太 二十六　少 二十七　木 二十七　曰 二十七　日 二十七　心 二十八　方 二十八
介 二十八　公 二十九　仁 二十九　友 三十一　元 三十二　中 三十四　水 三十五　天 三十五　巴 三十六　互 三十六
王 三十六　幻 三十七　斗 三十七　允 三十七　爪 三十七

〔五畫〕四 三十七　北 三十七　左 三十九　以 四十　右 四十　立 四十　冬 四十一　世 四十一　民 四十一　台 四十一
弘 四十一　片 四十二　本 四十二　包 四十二　丘 四十二　司 四十二　生 四十二　市 四十二　氷 四十三　主 四十三
平 四十三　田 四十三　仙 四十三　玄 四十四　古 四十五　由 四十六　白 四十六　可 四十七　正 四十七　石 四十九
半 五十　永 五十一　玉 五十三　令 五十五　必 五十五　甲 五十五　甘 五十五　卯 五十五

堯孝流 和歌所
堺流 牡丹花
二樂流 雅康
宗雅流 飛鳥井流
鳥飛井流 榮雅
尙通流 近衞
植家流 近衞
○尊圓流
傳內流 建部
大橋流 重政
宗鑑流 山崎
尊朝流 青蓮院
尊純流 青蓮院
尊鎭流 青蓮院
飯尾流 常房
鳥飼流 宗慶
尊應流 青蓮院
龍山流 近衞
道澄流 照高院
近衞流 信尹
後陽成天皇流
於通流 小野
素眼流 金蓮寺
光悅流 本阿彌
宗貞流 小島
勅筆流 後醍醐天皇
後柏原天皇流
三條流 實隆

尊鎮法親王 號桂蓮院 ─ 尊朝法親王 號龍池院又大聖院 ─ 尊純法親王 ─ 尊證法親王
　重政
　尊祐法親王

建部建文 ─ 賢義

荒木素白

山内俊貫 式部少輔 ─ 俊次 ─ 俊貞 ─ 俊章 首藤又右衛門

柴田勝周 ─ 山中廣亮

山内源五郎 ─ 篠田行休 ─ 明浦定考

布施勝美 ─ 屋代詮房 ─ 屋代佳房

行忠 世尊寺十三代 ─ 行俊 世尊寺十四代 ─ 行豊 世尊寺十五代 ─ 行康 世尊寺十六代 ─ 行季 世尊寺十七代

基春 持明院參議 ─ 良恕法親王 ─ 基定 持明院權大納言 ─ 基時 權大納言
　森重章

◎書道諸流派

○大師流 空海
　志津摩流 佐々木
　上代流 貫之、道風 ─ 法性寺流 忠道
　甲斐流 荒木敦道 俗ニ加茂流
　瀧本流 昭乘

靈元天皇流
園　流 基福
日野流 弘資

俊成流 五條三位
後京極流 身經
　定家流 京極黄門
　二條家流 爲家
世尊寺流 經朝
　尊圓流 青蓮院 俗御家流
　伏見院流
　後醍醐天皇流
　中院流 通村

宣方治部卿　惟繼大納言　賢悟寶金剛院　定尊圓滿院權僧正　長忠　尋源大僧都

雄尊大僧都　持純山名孫八郎　孝成曾我刑部大輔　秋共一爾參妙佐初飯河治部少輔　成定藤木氏　敎直藤木氏

秀實　秀實　雅實

將直　元知　家煕　道芳北小路宮内大輔後稱本庄　寂源俗名字直筑後高良山座主蓮臺院僧正　道韻松井宰相

重直　生直藤木甲斐守　司直藤木甲斐守　邦氏　氏梁

富雅　家孝　重威　保孝　愛德　胡保　長熙　眞仁親王　仁厚　氏祥　忠良　家厚　保誠　愛仁親王　敎仁親王

行成權大納言世尊寺祖入木道大祖　行經參議兵部卿世尊寺二代　伊房中納言世尊寺三代　定實右京大夫世尊寺四代　定信宮内權大輔世尊寺五代　伊行世尊寺六代

伊經皇太后宮亮世尊寺七代　行能右京大夫世尊寺八代　經朝左京大夫世尊寺九代　經尹宮内卿世尊寺十代　行房少納言世尊寺十一代

行尹世尊寺十二代　伏見院　尊法圓親王稱大乘院宮　慈道法親王稱十樂院

祐助親王　慈濟大僧正　道圓法親王　義圓准后　義快大僧正　尊應准后　尊傳號不違院

尊道法親王

◎書家系圖

弘法大師 光仁天皇寶龜五年甲寅誕生、桓武天皇延曆二十三年甲申入唐時に年三十一、唐德宗皇帝貞元二十年に當る韓退之三十七歲、白樂天三十三歲の時也、平城天皇大同元年丙戌三十三歲の時歸朝し承和二年乙卯寂す

嵯峨天皇 桓武天皇第二皇子平城天皇弟、大師より少きこと十二歲なり二十四歲即位、三十八歲讓位、嵯峨院に十九年在せられ承和九年七月十五日崩ず御年五十七

橘逸勢 大師と同時に入唐歸朝し承和九年八月十三日卒洛陽上に御靈の一座とまつる

敏行 武智麿の四男參議巨勢麿五男眞作の孫、陸奥守富士麿の男、貞觀十七年山城國高雄部神護寺の鐘銘を書せし人なり菅家三十一歲の時に當る

美材 小野保衡の子、延喜二年卒す本朝文粹に野大夫を傷むといへる菅家の詩あり先輩なること勿論なり

等まで大旨一體なり

其の後聖廟 菅家のことなり 拔群なり聖廟以後道風相續す此兩賢は筆體相似たり佐理行成は道風の體をうつし來たる野跡佐跡權跡此三賢を末代の今に至るまで 今とあるは尊圓法親王の時をいふ菅家より凡そ四百五十年許りなり尊圓法親王より嘉永二年まで四百九年に當る 此道の規摸としてこのむ面々遺風をうつす也(尊圓法親王入木抄)

○道眞 ── 道風

兼明親王
村上天皇
舉時
時文
佐理 兵部卿

行成
道長
公任 權大納言號四條
具平親王
昭平親王

定頼 權中納言
兼行 內匠頭
冬時
俊房 左大臣號堀川左府
兼任
覺融 號鳥羽僧正
成頼 參議號高野宰相入道
忠通

朝方 按察使權大納言號堤大納言
尹成 中務少輔
朝基 勘解由次官
範忠 內藏權守
基範 美作守
弘乘 阿闍梨
慈觀

○歌川豐春 一龍齋
一陽齋 歌川豐國
歌川豐廣
同 豐久
同 豐丸
子 同 豐信
門人 同 豐熊
同 廣昌
○安藤廣重
歌川廣恒
二世廣重
二世豐國 一龍齋香蝶樓 五渡亭初國貞
三世豐國 後二世國貞
貞虎
貞繁
貞秀
貞幸
貞景
歌川國芳
同 國重
同 國長
同 國政
同 國丸
同 國滿
同 國安
西川安信 同 國次
○豐原國周
歌川芳藤
落合芳幾
月岡芳年
水野年芳
右田年英
中山年次
稻野年恒
新井芳宗
筒井年峰
野坂年晴
山崎年信
田口年信
富永年親
金木年景
中澤年章
武內桂舟
二世國安
安信
橋本周延
長谷川周春
守川周重
松本芳延
降旗周里
○傳統未詳
懷月堂安慶
川枝豐信
歌舞伎堂
珠雀齋
珉江
東洲齋寫樂又東周齋

北鵞
柳川重信又雷斗初鈴木氏
雷周又雷洲
北泉二世戴斗
墨僊
北洲
泉壽
泉晁
泉橋
泉隣
泉里
○竹原春朝
男
同　春泉
○西川祐信
同　祐尹
小松原百龜
○鳥山石燕
狩野周信門
男
北川歌麿
菊麿後月麿
辰齋
雪麿
式麿
秀麿
二世歌麿
初戀川春町ト云フ勝川春章ノ名ヲ借用井タルナリ
細川榮之
榮理
榮昌
國直
國信
國彦
國家

二世 石川豊信
宮川房信 吟雪
二世春信 後司馬江漢 日本油畫ノ祖
永田田善
中村雷洲
○宮川長春
男 宮川春水 後勝川氏
男 勝川薪水
門人 勝川春章 初湯谷門人
宮川春童
勝川春英
同 春好
同 春潮
勝川春亭
二世 勝川春琳
勝川春紅
勝川春陽
勝川春玉
春和
春久
春青
勝川春扇 初春琳後春好
同 春山
同 春徳
同 春洞
同 春雪
○一筆齋文調
文康
柳文朝
文朝
○葛飾北斎 初勝川春朗後葛飾戴斗又前北斎爲一
魚屋北溪
二世北斎 後二世俵屋宗理
二世戴斗
岳亭春信
榮女
北馬
北代山
北壽
北雪
北嵩
菊川英山
三世宗理 後菱川氏
淺野英章
菊川英章 光一
同 英蝶
同 英里
同 英信
○池田英泉 溪齋
英春
英笑
英之

○大津又兵衛
○菱川師宣
初世 鳥居清信
長男 菱川師房
次男 菱川師永
菱川友房
菱川政信
山崎龍女
古山師重
重喜
師永
男 古山師政
同 清長
同 清經
清勝
清次
清久
清定
清廣
清時
五世 同 清峰
同 清滿
清之
清元
春潮 後俊朝
二世 同 清倍
三世 同 清滿
同 清重
同 清忠
西村重長
後石川豐信
近藤清春
同 清信
羽川珍重
同 政房
奥村政信 丹鳥齋
同 利房
北尾重政
同 政美 後鍬形紹眞
同 政演 山東京傳
窪 俊滿
湖龍齋 鈴木春信
磯田湖龍齋

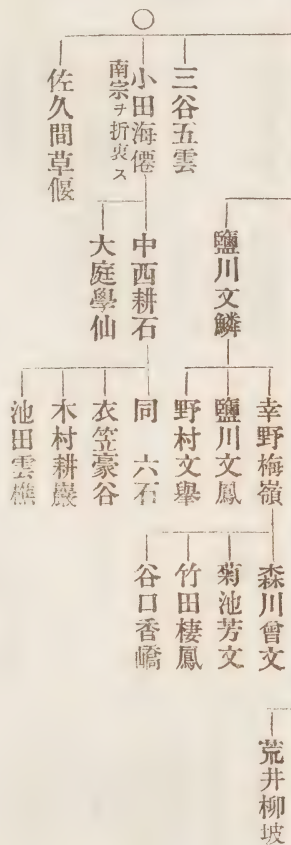
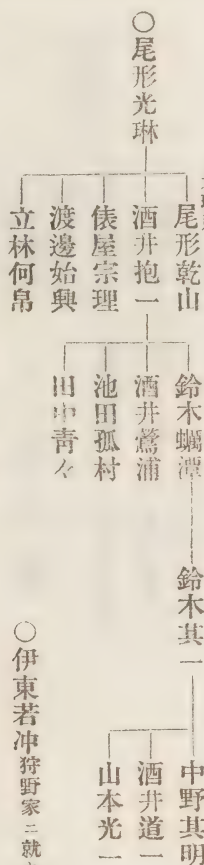
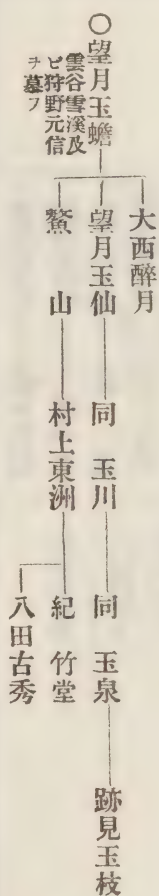
○浮世繪諸派

○岩佐又兵衞

○吉田半兵衞

○文晁風
○谷文晁
釧雲泉及ビ加藤文麗ニ參シ元明ノ大家ニ出入ス
淺野梅堂
高久靄崖
南宗ヲ折衷ス
谷口靄山
高久隆古
川窪蘭崖
目賀田介菴
遠坂文雍
鍬形惠齋
金子金陵
高　芙蓉
鈴木鳴門
鈴木少蓮
鈴木鵞湖
安田米齋
養子
谷　文一
谷　文二
春木南湖
春木南溟
春木南溪
端舘紫川
依田竹谷
喜多武清
喜多武一
渡邊玄對
立原杏所
渡邊華山
椿　々山
渡邊小華
野口幽谷
福田半香
猪瀬東寧
岡田半江
井上竹逸
渡邊赤水
片桐々隱
荒木寛快
荒木寛一
荒木寛畝
大西椿年
岡田閑林
清水曲河
佐竹永海
佐竹永湖
佐竹永邨
牧田水石
中山青崖

○市川君圭
張月樵
○中林竹洞
女 中林清淑
養子 中林冲岳
大倉笠山
梁川紅蘭
今大路悠山
勾田臺嶺
高橋杏村
○大雅堂風
祇南海
池大雅
柳里恭
僧 愛石
福原五岳
鼎 春岳
子 金城
林 閬苑
黒田綾山
岡 熊岳
戸田黄山
青木夙夜
佐竹蓬平
僧 月峯
僧 義亮
僧 證覺
子 僧 清亮
清人伊孚九及ビ大雅ニ倣フ初メ桑山玉洲ノ門
野呂介石
蔡徽
有竹
○北宗諸家
○蕪村派
○谷口蕪村
横井金谷
紀梅亭

○南宗諸家
○田能村竹田
田能村直入
帆足杏雨
平野五岳
十市王洋
長尾無墨
田能村小齋
上田琴風
○五十嵐俊明
呉俊明初狩野常信門
五十嵐子謹
五十嵐元誠
五十嵐元敬
門人
廣島維明
呉北汀
五十嵐竹沙
呉榕堂
白井華陽
岩田洲尾
五十嵐竹塢
松岡環翠
廣島如雲
廣島鼎介
○長町竹石
綾岱門
○木下逸雲
淸人江大來門人
川村雨谷
○僧鐵翁
淸人江大來門人
瀧和亭
村田香谷
大倉雨村
立花雲閣
○山本梅逸
藤堂凌雲
前田鴨堂
大出東皐
池田雲樵
○日根野對山
猪瀬東寧
野口小蘋
跡見花蹊

○
三谷五雲
小田海僊
南宗ヲ折衷ス
中西耕石
同　六石
谷口香嶠
衣笠豪谷
木村耕巖
池田雲樵
大庭學仙
佐久間草偃
鹽川文麟
幸野梅嶺
森川曾文
菊池芳文
竹田棲鳳
鹽川文鳳
野村文擧
荒井柳坡
○光琳派
○尾形光琳
尾形乾山
光琳弟
酒井抱一
鈴木蠣潭
鈴木其一
中野其明
酒井道一
山本光一
酒井鶯浦
池田孤村
田中青々
俵屋宗理
渡邊始興
立林何帛
○伊東若冲
狩野家ニ就キ後光琳ヲ慕フ
○玉蟾派
○沖　一峨
飯島光峨
○望月玉蟾
雲谷雪溪及ビ狩野元信ヲ慕フ
大西醉月
望月玉仙
同　玉川
同　玉泉
跡見玉枝
鰲　山
村上東洲
紀　竹堂
八田古秀

駒井源琦
鈴木南嶺
渡邊南岳
大西椿年
鈴木百年
森徹山
森一鳳
森寛齋
西村楠亭
吉村蘭陵
山口素絢
松浦舜擧
久保田米僊
鈴木松年
今尾景年
橫山華山
白井華陽
清水天民
吉田偃武
武田小鸞
○是眞派
○東々洋
一時狩野梅笑ノ弟子トナル
村田俊平
東東寅
鈴木南嶺
○柴田是眞
子
眞瀬木眞哉
柴田島女
庄司竹眞
○四條派
○松村月溪
呉春ト號ス
垣本雪臣
孔寅
紀東暉
廣年
柴田義董
弟
松村景文
龍春
西山芳園
西村西溪
岡本豐彦
熊谷直彦
○容齋派
○菊池容齋
松本楓湖
渡邊省亭
三島蕉窓
小磯前雪窓
中島亨齋
鈴木華村
尾形月耕
容齋ノ風ヲ倣ソ
阿部昇湖

宗仙
左近
氏信
興以
柳雪
梅軒
○圓山派
○圓山應擧
茁齋
八田古秀
柳澤淇園 柳里恭
僧月僊
龜岡規禮
土岐瑛昌
奥文鳴
森狙仙 圓山四條兩派ニ出ヅ
男 應瑞
應祥
應春
義子 應震
應立
二男 木下應受
門人 長澤蘆雪
同 蘆洲
○
英一蝶
時信
門人佐脇氏 嵩之
嵩雪
英之女
門人高氏 嵩谷
高嵩溪
義子 一峰
義 一舟
一川
一珪
後一蝶 一蜩
○岸駒派
○岸駒
森 鳳洲
松本文平
珉 和
池房專定
廣瀨順固
宮澤武曰
岸 岱
岸 慶
木田華堂
岸 良
義子 岸 連山
岸 竹堂
森 春岳
巨勢小石 金起
文 進
山田鶴山
河村文鳳
村上松堂
十

壽石
伯壽
洞元
洞琳
洞壽
主膳
乘昌
乘天
探雪 守定
探牛
尚信 木挽町狩野
常信
安信 宗家ヲ繼グ八代是レ也
荒井寒竹
寒雪 子
養雪 子
周信
榮川 古信
榮川 典信
養川 惟信
伊川 榮信
菊田伊洲
晏川
長命晏信
永悳
晴川 養信
勝川 雅信
峰信 濱町狩野 隨川
甫信 常信三男
幸信 常信
閑川 昆信
融川 寛信
舜川 昭信
友川 助信
董川 中信
橋本雅邦
寺崎廣業
下村観山
菱田春草
勝玉
應信
芳崕
良信
岡勝谷
山岡勝白
木村雅經
鍬形蕙林
樋口探月
五姓田芳柳 後油畫家トナル
探原 守經
守節
探美守貴
○小林永濯 永悳門人
小林永興
富岡永洗
洗耳
○六代 光信門人
○八代 安信門人
○六代 光信
七代 貞信
宗心門人
○八代 安信
九代 主信
梅雪

隆泉
松白
松榮二男
宗秀
眞說
往信
伯清
狩野氏
即譽
榮澤
舟川
周譽
探葉
探園
式部
杢之助
祖酉
素川
素川
五代
永德門人及別家
永德義子
京狩野家
山樂
光賴
光敎
山樂義子
山雪
永納
永敬
永伯
永良
永常
永俊
義子
永岳
永梢
永雪
門人
高田敬甫
島崎雲圃
小泉檀山
宋人
梁楷
友松
梁楷及永德門人
友雪
友竹
有泉
忠馬
五代
永德
六代
光信
孝信
探幽
名ハ守信
鍛冶橋狩
野ト稱ス
神足高雲
勝山琢舟
加藤遠澤
鶴澤探山
堀　索道
牲川光信
山崎如流
橘　守國
同　保國
鶴澤探鯨
同
探索
探泉
江村春甫
石田友汀
洞雲
駿河臺狩野
探幽養子別家ス
益信
洞春
福信
元仙
方信
洞春
美信
洞白
愛信
養子
洞益
春信
河鍋曉齋
桃田柳榮
同
柳昌
探信
探船
章信
探常
守富
探林
守美
探牧
守邦
探信
守道
探淵
守眞
久隅守景
守政
雪信女
山本素程
素川
宗川
八

十代 憲信 時信男
十一代 英信 主信二男
十二代 高信
十三代 泰信
十四代 邦信 探牧ノ子
○二代 元信門人
○二代 元信
三代 宗信
季賴
眞笑
了乘 秀頼二男
了琢
秀信
征信
元俊
春雪
門人 春賀
梅榮
門人 春潮
梅春
昌安
能菴
尊俊
單王
監物
玄也
中興
金玉仙
伯子
梅閑
養雪
周榮
快山
要清
慰俊
尊善
金龍
正祐
定信
意精
壽卜
元忠
養拙 狩野
清信 同
祖榮
光正 狩野
信春 同
宗珍 同
宗得
宗泉
○四代 松榮門人及別家
○四代 松榮
五代 永德
休伯 松榮五男
休伯
休伯
休圓
休宅
休由
休圓
休碩
玉燕
奈須宗泉
門人勝田氏 竹翁
宗泉
休山
松林
道關
小大丸
玉榮
宗知
友益
伯圓
泰仙

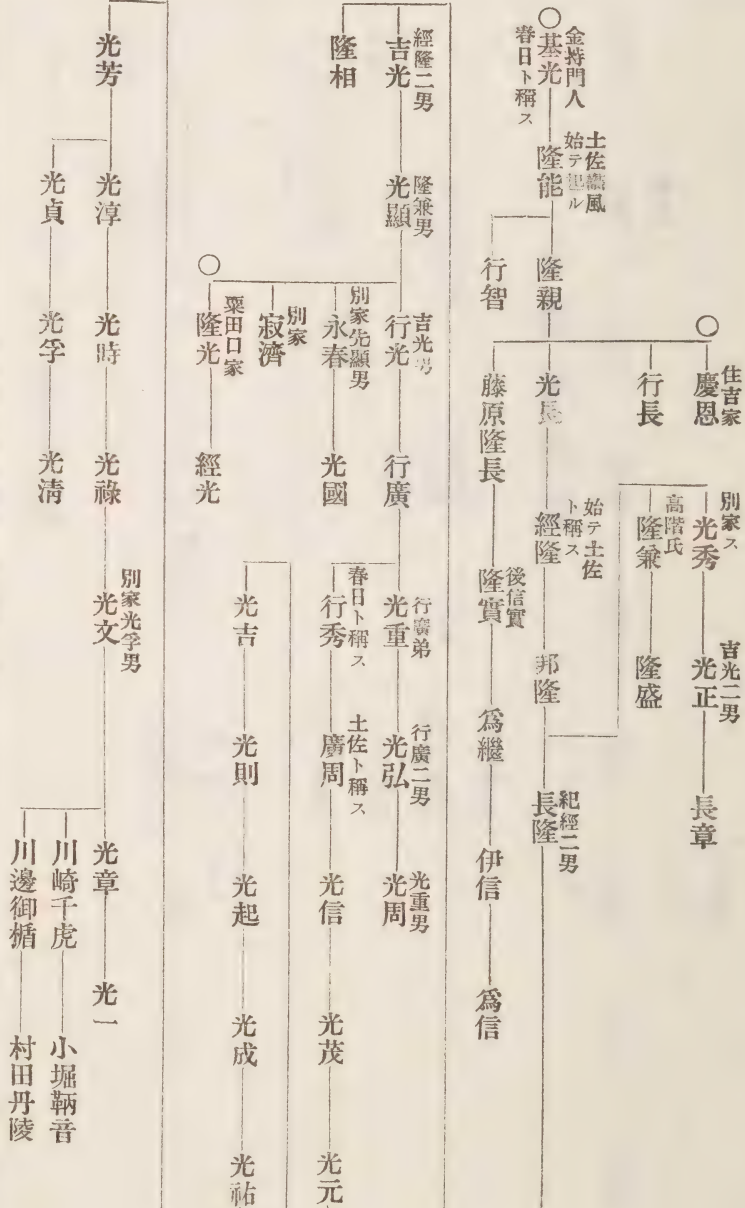
雪舟 等楊ト號ス
等顏 始メテ雲谷派ト稱ス
等益
等爾
等與
等坡
等耕
等傳
等藝
等梅
等譽
等禪
等春
等元
等楊
等清
等旦
雪堤
長谷川雪塘
山口雪溪
長谷川派
長谷川等伯
門人 等的
宗也
久藏
養子 等林
等作
雪鼎派
月岡雪鼎
墨江武禪
岡田玉山
石田玉山
春曉齋
子 雪齋
桂宗信
蔀關月
中井藍江
山月
子 關牛
水尾龍淵
菊川竹溪
林文波
鎌田巖松
女 應昇
山口闌山
佐武臥月
西村金嶺
高間六甲
玉手棠洲
木下蘆洲
狩野家系圖
初代 正信 鍛冶橋木挽町駿河臺三家ニ對シテ中橋狩野ト云フ
門人 一殊牧
弟 玉樂 元信門人
二代 元信 正信仲子
之信 雅樂助ト稱ス
季頼
三代 宗信
松榮 元信三男 名ハ直信
休伯
五代 永德 重信
孝信
六代 光信
山樂
七代 貞信
八代中橋狩野ト稱ス 安信 孝信三男
時信
九代 主信
英一蝶

一之
堪殿主
長存
濟翁
象光
靈彩
小栗宗丹 周文風ヨリ出ヅ
宗栗 男
曾我蛇足
宗丈
紹仙
宗譽
紹祥
曾我蕭白 蛇足風ヨリ出ヅ
紹叔
直菴
二直菴
道安
金溪
雲甫
墨隱
遮莫
○雲谷派
雪村
雪江
雪汀
雪洞
楊當
楊溪
楊門
楊月
等歲
秋月
等薩
等碩
雪林
春林
雪山
雪澤
雪閑
○堤等琳 雪舟ノ畫裔ト稱ス 深川齋ト號ス
泉守一
二世等琳
三世等琳 初雪山
孫二 雪峰
孫二雪丘
秋月
等舟 霞山
等川
秋琳
榮山
等明
等楊
等月 等船又雪村ト號ス
雪仙
等榮
泉山

巨勢弘高ト同時
○爲氏
長曆中ノ人
爲成
此間考フ可ラズ百年ノ差アリ
保安中ノ人
爲遠
爲久
滋賀
弟
勝賀
父子傳統詳ナラズ
爲行
成忍
或ハ云フ勝賀ノ子ト
支流
漢畫ノ筆法ヲ學ブ此ニ始マルト云フ
榮賀
榮賀同時ノ人
淨賀
支流
嘉曆中ノ人
了尊
支流
嘉曆中ノ人
淨宏
支流
永亨中ノ人
松谿
支流
○祥啓派
○祥啓
僧呼テ啓書記ト云フ
性安
○明光派
○明光
僧
呼デ兆典司ト曰フ
門人
如雪
門人
周文
慧麗
巴泉
鑑眞
宗觀
左素
仙可
野宮
偷閑齋
洞玄
玄照
富景
洞文
眞能
眞藝
眞相
四

源尊
有行
有忠
有茂
有久
有俊
宗久
俊久
有國
有義
久高
行高
有譽
行有
快有
[illegible]有
圓有
長有
有尊
正有
源有
重有
○田中訥言
藤原信光ニ倣フ
渡邊清
浮田一蕙
高隆古
帆山唯念
○原在中
同在正
同在明
同在照
同在泉
○宅磨家系圖

住吉家系圖
○隆親 土佐家
光長 土佐家
○慶恩 住吉家
某
某 此間畫系中絶廣通故受ケテ中興ノ祖トナル
廣通 土佐光吉二男 始テ徳川氏ニ仕フ
廣澄
廣夏 支流
廣保
廣守 中興
廣當 門人坂谷氏
廣長
廣行
廣尙
弘貫
守住貫魚 門人
山名貫義
遠藤貫周
前田貫業
粟田口慶羽 初近藤直方
二世慶羽 名直隆
珪羽
巨勢家系圖
○金岡
公忠
相見
公茂
公義
深江
弘高
是重
信茂
宗茂
益宗
兼茂
有宗
宗深
源慶
宗久
隆慶
永有
義隆
忠長
光康
有尊
有家
有康
堯尊
堯有
堯巖
有巖

◎畫家系圖
○土佐家系圖
○基光 金將門人 春日ト稱ス
隆能 土佐繪風始テ起ル
隆親
行智
○慶恩 住吉家
行長
光長
藤原隆長
光秀 別家ス
光正 吉光二男
長章
隆兼 高階氏
隆盛
經隆 始テ土佐ト稱ス
邦隆
長隆 紀經二男
隆實 後信實
爲繼
伊信
爲信
吉光 經隆二男
光顯 隆兼男
行光 吉光男
行廣
光重 行廣弟
光弘 行廣二男
光周 光重男
隆相
永春 別家光顯男
光國
行秀 春日ト稱ス
廣周 土佐ト稱ス
光信
光茂
光元
寂濟 別家
○隆光 粟田口家
經光
光吉
光則
光起
光成
光祐
光芳
光淳
光時
光祿
光文 別家光孚男
光章
光一
光貞
光孚
光淸
川崎千虎
小堀鞆音
川邊御楯
村田丹陵

一年表は、書畫名家の外、碩學鴻儒及び詩文歌俳より茶儀篆刻等に至るまで、一代に名あるものも、亦之を收錄せり。

一年表欄内の次序は、獲るに從つて之を錄せるのみ。其の前後を以て巧拙優劣等を表せるに非ず。

一年表氏名の下の數字は、其の年齡なり(例せば賴山陽五十三とあるが如し)而して其の年齡に諸說あるものは、最も眞に近しと考ふべきものを採り、明かならざるものは、氏名のみを揭ぐ。又高名の人にして、歿年月の明かならざるもの甚だ多し。此編これを除けり。

一古今三千載、其の間名流輩出、千萬何ぞ限らむ。此編讀書の緒餘、固より遺漏多し。然れども出群超倫のものは大抵此に具はる。滄海遺珠、將に他日を竢ちて之を『補遺』中に收拾せんと欲す。

編　者　識

凡例

一此編我國上古より現今に至る三千有餘年の間、書畫を以て世に稱せられたるものは、率ね之を網羅せり。

一諸家、名を以て行はるゝものあり。號を以て行はるゝものあり或は字を以て行はれ。或は通稱を以て行はる。此編其の行はるゝ所を以て標出し、搜閲に便にす。

一諸家の次序は、頭字の畫の多少に從ふ。

一編中名號の下に單に何某の名、何某の別號とのみ記せるは、其の何某を以て標出したるを示せる也(例へば六畫の中、老吾軒(佐藤一齋の別號)とあれば小傳は其の一畫の一齋に記せるが如し)

一卷末の年表は永正元年に始まり、明治四十三年に終はる。書畫の名流、遺墨の尙存、永正以前は、ともに少なきを以て也。

傳者。据實立傳。窃謂。完好得宜。爾來爲几上之珍。花晨月夕。夢醒茶熟之時。展書畫且參之。品驪黃。判駿駑。以自娛焉。書肆松山堂主人來告曰。先生自著自用。或可。而其益僅止於一人。猶明珠埋荆山。豈不遺憾耶。若使人汎用之。其所益蓋非鮮少也。請上梓以益于世。余曰。自著自用則足焉耳。而拙著果如子言。余何惜之。宜上梓以公于世也。乃爲之序。以與焉。

明治庚戌晩秋

夷山學人　杉原子幸　撰

序

書畫小傳世頗多矣。而未見完好得其宜者。偶獲名蹟。無由考其實。余嘗有書畫僻。研經鑽史之餘好讀諸傳。每獲一傳。抄錄以供備忘。歲月之久。堆積盈筐。余以謂。平生心血所注。不可付之蠹魚。則叩筐底。可刪則刪。可正則正。以頭字爲引。名曰日本書畫人名辭書。嗚呼我邦古今三千載。其間名流輩出。千萬何限。而此書余讀者之餘緒耳。豈得無遺漏哉。然諸書所載者。率網羅之。且有名而無

貢邨山田喜之撰并書

文字精雅之詞勉乎顧此書一出于世
後學之者一見瞭然怳然揭而曉於
閫室之奧異奧而其味可而乎
家之紀年跋元錄跋也必矣其裨
爲業職家業之者寔豈可鑑乃之
乃之序

明治庚戌冬十月上澣

亦非其書畫人名録著之書畫傳無
詳述而能獲佳不名蹟其由考其人
嘗與客論之友人杉原幸山而
多識博著書畫人名録皆可取手
手閲之雅古今藏遺大小所要者
嘗與之技溫知更生湯以佩文書
畫譜畫徴録其所遺者知見之詳

序

凡書畫之妙在筆韻高逸氣韻高然逸品在其人故不知其人雖書法之精湛筆戲丹青之美難所陸其味極鮮矣於異人或可不知其名也曷然翫其意味雖世彼思為聊又書畫譜畫源流等名家之傳果寫意耶

庚戌十一月集唐司空
圖二十四詩品句題日本
書畫人名辭書首
石埭居士周

如是渇了不取諸
隣遠引發至妙
契同塵俗者已領
與古為新

十畝寫

廣業

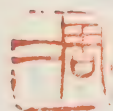
溪山落木
正蕭々聲裏
尋詩破寂
寥
米華

日下部鳴鶴先生題字

囊括大塊

庚戌菊花月

星変果首

日下部鳴鶴先生題字
山岡米華先生題画
寺崎廣業先生題画
荒木十畝先生題画

永坂石埭先生序
山田貢村先生序

杉原夷山
清水退軒
編纂

日本書畫人名辭書

東京 松山堂書店藏版

日下部鳴鶴先生題字　永坂石埭先生序
日本書
辭書
西澤藏書
東京
松山堂書店藏版

日本書畫人名辭書
上